

2014年度

教師海外研修プログラム(ケニア)

報告書



KENYA



2015年(平成27年)



独立行政法人 国際協力機構
九州国際センター (JICA九州)

目 次

I. 研修概要

参加者リスト	5
派遣前研修スケジュールとその様子	6
現地研修スケジュールとその様子	8
帰国後研修スケジュールとその様子	9

II. 海外研修報告書

大谷 眞 理	13
吉 永 早紀子	17
新 保 あゆみ	23
西 村 清 美	29
森 拓 也	36
原 口 俊 明	40
江 島 淳 子	45
黒 木 愛	50
田 上 康 二	56

III. 授業実践例報告書

大谷 眞 理	67
吉 永 早紀子	72
新 保 あゆみ	81
西 村 清 美	91
森 拓 也	100
原 口 俊 明	110
江 島 淳 子	120
黒 木 愛	128
田 上 康 二	142

※ 教員、および児童／生徒の原文を活かして掲載しています。一部表現や体裁のばらつきがありますがご了承ください。

※ 過去の実践事例を、JICA 九州のホームページに掲載しています。

<http://www.jica.go.jp/kyushu/enterprise/kaihatsu/kaigaikenshu/index.html>

I. 研 修 概 要

参加者リスト

参加教員

	県	所 属	氏 名	担当科目
1	福 岡	西南学院中学校・高等学校	大 谷 眞 理	英 語
2	大 分	大分県立 本耶馬溪中学校	吉 永 早紀子	英 語
3	福 岡	福岡市立 大楠小学校	新 保 あゆみ	全教科
4	宮 崎	都城市立 五十市中学校	西 村 清 美	英 語
5	宮 崎	宮崎県立 宮崎北高校	森 拓 也	地理歴史 (日本史)
6	長 崎	長崎県立 大村高校	原 口 俊 明	理 科 (物 理)
7	佐 賀	佐賀県立 三養基高校	江 島 淳 子	英 語
8	鹿児島	鹿児島市立 吉野東小学校	黒 木 愛	全教科 (理科・音楽除く)
9	熊 本	熊本市立 武蔵中学校	田 上 康 二	数 学

同行者

	県	所 属	氏 名
1	福 岡	JICA 九州	桑 江 直 人
2	福 岡	JICA デスク北九州	西 宮 奈緒美

地方マスメディア派遣

	県	所 属	氏 名
1	福 岡	西日本新聞	野 村 創

派遣前研修スケジュールとその様子

■ 7月5日（土）

時間		内 容
10:30	5	司会及び担当スタッフ紹介
10:35	5	JICA 九州挨拶
10:40	20	JICA 事業概要、教師海外研修趣旨説明
11:00	30	自己紹介（アイスブレイキング）
11:30	30	開発教育とは？ ・「開発」の意味について（What） ・何をめざすのか？（Why） ・どのような手法があるか？（How）
12:00	60	（ラ ン チ）
13:00	60	開発教育実践例紹介 事例発表：研修をどう授業に還元するか
14:00	10	休 憩
14:10	50	ケニアと日本をつなぐもの フォトランゲージ（3種類） A グループ：近代的、西洋的な部分を抜き取ったもの B グループ：発展途中的なもの C グループ：スラムや田舎の風景
15:00	30	ケニア情報①（情報提供：ケニア OV） （文化、言葉、タブー、歴史 etc.）
15:30	50	・ケニアの課題と日本の協力 ・ムエア開発事業（円借款） その他、ポイントとなる視察先の紹介 ○教育の役割（ジョモケニヤッタ・スマッセ） ○九州人協力隊・現地日本人学校の先生との交流 ○長崎大学 ○NGO ○動物センター
16:20	10	休 憩

時間		内 容
16:30	50	<p>●整理&ふりかえり</p> <p>①ケニアについてわかったこと</p> <p>②疑問に感じたことやもっと知りたいと思ったこと</p> <p>③ケニアと日本とをつなぐものとは？</p> <p>個人ふりかえり（10分）→グループ（20分）→発表（20分）</p>
17:20	10	事務連絡（明日のスケジュール等）、振り返りシート

■ 7月6日（日）

時間		内 容
9:00	15	アイスブレイク、昨日のふりかえりなど
9:15	30	事務手続き（渡航、保険、留意点他）
9:45	60	<p>授業実践のために⑤</p> <p>事例発表：研修をどう授業に還元するか</p>
10:45	15	休 憩
11:00	60	ケニア派遣への準備について、過去参加された先生との意見交換
12:00	60	ラ ン チ
13:00	60	<p>参加者ミーティング</p> <p>（役割分担、研修までの準備）</p>
14:00	30	<p>ふりかえり & 今後（渡航当日と帰国後）の流れ確認</p> <p>アンケート記入</p>
14:30		閉会の挨拶

現地研修スケジュールとその様子

		日 程
2014/7/30	水	福岡空港発 (KE790)
2014/7/31	木	ケニア空港着 JICA ケニア事務所にてブリーフィング 博物館見学 長崎大学関係者との食事会
2014/8/1	金	ジョモケニヤッタ農工大学 (JKUAT) モヨチルドレンセンター見学 ナイロビ日本人学校関係者との食事会
2014/8/2	土	象の孤児院見学 ジラフセンター見学
2014/8/3	日	ナイロビ発 (KQ656) キスム着
2014/8/4	月	長崎大学ビタ事務所の紹介 ビタ県教育局長表敬訪問 ビタ県保健局長表敬訪問 Dr. Williams Primary School 訪問 Wawere Secondary School 訪問 診療所 (Ang'iya Dispensary) 訪問 民家訪問
2014/8/5	火	漁村の見学 キスム発 (KQ657) ナイロビ着
2014/8/6	水	ムエア灌漑開発事業等視察 九州出身隊員 + JICA 専門家との食事会
2014/8/7	木	エンジニア農業局事務所前で青年海外協力隊員と待ち合わせ ナクル国立公園
2014/8/8	金	Getathuru Rehabilitation School マサイマーケット、スーパー (Nakumatt) 等で買い物 JICA ケニア事務所での報告
2014/8/9	土	ナイロビ発 (KE960)

帰国後研修スケジュールとその様子

■ 8月23日(土)

時間		内 容
11:00	5	あいさつ
11:05	5	帰国後研修の流れについて
11:10	60	授業実践のために① 「学習指導要領を踏まえた「国際理解教育・開発教育の普及」
12:10		昼 食
13:10	40	授業実践のために② 「地域でつながる国際理解教育」
13:50		休 憩
14:00	40	授業実践のために③ 「記者の目から見たケニアと日本」
14:40		休 憩
14:50	50	ケニア研修のふりかえり
15:40		休 憩
15:50	150	授業案作成 ①「ねらい」の絞り込み ②グループで共有→テーマ設定 ③授業案づくり (適宜休憩あり)
18:20	10	事務連絡(明日の日程確認等)
19:00		懇 親 会

■ 8月24日(日)

時間		内 容
8:45	15	オリエンテーション
9:00	10	集合、模擬授業準備など
9:10	180	模擬授業 ① Aグループ ② Bグループ ③ Cグループ
12:10	60	昼 食
13:10	60	ふりかえり
14:10	10	今後に向けて
14:20		解 散

Ⅱ. 海外研修報告書

学 校 名

西南学院高等学校

氏 名

大 谷 眞 理

担当教科

英語科

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

- どんな状況にあっても、“Tomorrow will be a better day”と笑って眠りにつくこと。
- あらゆる人や物事・状況に対して Forgive（赦す）こと。「それでいいよ」と言えること。
- 家族を持つこと。

2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

- Ana nchi yake simba, ana maji yake mamba.
ライオンにはライオンの国があり、ワニにはワニの水（国）がある。
- Milima haikutani, lakini binadamu hukutana.
山と山は出会わないけど、人同士なら出会えるものだ。
- Mema tuombeane mabaya tusameheane.
お互いの幸福を祈りあい、悪いことは許しあおう。 （以上、スワヒリ語の諺から）

3 教育指導への活用について

- 一回のみの授業とならないよう、継続的に国際理解・開発支援について語り継いでいく。
- 「何のための国際協力なのか」「国際支援は、開発国のためになっているのか」など、自分の五感で得たものを客観的に伝える。持論の押し付けはしない。
- 生徒のやわらかい感受性に訴える。できれば、教職員にも感化を与えたい。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

- さまざまな形の国際協力の現場に行き、世界の現状や課題をリアルに体験できる、たいへん有意義な研修だった。
- 支援そのもの以外にも、そこに関わる日本人の生きざまを知った。自分の生を重ねて考える絶好の機会となった。

5 JICA に対する要望・提言

- 今回の海外研修は、とりわけ治安の悪いケニアで、現地の素の部分を見ることができた。わたしたちの健康と安全を第一に企画・準備・実施・後始末などをしてくださり深く感謝。
- できれば開発国での旅行に慣れていない参加者・女性のことも考慮していただければありがたい。たとえば、夜は2日に1回は9時前にホテルの部屋に戻れるように調整をしていただけると、体調不良者やツインの部屋の人がリフレッシュできると思う。
- 事前研修で、とにかく写真を撮ることを助言されたが、やはり現地の人には嫌がっていた。また物をあげることに對しても、事前に共通見解が必要と感じた。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

- 健康第一。研修前に仕事を頑張りすぎないように。
- 事前・事後研修等を含め、かなりハード・スケジュール。しかし全てが益となる。
- まずは参加すること。開発教育のアイデア（授業プラン）は、おのずと湧いてくる。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月31日(水)	JICA ケニア事務所 ケニア国立博物館 長崎大学関係者との夕食	<ul style="list-style-type: none">●「寒い！」これが空港での第一声。●ナイロビ市内への移動中、夜明け前から仕事に行くのか足早に通勤する人の姿を車窓から追いかける。顎のラインのシャープなガードマン、太っていても痩せていても見栄えのする女性の美しい肢体。やはり人間のルーツは、アフリカなのだろうか。●ケニア国立博物館では、校外学習に来ていた子どもたちと手を振りあい、ハイタッチ。子どもたちの手の温もり、一緒に遊ぶ笑い声の軽やかさ。
8月1日(金)	ジョモ・ケニヤッタ農工大学 モヨ・チルドレン・センター	<ul style="list-style-type: none">●1年半前に比べてナイロビの車の量が圧倒的に増えていること（それも新車）に驚かされる。経済成長率は6倍以上とか。そのおかげで、どこに行くにも渋滞・渋滞・渋滞。●JKUATの角田先生のVision・Passion・Effortに脱帽。「最先端でなくていい、この国の実情に合ったInnovation」「8割失敗しても、その過程が大切」とは角田先生の弁。こういう人が、国を変えていく大きな原動力となることに感動を感じる。

日 時	訪 問 先	所 感
		<p>●モヨ・チルドレン・センターでは負のスパイラルから抜け出そうと、もがいている子どもの姿を目の当たりにする。ナイロビの Street Children に帰る家をつくっている松下さんの本気の愛。</p> <p>横に座った少年は、私のスワヒリ語のノートを見て「読みたい」。そして一語一語、声を出して読んだ。</p> <p>●午前中のエリート大学生とのモヨの子ども。この国の光と影のコントラストを実感する。</p> <p>同時に、日本においても明と暗に存在している子どもに思いを馳せる。</p>
8月2日(土)	象の孤児院 ジラフ・センター Utamaduni での買い物 ロート阿子島さんと夕食	<p>●いわゆる観光地で、観光客に外貨を落としてもらうスポット。ヨーロッパのみならず中国・インド・中東の富裕層の観光客が多い。</p> <p>●昨日のモヨの子どもと違い、きれいな服に身を包んだ、両親に愛されている子どもの姿を眺める。</p> <p>●阿子島さんから、ケニアが先行型利益の欧米型市場であることや、ケニア人の性格、男女がお互いのどこに惹かれるかなど興味深い話を聞く。</p>
8月3日(日)	キスム経由ビタへの移動	<p>●フェリーの中で聾啞の少年たちと日本クイズをして遊んだ。日本の位置がわからないとポケットからスマホを出してきたことにビックリ。</p> <p>固定電話がないのに、スマホ。銀行がないのに M-Pessa (ケニアのモバイル送金は世界一) といった具合に、開発途上国は文明がスキップで入ってくる。</p> <p>●キスムからビタへの舗装道路。センターラインも路肩もある、この立派な道路は中国の造ったもの。ケニアの道路や橋はそのほとんどが中国製である。</p> <p>中国人はアフリカに来て、自国には戻らない。アフリカに来て民主主義を初めて知るのだ。</p> <p>●箱モノ開発の中国に対し、衛生・教育・農業・環境など目には見えない日本のような支援の形について考える。</p>
8月4日(月)	長崎大学ビタ事務所 ビタ教育局長・ビタ保険 局長訪問 PrimarySchool 訪問 SecondarySchool 訪問	<p>●明け方から、ジャングルのような様々な鳥のさえずりや動物の鳴き声が音楽のように聞こえてくる。</p> <p>5時半頃には男性の歌声が加わり、目が覚める。</p> <p>●熱帯医学の源流は軍人のための植民地医学だったが、現在は違うこと。Nile Treaty を始め、アフリカは植民地時代の負の遺産を未だにたくさん抱えていることを知る。</p> <p>●嶋田教授が「自分の研究が果たしてケニアのためになっているかと問われれば、好き勝手にやっていると言うしかない」と。その潔さが格好良い!</p>

日 時	訪 問 先	所 感
		<p>●ビタ教育局長の訪問は、局長の祈りによって始まった。学校でも生徒のほとんどがキリスト教なので「主の祈り」など壁に貼ってある。</p> <p>●Secondary School は日本でいう中3から高3の生徒が在籍。制服を着ていないと、オジサン・オバサンのような貫禄で、二言目には「何かちょうだい」「日本に行きたいから、スポンサーになって」と言う生徒も少なくなかった。これは挨拶のようなものだというが・・・</p>
8月5日（火）	漁村の見学 ナイロビに帰る	<p>●ビタの若い漁師。「自分はビタで生まれ育った。山の中腹に家があり、舟の傍らで網を洗っているのが妻。子どもは3人いる。幸せだ。」大人でこんなに無邪気に笑う人を私は久しぶりに見た気がする。</p>
8月6日（水）	ムエア灌漑事業の見学 九州出身の隊員との夕食	<p>●ムエアはケニア最大の米作地帯。ケニアではパサパサの古米がスープに浸み込みやすいと好まれる。また Cash Crop として高値で取引される。</p> <p>●アフリカの人口増加に伴い、食料難が問題に。 また女性の社会進出により、近年、調理しやすい米が好まれる傾向にある。</p>
8月7日（木）	エンジニア農業局 ナクル国立公園	<p>●長瀬隊員は、歩いていると現地の人と出会い一緒に BIO 農業を始め、歩いていると牛の飼い主に出会った。私も歩いていてケニアの様々な人たちに出会っている。</p> <p>●国立公園では入場に時間が掛かり、私たちはバブーン（大型ヒヒ）を撮影した。一方、アフリカの子供には日本人が珍しいようだった。（絶滅危惧種?）</p>
8月8日（金）	Getathuru 更生施設見学 マサイ・マーケット JICA ケニア報告	<p>●この更生施設の名前は Get Through（困難を切り抜けろ）に由来している。 毎日のように警察が一人二人少年を連れてくる。 ほとんどすべての部族の少年がおり、マサイ族の少年は、みんなに「マサイ」と呼ばれている。 自己紹介のときに日本語の「こんにちは」と「ありがとう」を教えると、帰り際、口々に「Arigatou!」と言ってくれた。</p>

学 校 名

中津市立本耶馬溪中学校

氏 名

吉 永 早紀子

担当教科

外国語（英語）

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

研修で出会った現地の人々、異国で頑張る日本人との出会いから見えてきたのは、実はとてもシンプルな答えでした。「生き抜く力」を一言で定義するとすれば、今の私の答えは「共生力」です。ここで言う共生は、自然環境、動物、そして人間とつながる力を指します。ケニアを訪れて、この共生力の強さを感じました。特に、人間同士がつながる力は、便利さと引き換えに今私たち日本人が少しずつ失っている部分ではないかと感じます。生活環境が悪くても、貧しくても、たくましく生きるケニアの人々の姿。そこには、お互いを頼り、そして支え助け合う生活から自然と生まれる「共生力」を感じずにはいられませんでした。

2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

本研修を通して、英語教師としてはもちろん、一教師として知識と経験の幅を広げることができました。自分が成長することで、自分の言葉・行動・授業が成長する、そしてそれらを受け取る生徒が成長すると思います。そういった意味で、今回の研修を通して得た自分の人間としての幅の広がり、必ず生徒に返していけるものだと思信できています。

また、日本から一万キロ離れたケニアを訪れたことは、結果として自分自身と母国を見つめ直すことに繋がりました。自分が持っているものと持っていないもの、日本の良さや課題が、ケニアを通して鏡のように見えてくる毎日でした。そして、この研修を通して一番大きく芽生えたのが「自分にとっての幸せの形とは何か」という思いです。「私たちは恵まれている」「日本は恵まれている」とよく言いますが、恵まれていることが幸せに直結するわけではないと分かりました。「幸せという心の状態」は、自分が何に恵まれているかを自覚し、その恵に心から感謝できた時初めて得られるものだ、と思うようになったからです。国、人種、宗教、環境により、それぞれの幸せの形があります。ただ、その違いの中には、「あってはならない違い」があります。国際協力や国際支援が目指すべきは、その「あってはならない違い」をなくしていくことなのではないかと思っています。

子供たちには、「幸せという心の状態」「あってはならない違い」に加え、「自分を成長させたい」という思いが自分の道を作っていく」ということをこれから伝えていきたいと思っています。私たちは、幸運にも「努力が報われる国、自らの未来を選び作り出すことができる国」に生まれました。この環境を無駄にせず、より良い自分を求める姿勢を持った「自分の足で前進する生徒」を育てていきたいと思っています。

③ 教育指導への活用について

総合や道徳において、大きく以下の3点が柱となります。

- 「あるからこそ素晴らしい違い・あってはならない違い」から考える国際理解・協力のあり方
- 海外協力隊の活動から、自分にできる支援・協力を知り考える
- 「千差万別の幸せの形」を認め合うことによる他者理解・異文化理解

④ 研修に関する全般的な所感／意見について

まずは、JICA 九州、JICA ケニア事務所のみなさんを始めとする、本研修に関わる全ての方に心から感謝します。個人旅行では決して訪れることのできない場所での経験は、これからの教員人生だけでなく、私個人の人生においても宝物になりました。国際理解・協力を進める上で、日本が途上国とどう関わっているのかを、私たちの領域である教育はもちろん、その他の側面から見せて頂いたことで、自分の中で散らばっていた点と点が繋がっていくのを感じることができました。本当にありがとうございました。

⑤ JICA に対する要望・提言

来年度の研修がさらに実りあるものになるよう、以下3点を提言させて頂きたいと思います。

- ① 学校への訪問において、その事前準備（現地研修初日の夜など）と当日交流の時間を少し余裕を持って確保して頂けたらと思います。今回の学校訪問では、時間の都合で子供達が準備していた出し物が全てできなかつたり、滞在時間が短くなってしまったり、受け入れてくださった相手に本当に申し訳ない思いでした。「日本人が遊びに来た」ではなく「日本人が何かを残していった」と感じてもらえるよう、もう少しきちんと準備した上で交流ができたらなと思いました。
- ② 資料・教材を集める（購入する）時間を確保して頂けると、帰国後の実践に役立つと思います。生徒達は、実際の物や視覚教材に強い興味を示します。スーパーで購入できるような普段何気なく使っているものであっても、そこから見えてくる文化や違いがあります。そういった教材から実践に繋げることができるのではないかと思います。
- ③ 一日を振り返り次の日の研修に備えるために、夜の時間をある程度確保して頂けると、それぞれの中で研修を深めることができるかと思います。夜は、現地で活躍する日本人の方との会食が多く、色々な方のお話を聞くことのできる貴重な場でした。同時に、12日間というスパンで考えると、少しタイトなスケジュールでもありました。今後は、良いバランスを見つけていけると良いと思います。

⑥ 今後の本研修参加者へのアドバイス

訪問する国や訪問先について、出発までに可能な限りのインプットを行っておくと、研修の吸収率が全く違うと思います。私自身は、物理的な準備や学校業務に追われ、事前研修で頂いた資料等を十分に学習しておくことができず、帰国後に「読んでおけばよかった、観ておけばよかった」と反省しました。

また、出発までに何か一つ自分の中でテーマを決めて「授業構想（道徳、総合など）」を練っておき、その中で「現地でこれを手に入れてこよう！」という的絞りをしておく必要があると思います。「現地で集めたものを帰国後繋ぎ合わせる」という形になってしまわないよう、生徒に還元したいものを一つ見据えておくと思います。

⑦ 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月31日(木)	① JICA ケニア事務所	多くのスタッフの方に出迎えて頂き、大きく以下の二点についてお話を頂きました。 ◆ケニアにおける JICA 事業 ◆ケニアにおける治安情勢及び安全対策について 「国際協力」となると、職業柄やはり「教育面」や「協力隊」に目が行きがちでしたが、技術協力や円借款、無償資金協力など、支援の在り方は様々で、その規模も億単位のものから各地域での草の根活動と、本当に幅広くあることを改めて確認できました。
8月1日(金)	② JKUYA ③ モヨ・チルドレン・センター	●初代ケニア大統領であるジョモケニヤッタの名前が使われている「ジョモケニヤッタ農工大学」は、1981年に日本政府からの援助を受け創設されました。ケニアにある7つの国立大学の一つであるこのJKUYAを訪れ、日本がどれだけ深く、そして長くケニアに関わっているのかを肌で感じました。 ●1999年、日本人の松下照美さんがケニアのストリートチルドレンの未来を支えるため活動を始めたNGOです。数時間の短い滞在でしたが、子供達の自己紹介と夢を聞いたり、一緒に「だるまさんがころんだ」で盛り上がりたりと、最高に楽しい時間を過ごしました。一方で、彼らがモヨにたどり着くまでの過酷な道のりを知り、心が痛みました。帰国後は、この出会いも大切な縁と思い、早速「モヨ・チルドレン・センターを支える会」に入会しました。自分にできる形で子供たちを支えようと思います。

日時	訪問先	所感
8月4日(月)	④長崎大学熱帯医学研究所	<p>●ナイロビから西へ約400キロ離れたビタ地区にある「長崎大学熱帯医学研究所」。日本の大学がアフリカに作った初めての本格的な研究教育拠点で、当日は嶋田先生の講義を受けさせていただきました。研究所ができるまでの歴史的経緯から感染症についてなど、興味深い学習ができました。特に印象的だったのは、日本の約10%に対して、アフリカでは感染症死亡が70%以上であるという事実です。また、「アフリカでの研究はアフリカのためだけではない」という先生の言葉も、奥深く納得できるものでした。</p>
	⑤ビタ県教育局	<p>●ビタの教育長さんから、ビタには134のprimary schoolと34のsecondary schoolがある、ECDE (Early Childhood Development & Education) に力を入れているなど、ビタ地区の教育についてお話をしました。地区の教育環境向上への思いを感じました。</p>
	⑥ビタ県保健局	<p>●一般家庭や学校施設において、公衆衛生に大きな課題があることなどをお話をしました。ビタ地区では、トイレを備えた一般家庭はほとんどありません。また、ビクトリア湖に面していることから、湖での洗濯が日常化しています。こういった実態から、安全な水の確保や上下水道の整備など、これから取り組む課題が多いことが分かりました。</p>
	⑦ Dr Williams Baptist Primary School	<p>●到着予定時刻を大幅に過ぎての訪問となった学校訪問でしたが、校長先生を始めとする先生方と生徒たちは最高の笑顔で迎えてくれました。私たちを歓迎しようと、一生懸命練習したのが伝わる歌や踊り、詩を見て、純粹に心から感動しました。持参していった日本に関するクイズや長縄も大好評で、最高の時間でした。中庭や各教室にある水タンクには「JICA」の文字があり、日本とケニアの繋がりを実感しました。</p>
	⑧ Waware Mixed Day Secondary School	<p>●生徒たちを長時間待たせてしまった2箇所目の学校訪問。在籍する生徒たちは日本の中3～高3にあたり、ぐっと大人びた印象でした。ここでも生徒たちは笑顔で私たちを迎えてくれました。話しかけてくれた女子高生2人は、「私は将来弁護士になりたいの!」とステキな笑顔で語ってくれました。</p>
	⑨ローズさん宅	<p>●ビタ地区の民家訪問として、ローズさんが私たちを自宅に招いてくれました。ローズさんは旦那さんを数年前に亡くしており、部屋には旦那さんの写真がたくさん飾られていました。ナイロビに住んでいる娘と、一緒に暮らしている息子がいます。「息子の進学のためにスポンサーになってもらいたい」とおっしゃるローズさんを見て、支援のあり方について複</p>

日時	訪問先	所感
		<p>雑なものを感じるところもあり、考えさせられました。</p>
8月5日(火)	⑩漁村 KOGUNA	<p>●ビタ地区最後の訪問先は、湖沿いにある漁村。夜から朝にかけて男性達が漁に出かけ、連れた魚を日中女性達が天日干しにし、その魚を売りながら生計を立てている村です。村の人たちはとてもフレンドリーで、とてもおだやかな時間の流れを感じました。一方で、学校に通っているべき年代の子供達が何人もいるのを目にし、教育よりも家や村の仕事を優先する・せざるを得ない実態も垣間見ることとなりました。</p>
8月6日(水)	<p>⑪ムエア灌漑局</p> <p>⑫ムエア灌漑農業開発センター</p>	<p>●ケニアの中で最も稲作が盛んなムエアを訪れ、日本工営の柚木さんから灌漑事業についてお話して頂きました。JICAが行うこの開発事業は、小規模農家の収入向上が目的とされています。ダム一つの建設そのものにかかる費用や時間、どれだけの規模で進んでいる事業なのか、お話を聞きながらその壮大なスケールに圧倒される思いでした。</p> <p>●ここでは、ムエア地区での日本の協力の歴史などをお話頂きました。センター内を歩き回ると、日本から寄付された農業機器がたくさんあり、農業を架け橋とした両国の繋がりを見ることができました。</p>
8月7日(木)	<p>⑬エンジニア農業局事務所</p> <p>⑭ナクル湖国立公園</p>	<p>●ナイロビから北へ約100キロに位置するエンジニアという町。ここで活動する村落開発普及隊員の永瀬さんを訪ねました。現地の人たちと同じように生活しながら、彼らと共に地域の活性化に向けて農業に取り組む永瀬隊員の生活から、協力隊とは何か少し分かったように思えました。何かをしてあげよう・助けてあげようという気持ちで関わるのではなく、同じように生活する中で共により良いものを目指していけることが、協力隊の活動の強みだと思います。</p> <p>●エンジニアの町からさらに北西に走ると見えてくるのがナクル湖国立公園です。そこで環境教育隊員として働く堺田隊員の活動の様子を見せていただきました。1年に満たない現地生活にも関わらず、流暢にスワヒリ語を話し現地の人と繋がっている堺田隊員を見て、ここでもまた、現地住民の一人として同じ目線で活動する協力隊の姿に感動しました。</p>

日 時	訪 問 先	所 感
8月8日（金）	⑮ Getathuru Rehabilitation School	<p>●佐賀県出身の協力隊員古賀さんの派遣先である男子更生学校を訪問しました。様々な問題・課題を抱え入校してくる子供達を3ヶ月間預かり、生活を共にしながら更生の手助けをする様子を見せていただくことができました。子供たちとは、紙飛行機や長縄、風船などで一緒に遊んだり、サッカーの練習風景を見せてもらったりと、とても充実した時間を過ごすことができました。交流を終えたあと、古賀隊員が流暢なスワヒリ語で子供達に真剣な顔で何か話していました。アフリカの子供たちは、「もらうこと」に慣れすぎている面があるとよく感じるため、「感謝の気持ちを忘れるな」と伝えていたそうです。ここでも、「ものをあげるといふこと」や「支援のあり方」について考えることとなりました。</p>

学 校 名

福岡市立大楠小学校

氏 名

新 保 あゆみ

担当教科

小学校全科

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

JAKUATでの田中専門家のお話や長崎大学の皆さんの活動や青年海外協力隊の方々などの活動の様子から、自身の得意な事や活動するフィールドを生かし、目の前にいる人たちの文化や習慣を理解し、そこの人たちに合った支援を考え、現地の人たちと一緒に協力しながら取り組んでいく力が国際協力の場において日本が世界の中で「生き抜く力」の1つではないかと考えます。

今回のケニア訪問から、ケニアの子どもたちや大人のように、国や見た目が違って相手にも興味を持ち、自分から関わろうとする力が他人とつながりを持ち、相手を思い、他と協力する力になり、さまざまな社会の中で「生き抜く力」になるのではないかと思います。

2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

アフリカというひとくくりで考えがちだったことが、ケニアの様々な場所を見たり、同行して下さった西宮さんの協力隊時代のガーナの話の聞いたりすることで、アフリカの中のそれぞれの国という感覚で考えられるようになりました。また、野生動物が多く、マサイ族が有名なケニアというステレオタイプのイメージが、ある意味特殊であったということに気づかされました。民族は様々であり、それぞれ部族語があり、スワヒリ語と英語と3つの言語を使い分けていることやサバナ気候といっても場所によって植生が大きくことなることなど、面白いことがたくさんあることを知りました。また、1つの国を調べれば調べるほど、現地の人と話せば話すほど、様々な姿が見えてくることを実感しました。研修で発見したケニアのおもしろさや外国を知ることのおもしろさを子ども達にも伝えていきたいと考えています。

3 教育指導への活用について

6年生の社会科において、JICAやNGOの国際支援に取り組む組織についての学習や青年海外協力隊など、人に焦点を当てることで取り組みの具体例として学習することにつなげていきたい。また、キャリア教育という視点から、国際支援に関わる方々を取り上げることで、子ども達の今後の進路を考えるきっかけにつながる学習にもつなげていきたいと考えています。

外国語活動や道徳の国際理解という視点から、ケニアという国の面白さや日本との違いや共通点などに触れる学習を行っていききたいと思います。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

JICA という組織の概要や開発教育に対する理解や手立てについてのレクチャーや開発教育の授業実践の紹介、前年度参加者の先生方との時間が設定されていることで、事前に分からないことが質問でき、訪問前の準備としてどんなことが必要なのか具体的に理解することができました。

研修内容がかなり充実したものであり、一つひとつの訪問先での経験が貴重なものになったこと、安全面で全く不安に思うこともなく、毎日過ごすことができたのも JICA 九州や JICA ケニア事務所の皆様をはじめ、本研修に携わっていただいた多くの方々のご協力のお陰だということであらためて感じた研修でした。普段の観光旅行では訪問できない場所や経験できないことが多く、この研修に参加させてもらって本当によかったです。また、本研修を通して出会えた方々との出会いも貴重な経験の一つです。さまざまな国際支援の仕方や現状を実際に現場に行き、自分の目で見て、話を伺い、感じることで、色々な立場で携わっている方々の存在や資料や言葉からだけでは分からないこと等、多面的で、より深い部分での理解ができたと感じています。本当にありがとうございました。

この研修がなかなか周知されていないことを残念に思います。自身も経験者が近くにいることがきっかけでこの研修に参加しようと思ったように、少しでも多くの方にこの研修が知られるように、いろいろな方法で発信していければと思っています。

5 JICA に対する要望・提言

事前研修のアンケートを受けて、現地校訪問を予定に入れていただいたのは、本当にありがたいことでした。ただ、できることであれば、昨年度のように数校の学校訪問を設定していただきたかったです。ケニアの都市と田舎の違いが学校の様子でも見られるのかどうかは分かりませんが、ケニアの学校を紹介する際に、訪問した田舎の学校 1 校だけを紹介するよりも、何校か紹介できる学校がある方がまた違った印象を児童に与えることができるのではないかと感じました。

長期間の研修であるということ、毎日数時間移動をしながらの研修であることは想定していましたが、体調面も考慮して考えてみると、1 日のスケジュールが朝から晩までぎっしりとつまりすぎているのでは…と感じることが多かったです。一つひとつの訪問先で、いろいろ尋ねていると、どうしても滞在時間が予定時刻よりも長くなってしまったことや特に移動時間や食事時間など現地事情などでスケジュール通りにいかなかったことを考えると、もう少し時間に余裕をもったスケジュールを組んでいただけるとよりよかったですのではないかと感じました。こちらの事情で、大幅に訪問先を待たせてしまったことについては、申し訳なく感じました。

夜の解散時間が遅く、次の日の出発が早かったこともあり、夜はホテルで 1 日の振り返りをする時間や心身を休める十分な時間がもう少しあればよかったですと感じました。

授業をするための教材を収集するという観点から、観光客向けのお土産ばかりを売っているような場所よりも、地元の人も利用するスーパーや大型モール内である程度まとまった時間をとってもらうことで、本屋や CD 屋など、教材にしやすいものが多く売っている場所でももう少し考えながら教材を集めることができたのではないかと感じました。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

虫除け対策は、日本国内で販売されている物とケニア国内で販売されている物は、成分（ディート）が異なり、予防にはケニア国内で購入可能な虫除け（ディート成分 50%）がより効果があるそうです。但し、自身の体質に合うかどうかとも考慮する必要があるそうです。個人的には、訪問中、ケニアの薬局で購入した虫除けを使用していて、蚊にさされることはありませんでした。

毎日充実したスケジュールであり、移動が多かったため、しっかり睡眠をとるようにしました。ゼリー飲料などを持っていると、体調が優れずに食事がとりにくい時にも栄養補給ができ、役に立つのではないかと思います。

切手は、大きなモール（今回は、ヤヤセンター）内に郵便局があり、そこで購入することができました。記念切手は、ケニアで見られる動物写真や有名な施設写真などがあり、それを貼った葉書を残暑見舞いとして、児童や家族に送りました。JICA ケニア事務所より投函していただき、約 1 週間で日本に届きました。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月31日(木)	<ul style="list-style-type: none"> ・ JICA ケニア事務所訪問 ・ ナイロビ国立博物館視察 	<p>○一見、犯罪が起きそうもない街の雰囲気であるが、強盗など危険な目に遭っている現地外国人がいるのだということやマラリア対策として、予防薬の存在や日本では手に入らないディート 50%の虫除けが存在することを初めて知った。</p> <p>○博物館見学に来ている幼稚園生や小学生を多く見かけた。外国人に対して興味があるのか、とても人懐っこく、ハイタッチや握手など笑顔で答える子が多く、人懐っこくてかわいかった。子ども達と一緒に写真を撮ることを担任の先生に伝え、快く引き受けてくれるところばかりだった。</p>
8月1日(金)	<ul style="list-style-type: none"> ・ ジョモケニアアッタ農工大学訪問 	<p>○アフリカ 54 か国の若手人材育成を目指す汎アフリカ大学構想（ネットワーク大学）は、とても斬新な取り組みで面白いと感じた。ケニア国内や汎アフリカ大学構想の東部アフリカ地域の拠点校として重要な大学の 1 つである JKUAT に長年にわたって、日本人が関わってきたことのすごさを感じた。また、角田さんの話の中で、「イノベーションをする中で、失敗しても OK だ。その過程で得るものが多ければそれに価値がある。」という言葉は、自分の教育現場</p>

日時	訪問先	所感
	<ul style="list-style-type: none"> ・モヨ・チルドレンセンター訪問 	<p>でも大切にしないといけない考えだということであらためて感じさせられた印象的な言葉だった。</p> <p>○子ども達の人懐っこさや自分の名前や将来の夢について、英語で自己紹介している姿が印象的だった。また、過去の出来事から、安全面を配慮した警備システムが施設や子ども達とのきまりとしてあることに、安全にケニアで生活することの現実を知った。</p>
<p>8月3日(日)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ナイロビ→キスム→ビタ移動  	<p>○ケニア航空のCAに日本語で話しかけられたとても驚いた。聞けば、お父さんが日本人でお母さんがケニア人で、小学校6年生までナイロビ日本人学校に通い、その後、現地の学校に通ったという。ネームプレートをよく見るとIKEDAとあり、とても気さくな方だった。面白い出会いだった。</p> <p>○ウガンダのカンパラ出身の女性と出会った。モンバサの友だちに会いに行くために、飛行機を利用したとのこと。髪はウィッグで、スタイルが良く、ファッションセンスが素敵だった。アフリカの女性は、はっきりした原色がとても似合い、服装や髪型がオシャレの人が多と思った。</p> <p>○都市だけでなく、地方でもインフラ整備が急ピッチで行われていた。日本の重機を使って道路工事を行っているところもあったが、中国人の指導者を見かけた。</p>
<p>8月4日(月)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・長崎大学ビタ事務所訪問 ・ビタ県教育局長表敬訪問 ・ビタ県保健局長表敬訪問 ・ビタ現地初等学校訪問 (Dr. Williams Primary School) ・ビタ現地中等学校訪問 (Wawere Secondary School)  <ul style="list-style-type: none"> ・民家訪問 	<p>○九州にある大学が、遠く離れたケニアの地ですごいことをやっていることに驚いた。嶋田先生や風間さんなど、バイタリティーあふれた魅力ある方々が、熱帯医学の研究だけでなく、現地の人々の話を聞きながら、現地に合った草の根の支援を行っていることを知った。</p> <p>○どの訪問先でも、初めにお祈りの言葉から始まる場所に、キリスト教が人々の中に根強く影響していることを実感した。</p> <p>○日本の小学校のイメージで訪問したため、primaryでも大きな子ども達(7、8年生)の存在に驚いた。訪問団を迎え入れるのに、詩や歌(ラップ)、ダンスの披露があったが、少人数にも関わらず、外国の大人の前で堂々と発表する姿に驚いた。</p>

日 時	訪 問 先	所 感
8月5日(火)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 漁村 KOGUNA 見学 ・ ビタ→キスム→ ナイロビ移動 	<p>○周辺の村から出稼ぎでこの漁村で働く人が多いということを知った。ヴィクトリア湖が飲み水になり、洗濯や食器を洗う生活用水になり、生計を立てる漁に必要な資源でもあるということを知ることができた。また、20歳で4人の子どもを持つ女性や何人かインタビューで尋ねた家庭も子供が3～4人と日本に比べて子供の数が多いことが分かった。</p> <p>○どこに行くにも常に車の渋滞があるナイロビとそうでない地方との都市と田舎の違いを多く目にする事ができた。</p>
8月6日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ・ ムエア灌漑局 ・ ムエア灌漑農業開発センター 	<p>○ムエア灌漑地区での風景は、これまで見てきたケニアの風景とは異なり、どこか東南アジアの田園風景に共通する景色が見られたことが印象的だった。</p> <p>コメの作付面積を増加させるために、大規模な事業が行われていることを知った。コンサルタントという仕事の中身には色々なことがあること、日本人は柚木さんお一人がムエア灌漑局におられて、現地の人たちと一緒に事業を行っているという事実に驚いた。</p> <p>○単位面積当たりの収量増加の目標を達成するために、実現地の課題に即した取り組みを行っていることが分かった。稲作の方法を現地の人に教える清治さんは、元青年海外協力隊員でケニアに以前赴任されていた方だということが分かった。この研修で、元協力隊員だったという方が、協力隊が終わった後も専門性を生かし、活躍されている方にたくさんお会いできた。経験された方が分かる協力隊やアフリカの魅力が一体何なのかということを感じた。</p>
8月7日(木)	<ul style="list-style-type: none"> ・ エンジン農業局事務所 青年海外協力隊(コミュニティ開発)永瀬隊員の活動視察 ・ ナクル湖国立公園視察 	<p>○現地の農家の人に日本の農業のやり方を教えながら、現地型の日本式農業に現地の人と一緒に取り組んでいる永瀬隊員が、協力農家を見つけた方法がたまたまというところに、人との出会い、つながりのすごさを感じた。これも、永瀬隊員自らが現地の中にとびこみ、活動しているからこそできたことなのだろうと思った。</p> <p>○ナクル湖国立公園と人間の住む町が近く、時々ライオンも敷地内から逃げ出すことがあるということに驚いた。また、「ライオンを殺してしまうと死刑であるということ。人間が野生動物から被害を受けると、いくらか被害に対する金額は支払われるものの、大袈裟に言えば、人間の命より野生動物の命の方が</p>

日 時	訪 問 先	所 感
		優先させるきまりがある」という話を堺田隊員から聞いた時にさらに驚いた。また
8月8日（金）	・Gethathuru Rehabilitation Schoolでの青年海外協力隊古賀隊員（青少年活動）の活動視察	○訪問中の施設や学校の雰囲気からは感じなかったが、1日のスケジュールを尋ねたところ、1日の朝の始まりが、全校朝会での人数確認から毎朝始まるという点が厚生施設であることを実感させられた。サッカーを通して、子ども達に協調性等を教えている古賀隊員の姿が印象的だった。また、引き継ぎ期間ということで、後任の佐藤隊員にもお会いでき、色々なことを聞くことができたのがよかった。

学 校 名

都城市立五十市中学校

氏 名

西 村 清 美

担 当 教 科

英 語 科

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

- 生き抜く力の核となるものは「教育」
 - ・ マラリア予防、HIV 感染、環境教育についてのお話を伺う中で、正しい知識をもっていることが自分の命を守ることにつながるのだということを実感した。
 - ・ ケニアの教育と日本の教育の現状を比較したり、学校を始め様々な場所の視察しその現状を目の当たりにしたりしたことで、「学校教育」はもちろんのことであるが、「地域の教育力」、「家庭の教育力」の重要性を再認識することができた。
- 共に学び、助け合い、励まし合い、成長していく人間関係
 - ・ 多くの人との出会いの中で聞いた「トップダウンではうまくいかない、現地の人とのコミュニケーションが大切」「現地の人と共に学び成長していきたい」「ケニアを自分の手で変えたい」と思っているケニア人もいる、まずはその人たちに知識や技術を提供し、それを自分たちの手で継承していくことが大切」と言う言葉に、「共に…」という姿勢がよりよい社会を実現し「生き抜く力を育てること」につながっていくと感じた。
- 自立して、新しいものを生み出すこと
 - ・ 青年海外協力隊員の方々、JKUAT の学生たち、エンジニアの農業青年の姿を見たり、話を聞いたりして、どんな環境の下においても、自分のやるべきことにしっかり向き合い、知識や技術を自分のものにし、そしてその知識をもとに自ら考え、改良しながら、次の新しいものを生み出そうとする力が「生き抜く力」につながっていくと感じた。JKUAT の角田先生の「アフリカに合ったイノベーションをしていく」というお話からもそう感じた。

2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

- ケニアで出会ったたくさんの子供たちの笑顔、そして「自分にとって大切なものは教育」「夢は〇〇」とはっきりと即答するその姿、生きるために自分の目の前にあることに一生懸命取り組んでいる大人たち、ケニアの人々に寄り添い、共に生き、共に学び、成長しようとしている青年海外協力隊員の方々、その他、ケニアに力を尽くすたくさんの方々の日本人の方々の生き生きとした姿にこれからのケニアの未来を見る気がした。開発途上国というと、負のイメージが先行しがちで、研修に参加するまでは、私自身の中にも負のイメージが大半を占めていた。しかしケニアで出会った人々のキラキラとした姿に、私がかかっていた負のイメージは、一掃された。ケニアで出会ったたくさんの方々の姿や伺った話を、今後の教育活動の中で子供たちに伝えていきたい。
- 視察全体を通して、教育の視点で考え共感できることがたくさんあり、自分自身の教員としての在り方、生き方を振り返る機会をいただきました。特に「自分がやってやるとか、自分のやりたいことをやるは通用しない。現地の方の考えや思いを尊重しながら活動することが大切」と

にかく地道に活動していくことが、次にそして未来につながっていく」という隊員の方々の言葉は、心に響いた。「子供たちの多様な考えや思いを受け入れ、寄り添い、共に学び成長していくこと」「地道な取組は必ず子供たちに返っていくこと」それは教育者にとって最も大切なことであり、今後改めてこのことを胸に目の前の子供たちと向き合っていきたい。私が見た現地の人の思いや生き方を子供たちに伝えていくことが教育者としてまた人としての自分の成長にもつながっていくと信じている。

③ 教育指導への活用について

- 文化祭の学級展示でケニアの歴史・文化について調べ学習＜写真の活用＞(学級活動・総合学習)
- 世界の中の日本人 内容項目 4 - (10) ＜写真・資料の活用＞ (道徳)
- 志高く生きる 内容項目 1 - (4) ＜写真・動画の活用＞ (道徳)
- 私達のそして未来のための地球～人として～＜写真・動画の活用、ゲストティーチャー (国際協力推進員の方) ＞ (学級活動)

④ 研修に関する全般的な所感／意見について

- 研修全体を通して、この研修で出会うことができたたくさんの方々、また目にしたたくさんの方から多くのことを学び、大きな刺激を受けた。特にケニアの子供たち、ケニアでがんばっている日本人の方々との出会いは、これからの自分自身の教育活動や生き方に大きく影響していくと思う。研修後も、このこともあのことももっと知りたい、ケニアについての本ももっと読みたい、他の途上国のことも知りたいという欲求でいっぱい。きっと子供たちもちょっとしたきっかけを与えることで、現在の私のようになるのではないかと思うと、この研修を今後の教育活動にしっかりつなげていかねばならないと思っている。

⑤ JICA に対する要望・提言

- このような研修の機会を与えていただいたことに感謝の気持ちでいっぱいです。研修中は、安全を最優先していただいたおかげで、安心して参加することができました。当初は計画されていなかった学校訪問も組み込む等、本当にぎりぎりまでスケジュール調整をしていただいたことに感謝しています。また、事前・事後・研修中と、研修の在り方についても、工夫されており、学校現場において大変参考になることばかりでした。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

- 派遣前は、校務で忙しい時期だと思えますが、事前研修でもらった資料、インターネット、本などから少しでも予習をしていくと、研修中の学びが一層深まると思えます。
- こまめにメモをとっておいた方が良いと思えます。聞き漏らしたくないという一心でメモを取るのですが、ボイスレコーダーなどを準備すると良いと思えます。
- 派遣前に授業のイメージをしっかりとっておくことで、写真や動画を計画的に撮ることができると思えます。また、現地でがんばる青年海外協力隊員の方々と会える機会が多かったので、質問したいことなどを事前に準備しておくとういと思えました。自分自身もそのつもりだったのですが、それでもあの写真を撮っておけば良かった、あの人にこんなことを聞いておけば、授業のこの部分で使うことができるのにと思うことができました。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月31日(木)	JICA ケニア事務所訪問 ナイロビ国立博物館見学	<p>空港→ヤヤセンター→事務所訪問であったが、この3ヶ所において入口での厳重なセキュリティーチェックと事務所での安全面に関するブリーフィングで、治安の悪さを実感し、危機意識が高まった。またマラリアの予防薬についての説明もあり、かなり不安になってしまった自分がいた。一方でケニアにおける JICA 事業の概要説明を受け、これから始まる研修への期待も高まった。</p> <p>国立博物館では、人類の起源の地であるアフリカならではの考古学的に貴重な展示品が興味深かった。もっとケニアの歴史について予習して見学すればよかったと思った。博物館で出会った子供たちがとても愛らしく、一緒に写真を撮った時の彼らの笑顔と笑い声が今でも脳裏に残っている。</p>
8月1日(金)	ジョモ・ケニヤッタ農工大学 (JKUAT) 視察 モヨ・チルドレンセンター視察	<p>「人づくり」についてたくさんのことを学び、考え、再認識できた1日であった。JKUATの学生の懸命な姿モヨ・チルドレンセンターの松下さんを始め子供たちにたくさん感動をもらった1日でもあった。</p> <p>大学設立から20年間にわたる日本からの協力の後、今やケニアの農工学系トップ大学の一つに成長したJKUATのキャンパス内での人づくりを垣間見ることができた。学生たちが真剣な眼差しで、実習に取り組んでいる姿、また、工学部の実習現場に女子学生が多かったことも印象的だった。説明してく</p>

日時	訪問先	所感
		<p>ださった角田教授の「8割失敗してもその過程で学ぶことが大切」という言葉に、私自身、頭では理解しているけれども、「子供たちの結果ばかりを評価していないだろうか。」と自身を振り返った。教育において、失敗してもその過程の中から学ぶことの大切さ、また、実習・実践を再認識することができた。この学びは今後の自身の教育活動において生きた言葉になると思った。</p> <p>モヨ・チルドレンセンターでは、事前に松下さんのブログなどを読ませていただいていたこともあり、本人を目の前にして感動でいっぱいになった。松下さんが熱く語る姿、子供たちに寄り添う姿に、彼女の人柄がにじみでていた。また、テーブルに生けられたバラの花、きれいに片づけられた各部屋にしつけが行き届いていることを感じた。「環境は人をつくる」・子供たちのバックグラウンドは様々で、学校にも行けず、家庭に居場所がなかった彼らにとって、安心して暮らせる環境はまず一番に大切なことだと感じた。各部屋をまわり、子供たちと過ごすことにたくさんの時間を使い、帰るときになって、松下さんからは少しだけしか話を伺っていなかったことを後悔した。彼女を突き動かすものは何なのかもっと話を伺いたかった。モヨとはスワヒリ語で、「心・魂・精神」という意味だそうで、まさしく松下さんの魂が宿っている場所であるように感じた。もう一度訪れたいと思う場所であった。</p>
8月2日(土)	象の孤児院見学 ジラフセンター	<p>密猟で親を殺されたり、親とはぐれたりした小象の孤児院の見学であった。グラウンドを走り回ったり、サッカーボールで遊んだり、小象同士でじゃれあうかわいい姿に心が癒されると同時に、前日に会ったモヨの子供たち、自身の学級の子供たちと姿が重なって見えた。動物の子供たちも人間の子供たちも同じだと感じた。どんな状況においてもたくましく生きている姿に心に迫るものがあった。</p> <p>間近で見るキリンの大きな瞳、ざらざらとした長い舌、糸を引く唾液におっかなびっくりであった。餌付けを楽しみ、童心に戻ってキリンとの楽しいひとときを過ごした。</p>
8月3日(日)	ナイロビ空港→キスム市内へ移動 フェリー乗り場からピタへ移動	<p>移動の1日であった。キスム空港に到着し飛行機から降り立った瞬間、青空の下、心地よい風が吹き、都市部とは違う空気で解放感に満たされた。フェリー乗り場に移動中の車窓から見た、舗装された道路と、</p>

日 時	訪 問 先	所 感
		<p>車など気にもせず牛たちが連なり、のんびりと歩いている風景とのギャップが何とも面白かった。フェリー乗り場ではフェリーから降りてくるたくさんの牛たちや、乗り込む多くの人たちを見ながら、動物と人間が共存していることを感じた。ビタで宿泊したホテルでは、その虫の多さにびっくりした。ベッドの蚊帳に虫除けスプレーをふりかけ、事務所で受けたブリーフィングが頭をよぎり少し不安になった。</p>
8月4日(月)	<p>長崎大学ビタ事務所訪問 ビタ県教育局長表敬訪問 ビタ県保健局長表敬訪問 Dr.Williams Primary School 訪問 Wawere Secondary School 訪問 民家訪問</p>	<p>ビタ事務所で嶋田先生より大変わかりやすく丁寧なプロジェクトの説明を受けた。アフリカは感染症の宝庫であり、全世界及びアフリカと日本の死亡の比較説明では、アフリカは感染症・母子・出産・栄養で亡くなる人が7割を占めていることに改めて驚いた。またマラリア予防には蚊帳がツールとして非常に有効であるが、蚊帳を配付しても、鶏の小屋や魚を捕ることに使用されてしまう現状があるということにも驚いた。知識をしっかりと伝えることが必要であり、住民主導で進めていかなければ撲滅にはつながらないとおっしゃる嶋田先生と、草の根で地域に貢献されているビタの案内をしてくださった風間さんのご苦勞は図りしれないのだろうと思った。しかし、まさしく草の根、地域に根ざし、地域の方々とのコミュニケーションを大切にしながら生き生きと熱く活動されている姿はとても魅力的だった。</p> <p>楽しみにしていた2校の学校訪問をした。初等学校を訪問した時に子供たちが踊ってくれたダンスが忘れられない。この日のために一生懸命練習してくれたのだと思うと、目頭が熱くなった。動画で撮影したので、ぜひ日本の子供たちに見せたいと思う。授業風景をみることはできなかったが、教室を見学することができた。トイレや教室の環境・設備から厳しい教育の現状を目の当たりにした。しかし、教室に残されていた子供たちのノートから十分な学習設備が整わない状況においても、自分の夢のために懸命に頑張っていることを感じとった。中等学校訪問では、少し大人びた生徒たちを想像していたが、とてもフレンドリーであった。短い訪問であったが一人の女子生徒にインタビューすることができた。ここでも「大切なものは教育」「夢は医者になること」と即答であった。何時間も私たちの訪問を待っていてくれたことにただただ感謝であった。</p> <p>民家も訪問することができ、現地の生活空間を見学したり、1日の生活の流れを聞いたりできたこと</p>

日 時	訪 問 先	所 感
		は貴重な体験だった。ローズさんの「子供を大学にだすためにスポンサーになってくれ」という言葉が心に引っかかった。
8月5日(火)	漁村の見学 ビタ→キスム→ナイロビ へ移動	ほぼ1日移動の日であったが、午前中に漁村を見学することができた。魚を干す女性たち、家事を手伝う子供たちで漁村の生活感に溢れていた。内陸から漁村に出稼ぎにしている人たちで人の出入りが激しく、そのことがHIVの感染の原因になっているということも深刻な問題であるということだった。生きるための生活、そしてHIV感染問題を通して生と死を考えさせられた。
8月6日(水)	ムエア灌漑開発事業	<p>事前研修で頂いた資料や池上彰さんの「アフリカビジネス」をネット上で少し読んでいただけに、ケニア最大の穀倉地帯ムエアにどんな水田地帯が広がっているのか楽しみであった。移り行く風景の中に水田が見え始め、少し雑な水田の作り、たくさんの人々が水田に入り1列に並び苗を植えている姿を見た。その後の説明で、農耕牛を使うこと、地面にクロスをはってマーキングして苗を植えることがわかり、あの雑な水田作りが納得できた。実際に水田を見学に行く途中で聞いたお話の中で、ムエアの人々は農業は大変だという意識があり、中には農業をすることは罰だと思っている人もいるということに驚いた。また、ムエア地区は米の生産による収入で貧困が少ないが、子供たちの中には、将来は農業さえすればよいという考えもあり、就学率の低さが問題になっているという話に、教育の在り方を考えさせられた。</p> <p>夜の食事会では、宮崎出身の隊員さんとゆっくり話をすることができた。隊員さんへのインタビュー動画は絶対に授業で使うつもりでいたので、インタビュー動画がとれて本当によかった。</p>
8月7日(木)	永瀬隊員活動見学 ナクル国立公園(堺田隊員)	村落開発普及員として活動していらっしゃる永瀬隊員の活動を見学した。現地で農業に従事しているジョンさんとの出会いもあり、農業にかける彼の思いを肌で感じた。派遣前に農業の修業を日本で少しやってきたが、ほぼ0からの農業と語る永瀬隊員だったが、彼の頑張りには確実にジョンさんに伝わっていると感じた。街を歩いていてたまたま出会った二人が、国は違えど肩を並べてエンジニアの地で農業を行い、お互いに刺激を受けている。そして青年の夢は「ベストファーマーになること」という言葉に、人との

日 時	訪 問 先	所 感
		<p>出会いは素晴らしいと改めて感じた。また私自身も子供たちに影響を与え続けることができる人間でありたいと思った。永瀬隊員の活動は必ず次に繋がっていくと確信した。</p> <p>楽しみにしていたナクル国立公園を訪れた。道中の環境教育に従事する堺田隊員のゴミ問題の話も興味深かった。ライオンが見たいという一心で、頭は風に立つライオンのイメージでいっぱいだったが、公園で見ることができたのは、望遠カメラを使ってやっと見えた小さく見える3匹のライオンの姿だった。見ることができただけで良しとしたい。残念な話もあった。原因はわからないが、ここ1・2年でナクル湖が増水し、フラミンゴがいなくなっていることにはショックを受けた。地球温暖化・環境問題などが動物たちの生態系に影響を及ぼしていることを目の当たりにした。</p>
8月8日(金)	ゲタスル更生学校古賀隊員の活動見学 マサイマーケット JICA 事務所	<p>短い時間ではあったが、グラウンドで子供たちと長縄をしたり、紙飛行機にそれぞれの名前を日本語で書いてあげたりするなどして交流することができた。また古賀隊員より更生学校の子供たちの1日の生活の流れも聞くことができた。体育の授業を通して、人として大切なことを教えてもらっしやることを感じることもできた。後に桑江さんより、子供たちが遊んだ後の紙飛行機が散乱していたことを指摘された。気づくことができなかった自分がただの訪問者になっていたことを恥じた。</p> <p>値段交渉にいくつかのスワヒリ語を教えていただいたので、スワヒリ語を使うことと値段交渉を楽しむことができた。しかし、後半は値段交渉をすることが面倒になってしまった。</p>

学 校 名

宮崎県立宮崎北高校

氏 名

森 拓 也

担当教科

地歴（日本史）

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

- 強盗や資金不足などの困難にもくじけずにストリートチルドレンを支援している松島さんの強さ、地域の人と信頼関係を築いて自ら企画を立てて地域に貢献しようとする青年海外協力隊の方々の積極性など、ケニアで活躍する日本人の方々の姿を見ると人間としての大きさというか「幹の太さ」のようなものを感じた。

この幹の太さこそがどんな困難にも屈せず乗り越えていくたくましさであり、「生き抜く力」であると思う。

- 電気・ガス・水道もない中でも、明るく過ごしている子ども達の笑顔を見て、幸せの基準について考えさせられた。スマホを買い与える親は、「周りが持っているから…、仲間外れにされるから…」と話すことが多い。周りの社会が、幸せの基準になっている。しかも、日本の子ども達は自分で手に入れる努力をするのではなく、親に頼っている傾向が強いと思う。ケニアでも、周りに物が無い社会だから、物がなくても明るく過ごしているのかもしれない。しかし、ケニアの子ども達は、その時に勉強して自分で手に入れようとする姿勢があると思う。「何が欲しいか」と聞かれて「エデュケーション」と答えたモヨの子どもやクイズに積極的に答えるプライマリースクールの子供達、スポンサーになってくれと言ったセカンダリースクールの高校生などは、何とか自力で手に入れたいという思いが言葉や行動に表れたのではないだろうか。その自力で夢を実現しようとする姿勢が「生きる抜く力」であると思う。

2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

- 都市と農村における格差、都市における富裕層と貧困層の格差の現状を知ることができた。特にストリートチルドレンの現状について驚いた。ストリートチルドレンの95%がシンナーを吸っているという現状は、貧困が生む大きな問題であると感じた。
- JKUAT やムエア灌漑事業などの国家としての日本の支援と、長崎大学草の根事業や青年海外協力隊の地域に根差した日本の支援について学んだ。青年海外協力隊の方々の積極的に地域の人たちと交わろうとする姿勢が素晴らしかった。海外で活躍する日本人のたくましい姿を生徒たちに伝えたいと思う。
- プライマリースクールとセカンダリースクールでボールペンをプレゼントしたことを通して、物をあげるだけでなく、そこから支援の方法についてどうあるべきなのかということを考えさせられた。「依存する姿勢が強くなり、途上国の自立を妨げることになるのではないか?」「自分たちの不要なものをあげるという時点で、上から目線なのではないか?」など、物資援助の背景にいくつかの問題があるということ伝えて、その上で自分たちがどうすべきかを考えさせたい。

3 教育指導への活用について

- 日本の国際協力の在り方には国レベルの支援と地域に根差した支援があることを、ケニアにおける具体例を通して理解させる。特に青年海外協力隊の隊員の方々が地域に溶け込んで積極的に活動している様子を伝えたい。
- 生徒たちから集めたボールペンを渡した様子を動画で報告する。初めての国際協力で自分たちのしたことが遠く離れた土地で喜ばれたことを伝えたい。同時に、自分たちにできる支援の在り方について考えさせたい。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

- 最初の頃は「12日間は長い」と思っていたが、終盤になると「もう終わり」と感じるくらい充実した時間を過ごすことができた。日本では体験することができないことを体験し、日本との違いを感じたり、改めて日本の良さを感じることもできた。特にナイロビでのセキュリティーに関する意識の高さには驚いた。

5 JICA に対する要望・提言

- JICA 九州、JICA ケニアの方々のおかげで素晴らしい経験を積むことができました。日程的にも無理がなく、疲労を蓄積することなく過ごすことができました。ありがとうございました。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

- 研修中の体調管理に気を付けてください。研修前に「強力ワカモト」を持参するよう勧められたのですが、これが一番効果があったと思います。整腸作用だけでなく疲労回復にも役立ち、研修中快適に過ごすことができました。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月31日(木)	JICA ケニア事務所 ケニア国立博物館	<p>ナイロビの治安とマラリアについて話を聞き、気を引き締めなければならぬと感じた。ナイロビが発展した理由が、鉄道の要・気候そして豊富な水にあることが興味深かった。</p> <p>多くの化石人骨を見て、改めて人類発祥の地がアフリカであると再認識した。</p> <p>骨角器・石皿・すり石など日本のものと形などがよく似ており、人類の発達の共通性を感じた。</p>
8月1日(金)	ジョモケニヤッタ農工大学 見学 モヨ・チルドレン・センター	<p>トイレやコピー機などいたるところに古い日本製品があり、日本とJKUATの繋がりを感じた。金属加工・金型など日本の町工場の技術がモノづくりの基礎となっていると思った。日清食品のOISHII-PROJECTなどアフリカ - ai - JAPAN Projectによって日本の技術がアフリカで広まって欲しい。</p> <p>子ども達一人一人を包み込む松島さんの愛の深さと命を懸けて取り組んでいる姿に強さを感じた。ストリートチルドレンの現状を聞いて、この国の社会保障はどうなっているか、税金はどこに重点的に使われているのか疑問に思った。</p>
8月2日(土)	象の孤児院 ジラフセンター	<p>日本語でパトロールと書かれた車を発見。小象に触れると肌と表面の毛が固くざらざらしていた。優しい目をしているが、じゃれ合う姿にも気性の荒さが見て取れた。</p> <p>すらっとして凛々しい雰囲気を持つキリンを目の前で見て、えさやりもできたのでとても興奮した。すねの骨や下顎の骨を持たせてもらったら、とても重く野生動物の力強さを感じた。</p>
8月3日(日)	ビタへ移動	<p>飛行機の中でCAの男性が突然日本語で話したので驚いた。</p> <p>船の中で、聴覚障害の少年たちと日本についての質問でコミュニケーションをとれたことに興奮した。</p>
8月4日(月)	長崎大学ビタ事務所 ビタ県教育長表敬訪問 ビタ県保健局表敬訪問 Dr.Williams Primay School	<p>ナイロビとは全く異なる環境が広がっていた。都市と農村ではインフラの整備や生活様式に大きな違いがあると感じた。プライマリースクールでの歓迎の歌やダンスはとてもありがたかった。ボールペンをプレゼントしながら、半分は楽しみながらも、半分は全員にあげられないので申し訳ないという気持</p>

日 時	訪 問 先	所 感
	Wawere Secondary School 民家訪問	ちと先生がきちんと渡してくれるかという不安な気持ち、自分たちが不要になったものをあげるという罪悪感のような気持ちが入り混ざって複雑だった。
8月5日(火)	漁村見学 ナイロビへ移動	のどかな漁村の風景が広がっていた。しかし、各船にはオーナーがいて、出稼ぎの人を雇って漁をしているということだった。ここにも資本家と労働者という関係があり、利益を搾取されているのかと驚いた。
8月6日(水)	ムエア灌漑開発事業視察	円借款によるダム建設のために、多くの苦労があることを学んだ。外国でのプロジェクトを成功させてきた柚木さんの芯の強さを感じた。 均平や条植えをすることで、収穫量が増加することに驚いた。小さいことをきちんとする日本人の特徴が表れていると思う。
8月7日(木)	エンジニア永瀬隊員 ナクル堺田隊員	永瀬隊員は積極的に街の人に声をかけ、かかわっていきこうとしていた。ガドゥさんと互いに信頼し合っている姿がかっこよかった。 堺田隊員も自分で広告を作って売り込むなど積極的に活動していた。もっと小学生に授業をしたいという意欲があった。 地域に密着した支援活動には、このような積極性や意欲が必要だと思った。
8月8日(金)	男子更生学校 JICA ケニアで報告	物がないという厳しい条件の中でも工夫しながら子ども達と向き合う古賀隊員の姿が印象的であった。サッカーを通して子ども達に「感謝」「努力」「チームワーク」を教えているところが部活動と一緒にあると感じた。 今回同行した先生方、JICA 九州の方、野村記者が感じたことを聞くことができた。人それぞれに感じ方・受け止め方が異なっており、様々な角度から今回の研修を振り返ることができた。

学 校 名

長崎県立大村高等学校

氏 名

原 口 俊 明

担当教科

理科（物理）

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

ケニアで活動されている協力隊員、JICA や大学、民間の方々は、日本とは大きく異なる環境の中で、自分の専門とは違う分野であっても、地域にとけ込みながら、勉強や創意工夫を重ねながら活動されていました。これこそが、「学習者自身が、生涯にわたり、自身に必要な知識や能力を認識し、身に付け、他者との関わり合いや実生活の中で応用し、実践できるような主体的・能動的な力」として定義されている「生き抜く力」ではないでしょうか。ケニアで活動する日本人の中に自分が探し求めていた「生きる力」を見ることができました。帰国を明日に控えた晩、今までのことを振り返ったとき、「生きる力とは海外で活動する特別な人だけが持っている特別なものではなく、普通に日本で活動している人々の中にもあるもの」ということに気づきました。「生きる力」を探しにケニアまで行ったわけですが、青い鳥（生きる力）はどこにでも見られるごくあたりまえのものだということに気づかされました。当然、自分にも、自分の教える生徒たちの中にも、その種は確実にあるという確信を持つことができました。

2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

<自身の成長につながったこと>

○ 「生きる力」の本質が見えてきたこと

ケニアで活動されている日本の方々の中には、はっきりと「生きる力」を見ることができました。そしてそれは、日本の自分のごく身近な所にも見ることのできる力だということに気づくことができました。

○ 支援の難しさを理解することができたこと

支援には、自立の阻害や新たな問題の発生といった負の側面もあり、行っている支援が、本当にその国の人々のためになっているかは非常に難しい問題だということが実感できました。「外国からいいこと（支援や調査・研究）をしに来たと思っている人の考えをひっくり返したい」とおっしゃった長崎大学の嶋田先生の言葉がいつまでも心に残りました。

○ 「幸せ」について多面的に見ることができるようになったこと

ケニアの人々の寿命は短く、食べるものも限られていて、電気も水道もない地域も多くあります。しかし、それが我々より不幸だということを意味するものではないというように思えるようになりました。何キロも離れた水場へ歩いて行き、途中知り合いと出会えばいろんな話をし、困ったときには相互に助け合い、自然と調和した生活しているケニアの人々。ケニアでは現代の日本が失った多くのものを見ることができました。「幸せの基準は国によって違う」ということを深く実感しました。

<子供たちに伝えたいこと>

- 生きる力の種は一人ひとりの中にあるということ
自己肯定感が低く、自分に自信が持てない者が多いといわれる日本の高校生。国際貢献したいと思いつつも自身が持てずにとめらっている生徒たち。そんな彼らに、「生きる力の種は一人ひとりの中に必ずある」ということを伝え、躊躇している彼らの背中を押してあげていきたいと思います。
- われわれがいかに恵まれているかということ
蛇口をひねれば安全な水が出て、いつでも食べ物を手にすることができ、医療体制も充実した社会に生きている我々は、極めて恵まれた稀有な存在であるということを少しでもわかって欲しいと思います。
- 支援は必要だが非常に難しい問題を内包しているということ
国や地域によっては、生命維持に必要な衣食住すら満足にない状況もあり、開発途上国に対する支援は絶対に必要だと考えます。しかし、支援によって新たに生じる問題もあり、どのような支援をどのような形で行っていくのがよいのかは、支援される側の目線で多面的に考えていく必要があるということ伝えていきたいと思います。
- 対等な関係として学びあうことが大切であるということ
ケニアでは、我々が失いかけている家族や地域の絆、相互扶助の精神を見ることができました。支援をする・されるという関係ではなく、互いの違いを理解し認め合う中で、相手の良さを学んでいく姿勢が大切であるということをはっきりと伝えていきたいです。

3 教育指導への活用について

(1) 総合的な学習の時間や LHR の時間での活用

「自分たちがイメージするケニアと実際のケニア」、「ケニアと日本の違うところ、同じところ」、「自分たちができる国際貢献」など、テーマを決めてワークショップを行い、開発途上国の現状や問題点をより身近なものとして捉えさせたいと考えています。

(2) 他教科の先生方とのチームティーチングを通じた活用

家庭科や保健、現代社会など、教科の授業の中で担当教員と協力してチームティーチングを行うことで、生徒一人ひとりのものの見方や考え方を深化させていきたいです。

(3) メール等を通しての活用

希望する生徒を対象に、ケニアで活躍している日本の方やケニアの子ども達とのメール等に取り組みせ、より自主的な活動を支援していきたいです。

- * (1) (2) については、ビタの2つの学校で行ったアンケート結果と自分達の結果との比較・検討などを通じて有効に活用していきたいと考えています。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

応募から事前研修、ケニアでの研修そして事後研修を通じて、今までの自分の取り組みを振り返るとともにこれからの自分の生き方を考えることができ、大変有意義な研修となりました。現地では、ニュースやインターネットでは決して感じることのできない五感を通しての経験・知識を手にすることができました。ケニア人々のおおらかさや子ども達の生き生きとした姿がとても印象に残っています。また、現地で活躍される日本人の熱い思いを知ることもできました。子ども達との交流と現地で活動している日本の方々への訪問のバランスがよく取れた研修だったと思います。できれば、学校やチルドレンセンター、更生施設訪問など子ども達と交流する場面では、もう少し時間があればよかったと思いました。

5 JICA に対する要望・提言

事前研修では、参加者がお互いのことを知り親睦を深めることができました。研修の内容や講師の方もバラエティに富んでおり、非常に中身の濃いもので非常にためになりました。事後研修では、それぞれの先生方の情報や感じたこと、アイデアを共有することができ、生徒に還元する際の多くのヒントを得ることができました。現地での研修では学校訪問を入れてくださるなど、われわれ教師にとっては最高の体験をすることができました。このようなすばらしい研修を企画・実施して頂き、JICA 関係者の皆様には厚くお礼申し上げます。学校現場ではこのようなすばらしい研修があること自体よく周知されていません。教育委員会などとの連携を強化しながら、今まで以上に積極的な情報発信や参加者募集を行ってはどうでしょうか。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

- 見るべきポイントや授業の構想をある程度持つてのぞむといいと思います。撮るべき写真や必要な情報が決まり、現地での活動がスムーズになると思います。
- 英語での挨拶はもちろん、自己紹介の際などはスワヒリ語での簡単な挨拶を交えるとよいと思います。親近感が違って来るようです。
- 子ども達と交流するときは、我々が帰国後も継続的にできるような遊びを紹介すると思います。今回の「だるまさんが転んだ」は、私の想像以上に大人気でした。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月31日(木)	① JICA ケニア事務所 ② ナイロビ国立博物館	<p>飛行機の窓からケニアの街灯りが見えた。ナイロビ到着。目にするものすべてが新鮮で、驚きの連続だった。JICA ケニア事務所では、ケニアの現状や安全面についてのブリーフィングを受けた。</p> <p>ナイロビ国立博物館は予想に反してこじんまりしていた。「博物館教育」の充実は今後の課題であるように感じた。ここで出会った子ども達の人懐っこさ、明るい笑顔が印象的だった。</p>
8月1日(金)	③ JKUTAT ④ MOYO CHILDREN CENTRE	<p>JKUAT 訪問では、長い間、プロジェクトに関わってこられた角田チーフアドバイザーをはじめ、関係者の熱い思い、壮大な構想・夢がひしひしと伝わってきた。実習に取り組む学生は熱心であった。</p> <p>松下さんから子ども達が置かれていた境遇を聞き、ケニアが抱える問題の深刻さ、深さを感じた。子ども達に「今、最も欲しいものは？」と尋ね、「Education」という答えが返ってきたときには思わず目頭が熱くなった。教師の職責の重さに、身が引き締まる思いがした。「だるまさんが転んだ」を紹介すると、みんな楽しそうにいつまでも遊んでいた。我々が帰ってからも、遊んでいるという話を聞いて、とても嬉しかった。</p>
8月4日(月)	⑤ 長崎大学ビタ事務所 ⑥ ビタ県教育局 ビタ県保健局 ⑦ Dr. Williams Baptist Primary School ⑧ Waware Mixed Day Secondary School ⑨ 民家訪問 (Ms Rose 宅)	<p>長崎大学の風間先生、嶋田先生の地域に根差した活動が印象的だった。「先進国でしていけないことは、ここ(ケニア)でもしてはいけない」という言葉は、自分の胸にぐさっと刺さった。</p> <p>Primary School 訪問では、時間がかなり遅れたにもかかわらず、行儀よく我々の到着を待っていてくれた子ども達がとてもかわいらしかった。歌やダンスによる歓迎、そして最後は我々も参加しての踊りなどとても楽しい時間を過ごすことができた。</p> <p>Secondary School の生徒も人懐っこかった。服装や足元に眼を移すと、破けていたり、裸足であったりと、困窮した生活の様子がうかがえた。</p> <p>電気や水道はない。トイレもない。長男は灯油ランプの灯りを頼りに、食事を造る小屋で勉強しているとのこと。我々がいかに恵まれているか、改めて感じた。</p>

日 時	訪 問 先	所 感
8月5日(火)	⑩漁村訪問 (KOGUNA)	小魚を干す人、食器を洗う人、漁をする人など、ケニアの人の日常生活の1コマを見ることができた。自分も真似して頭に桶を載せてみたが、バランスをとるのが非常に難しかった。
8月6日(水)	⑪ムエア灌漑局 ⑫ムエア灌漑農業開発センター	プロジェクトの成功のために全精力を注いでいる日本の民間の方の姿に、エンジニア魂と誇りを感じることができた。 地元農家の方に、水田の平滑化や適切な植え付け方法など、生産性向上のための取り組みを紹介するものの、まだ十分浸透していないとのことであった。支援・援助の難しさを感じた。
8月7日(木)	⑬エンジニア農業局事務所 ⑭ナクル湖国立公園	遠いアフリカの地で、勉強や創意工夫を重ねながら懸命に活動されている永瀬隊員、堺田隊員のなかに、確かに「生きる力」を見ることができた。自分が探し求めていた「生きる力」の意味がわかった気がした。
8月8日(金)	⑮ Getathuru Rehabilitation School ⑯ Village Market	様々な理由で施設に送られてきた子どもたちであるが、年齢の割に身長は低く、やせている子が多いような気がした。自分の学校の生徒が用意してくれた、ケニアと日本の国旗の入りの紙で紙飛行機を折って飛ばした。とても気に入ってくれた子もいて、最後まで手に握りしめていた。反面、飛ばした紙飛行機がグラウンドに散乱していたりと、支援の難しさを改めて実感した。その中で、散らかっていた紙飛行機を集めてくれた Hassan 君(13歳)の存在に救われた思いがした。 いろいろな民芸品やお土産物があり、見て回るだけでも楽しかった。購入するまでの価格交渉が長くもあり、面白くもある。結局あつという間に時間が過ぎてしまった。

学 校 名

佐賀県立三養基高等学校

氏 名

江 島 淳 子

担当教科

英 語 科

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

希望を持ち、支え合って生きていく力。モヨ・チルドレン・センターやゲタスル更生学校の子どもたちは、様々な環境で問題を抱えながらも、悲壮感の漂う表情を見せる子はいなかった。誰もが将来の希望を語り、笑顔を見せながら無邪気に遊ぶ姿が印象的であった。ただ、そこに至るまでには、松下さんをはじめとする大人たちが、自立へと導くための愛情と教育が不可欠であると感じた。また、家族でもコミュニティでも、自分一人ではなく協力しながら、お互いに生活を向上させていこうという姿勢が生き抜く力だと思った。

2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

初めての発展途上国への訪問だった。今までにない発想の転換とあらゆるものの基準が自分の中で変わった。狭い日本の中だけにいると、思考が画一的になりがちである。開発支援のためのボランティアもアフリカを市場にしたビジネスも、自分のできることややりたいことを、いかに行動し形にしていくかということだと感じた。たくさんの日本人が、ケニアの発展や人材育成に協力し、ケニアの人とつながり、未来に向けて何かを生み出しているということを知った。遠いアフリカの中の一つの国に親近感を感じ、ケニアの子供たちを愛おしく感じるようになった。私たち人間には、周囲の人や国を変えていく力があるということ、また、日本のあたり前は世界では通用しないということをお子に伝えたい。

3 教育指導への活用について

公用語が英語であったので、英語の授業用に、写真や新聞や本等の言語材料を持ち帰った。それらを提示し、ケニアの現状を考えさせるきっかけとしたい。また、グローバルな視点でアフリカに注目したときに、日本が行っている様々な支援を具体的に紹介し、国際理解につなげたい。さらに、進路指導で、青年海外協力隊を紹介し、将来の生徒自身の夢実現や社会貢献の方法まで幅広く考えさせたい。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

研修期間中、見聞きすることのすべてが私自身の刺激となった。事前研修を受けて以来、自分なりに想像していたものと実際のケニアは大きく違い、情報を正しく理解することの難しさを実感した。訪問先は主に JICA が行ってきた国際支援に関する機関と学校であったので、そこでは様々

な支援の形があり、独立 50 周年を迎えるケニアと日本の深いつながりを初めて知ることとなった。夜には、関係機関の方々との懇親会があり、そこで得る情報は、自分の興味関心のあることについて、より個人的に、また具体的に尋ねることができ、大変有意義な時間であった。

5 JICA に対する要望・提言

私たちの安全・健康とこの研修の内容充実のために、スケジュールの調整や現地同行していただき本当に感謝しています。スケジュール的に早朝の出発や短時間の買い物が多く、振り返りの時間が毎日取れなかったりと、時間的な余裕が少し欲しかったです。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

訪問先での活動について事前に打ち合わせをきちんとしておくことは大切だと思います。また、長時間の移動、慣れない食事等体調管理が必要です。

研修後、生徒にいかに発信するかが目標であることを忘れず、何を見て、何を質問して、何を持って帰ってくるかをもっとはっきりとさせておけばよかったかなと私自身は反省しています。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月31日(木)	JICA ケニア事務所 	<p>ジョモケニアッタ空港に降り立つと、午前5時ということもあり、ひんやりとして赤道直下の熱い国というイメージは払拭され、標高の高さを実感しました。最初の訪問先はケニア事務所でしたが、到着までのナイロビのセキュリティ事情には驚くことばかりで、駐車場、ビルの入り口と何度もチェックされこれほどまでかと治安の悪さも実感しました。</p> <p>11Fの事務所の窓から見る景色は近代的な高層ビル・国会議事堂等、日本と変わらないように思えました。ブリーフィングでは、ケニアの治安やマラリアの実情を聞き、滞在中、訪問者としての意識を高め注意しておくことの必要性を感じた。</p>
8月1日(金)	JKUAT	<p>角田先生より AFRICA-ai-JAPAN Project の概要説明を受けた。JKUAT は創設時より日本が深く関わってきた農工大学で、学生たちは広いキャンパス内の実習室で様々な技術を実践を通して習得していた。「最先端でなくていい、アフリカ型のイノベーション</p>

日時	訪問先	所感
	 <p data-bbox="408 562 699 589">モヨ・チルドレン・センター</p> 	<p data-bbox="751 282 1390 432">ンを。失敗してもいい」という言葉が印象的であった。ランチにいただいたヨーグルトもおいしかった。栽培したものを加工・販売するまでの産業化まで大学でなされていたことに驚いた。</p> <p data-bbox="751 562 1390 947">69歳の松下さんの活動に圧倒されるような感じさえした。ティカの街は都市化が進み、ストリートの子どもたちも多い。なぜ子どもたちがドラッグに手を出し徒党を組んで物乞いに行くのか? 「シンナーで2日間は空腹を忘れられる」の言葉が忘れられない。しかし、センターの子どもたちは私たちを笑顔で迎え、一緒に“だるまさんが転んだ”を楽しんでくれた。この子どもたちが語ってくれた将来の夢がかなうことを祈念するとともに、自分にできる支援は何かを考え、行動しなければと思った。</p>
8月2日(土)	<p data-bbox="408 983 715 1010">象の孤児院・ジラフセンター</p> 	<p data-bbox="751 983 1390 1093">母親と別れてしまった孤児の象たちを身近に見たり、キリンに餌をやったりすることができた。動物との触れ合いはなごめる時間であった。</p>
8月3日(日)	<p data-bbox="408 1326 651 1352">キスム～ビタへ移動</p>	<p data-bbox="751 1326 1390 1518">トヨタのランドクルーザーの揺れ、広大な大地を黄色い容器を頭に載せて歩いている子供や女性、物を運ぶロバ、木に吊り下げたロープでブランコをしたりサッカーで遊んでいる子ども、フェリーから見た美しい夕日。移動中にも様々な発見があった。</p>
8月4日(月)	<p data-bbox="408 1592 651 1700">長崎大学ビタ事務所 ビタ県教育事務所 ビタ県保健局</p>	<p data-bbox="751 1592 1390 1944">嶋田先生は、なぜアフリカに拠点をつくったのか、歴史と科学者としての熱い想いを語られた。この熱意こそが長年の研究の原点であり、ビタ地区の衛生環境の改善へとつながっていると感じた。長崎大学熱帯医療研究がマラリアやHIV等感染症撲滅のために地道に現地の住民とコミュニケーションを取りながら進められていることがよく分かった。特に町中で風間さんに対する住民の様子を見ればどれほど貢献されているかが想像することができた。</p> <p data-bbox="751 1951 1390 2022">現地での会の始まりは、いつもお祈りからだ。宗教を感じる瞬間だった。</p>

日 時	訪 問 先	所 感
	Dr.Williams Baptist Primary School Waware Mixwd Day Secondary School 民家 (Rose さん宅)	<p>Primary Schoolでは、私たちのために歌やダンス、詩等のパフォーマンスで歓迎してくれ、大変感激した。子どもたちのリズム感と表現力はケニアの伝統を受け継ぐものだった。生徒たちに日本のクイズを行ったが、フットボール人気で香川選手の知名度だけは高かったが、それ以外では日本はあまり知られていないことにショックを受けた。また、ボールペンを渡すことについて、支援の在り方を全員が考えさせられた。</p> <p>この日最後に、電気・水道・トイレのない民家に実際に足を踏み入れ、ケニアの田舎で暮らすを実感。「子どもたちに何が必要ですか」の質問に、「誰かスポンサーになってくれないか」と返ってきた時に、現実を突き詰められた気がした。</p>
8月5日(火)	漁村	<p>月1回の委員会、年4回の集会等、漁業組合を通じ組織的に漁を行っていた。男は夕方7時から湖に船を出し網で魚を取り、朝方6時頃戻ってくる。女はその魚を広げて天日で乾燥させタンザニアや中国へ輸出して収入を得ている。湖では若い女性が子供の傍らで、手で洗濯をする姿があり、水道や洗濯機のない時代へタイムスリップしたようだった。</p>
8月6日(水)	ムエア灌漑開発事業  	<p>ケニアの食料自給率は主食のメイズでも80%、米は80%が輸入に頼っていることを知り驚いた。農業の発展は、国の発展である。日本工営の開発コンサルタントの柚木さんは、この事業が円借款で行われ、政府と共に問題解決をしながらプロジェクトを成功させるまでが仕事であると誇りを持って語られた。都市化・人口増加・食糧問題と変化の過程には必ず問題が浮上する。Hardwareだけでなく日本の技術とSoft面のサポートも必要とされていると感じた。</p> <p>ケニア山の麓に広がる水田は、日本と変わらない風景であったが、家族で協力し、手植え、桑で耕し、牛が行き交う姿は機械化前の日本の姿だった。</p>
8月7日(木)	エンジニア農業局事務所 	<p>長瀬隊員と新規就農青年の“ほかし”づくりをはじめとする新しい試みにほのほのとしたものを感じ、二人の出逢いと信頼感が羨ましく感じられるほどであった。人参を差し出し、国一番の農家になりたいと語ってくれた青年が、数年後にはブロッコリーをケニア中に広げていることを期待したい。</p>

日 時	訪 問 先	所 感
	ナクル湖国立公園	<p>堺田隊員は流暢なスワヒリ語で地元には溶け込み、国立公園の環境改善に取り組み、ボランティアでパークガイドも行ってた。ナクル湖の水増加、生活汚水の流出等、開発に伴い自然破壊が進むのは避けられないことなのだろうか。公園内を周り、バッファローの群れやガゼル・インパラ、そして遠くに小さくではあったが、ライオンにも遭遇でき、ケニアの大自然を感じることもできる瞬間であった。</p>
8月8日（金）	Getathuru Rehabilitation School	<p>古賀隊員は、軽犯罪を犯した少年たちにサッカーのいかにゴールに向かうかで人生を教えたいと熱く語ってくれた。少年たちは予想に反して擦れた感はなく、私たちとの交流を楽しんでくれた。ここでもまた、紙を散らすことやペンをプレゼントすることなど、支援の仕方、また子どもたちとのかかわり方について考えさせられた。</p>

学 校 名

鹿児島市立吉野東小学校

氏 名

黒 木 愛

担当教科

小学校全科

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

水道も電気もない生活。アスファルト舗装もされていない道を、20Lの水を頭に担ぎ歩く女性を見て、それとは逆の、欲しいときに捻れば水が出る蛇口があり、電気使い放題のエアコン・冷蔵庫に囲まれた日本で生活している私たちのことを、果たして「生き抜く」と言えるのだろうかと思った。ましてや、食器洗い機や洗濯機、掃除をしてくれる機械など様々なものが開発され、便利だらけの中で生きている私たちはそれを利用し、便利という言葉の中で「何もしない機械任せ」の生活に埋もれてしまっている。ビタで生きる人々は、今日、明日を生きるために水を運び、感染症と闘い、食を得て生き抜いている。

夢を叶えるために、教育がほしいと願い、少ない教材の中で必死に学んでいる子どもたちの目は、とても輝いていた。全てが揃い、不自由なく学びの場が与えられている日本では、夢も見つけられず、途方に暮れる子どもたちも多い。

今を生きるために必死に生き抜こうとする人々、全てが揃い不自由ない世界で暮らす人々。きっと、いざというときに何もできないのは後者であろう。どういう状況であれ、生きていこうとする根性・忍耐力・向上心。これらは、今の日本の子どもたちに欠けているものではないかと思う。

生き抜く力とは、これだ！というはっきりとした答えは言えないが、その人自身が、今の置かれた状況の中で、自分の課題をクリアしたり、夢や目標を達成するために努力したりするそのものが、生き抜く力ではないか考える。

2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

- 「普通」というのは、その人が抱く価値観からの見方であり、人によって「普通」は違うということ。
- 国際理解教育はおおごと、すごいこと、自分からかけ離れたものではなく、まずはその国を知ることからでも国際理解に繋がることを感じた。子どもたちにも、小さなことからでもいいのでケニアを紹介し、興味を持たせ目を向けさせていきたい。そして、世界を知るということは相手を知るということ、知る＝理解＝認め合うということは、世界の人々であれ、隣に座っている友だちであれ同じことだということ再度強く感じ、子どもたちにも語っていきたい。
- 先進国・途上国というのは、違いを言葉で表現しているだけであって、「貧しい」や「不幸」だとか、簡単に口に出すものではないなと感じた。それは、ナイロビに住むケニア人も、ビタに住むケニア人も同じ「人」であり、その人々の価値観も生き方も違い、それぞれが抱く「幸せ」も違うわけだから、むしろ「遅く生きている」という言葉が合うのではと感じた。初めは、「先進国」と呼ばれている日本に生まれた私たちが「途上国」と呼ばれる国に支援することは「支援してあげる」という見方で捉えていたがそれは違って、そこに住む人々が望む「幸せ」に、自分たちの力で少しでも近づけるように、技術や知識を学び得た私たちが伝授し支援することは、「し

てあげる」のではなく、「しながら共に学び成長し合う」ことに繋がるのだなと感じることができた。

- 失敗を恐れず挑戦する向上心、悔しいけれど諦める勇気、自分は孤独ではなく、そして一人の力で生きているのでもなく、周りの多くの人たちによって支えられて生きているという感謝を改めて実感でき、これはぜひ子どもたちにも伝えていきながら実践させ、自分たちで感じ取ってほしいことでもある。

3 教育指導への活用について

- 道徳教育… 日本人である自分の「幸せ」とは何か、向上心・勇気、感謝、国際理解など、様々な価値において活用していく。
- 社 会… 青年海外協力隊など、海外で活躍している日本人の活動状況を知り、世界へ視野を広げさせていく。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

学生の頃から興味を抱いていた協力隊の視察ができるということで応募したこの研修であったが、事前研修の中で様々な研修をしながら「ケニアで何をみたいか」という視点がなかなか見つからず、加えて「英語ができない」、「初の海外」…と不安が募り当日を迎えてしまった海外研修であった。

実際にケニアの地を踏み、協力隊や現地で活躍する日本人と対面でき、喜びと感動もあった一方で、心に引っ掛かるものが生まれたのも事実である。自分が何故この研修に参加したのか見失いかげ、来た意味があったのか見つけ出すことができず複雑な思いで過ごした日もあった。

しかし、先生方・ケニアで活躍する人たち・現地の人々・JICA 事務所の方々と出会い、色々なことを考えさせられたことは、私にとっては貴重な時間であり、一冊の本と出会えたこと、訪問先での研修、現地食を食べたこと…この研修での全ての経験が、私を大きく成長させてくれたのは事実である。今まで日本から出たことがなく、ましてや大学卒業からそのまま教育現場、つまり「学校」という組織から出たことのない自分が、思い切ってケニアまで飛んだことは、視野を大きく広げてくれたのも確かだ。一つの考えに固執せず、相手を理解し様々な考えを認め合っていくことは、自分自身もまだできていないことだと痛感でき、私はまだまだ学び成長していかなければならないと感じることができた。

それを気付かせてくれたこの研修はもちろん、全ての人、全てのこと、全ての成り行きに感謝したい。そして、体調を崩したときに迅速に対応してくださった JICA 事務所の方々、先生方には大変お世話になり、無事に帰国できたのも皆様のおかげだと強く思っている。

5 JICA に対する要望・提言

10 日間のスケジュールはとても充実していて、個人旅行では行けないようなところまで訪問できたことはとても良かったが、Secondary school には二時間半もの遅れをとってしまい、非常に申

し訳ない気持ちでいっぱいだった。一カ所一カ所をじっくり訪問したいという気持ちもあった。一日に二カ所程度の訪問でもいいのかなと感じた。

また、英語が全くと言っていいほどできない私だったので、訪問先での先生方や関係者の説明がほとんど理解できなかったことが悔やまれる。同行した英語の先生に簡単に通訳してもらったが、できれば通訳専門の方が一人同行していただけたら、とても助かっていたと思う。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

- 英語に全く縁のない私でさえ、ジャスチャーや中学英語でコミュニケーションをとることができたので、言語の違いを乗り越え、とにかく笑顔で接することが大切。
- 現地食が合わなかったため、最終的には発熱・嘔吐・下痢に襲われた。せっかくの訪問だから…という気持ちも大切だが、自分の体調、気分も考慮し、控える・抑える・諦める勇気も大切。整腸剤は常備を勧める。
- 自分が想像していた以上に動画を撮ることが多く、途中でバッテリーが切れたことがあった。昨年度の先生のアドバイスにより、予備バッテリーを持っていったことが幸いだった。
- ケニアの子どもたちに、ぜひ書道を体験させたいと思い、日本から習字道具一式を準備していた。運よく空き時間ができたため、じっくり時間をかけて書道を体験させることができた。「これだけはしたい!」と思ったことは、絶対にやり遂げてきたほうが良い。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月31日(木)	JICA ケニア事務所訪問 ナイロビ国立博物館訪問 長崎大学関係者との会食	<ul style="list-style-type: none"> ○ JICA ケニア事務所も含め、ナイロビは高層ビルやアパートも建ち並び、道路整備もされており、自分が抱いていたアフリカのイメージが一変させられた。ただ、信号があるにも関わらず警察官がそれを無視した車の誘導、信号が少ないために生じていた交通渋滞、歩道は無整備、治安が安定していないための厳しいセキュリティーなど、細かいところに目を向けると、日本との違いがよく見えてきた。 ○ 博物館にも警備員がおり、車が入るには必ずセキュリティーチェックが入る。ケニアの歴史や文化、ケニアで生きる動物など知ることができた。事前に見ていた「おじいさんと草原の小学校」で出てきたマルゲおじいさんも博物館で紹介されていた。 ○ 長崎大学関係者である風間さんから、ビクトリア湖やマラリア・住血吸虫などの話を聞くことができた。ビタ訪問前の会食だったので、訪問前に話げできたことは非常に貴重であった。

日時	訪問先	所感
8月1日(金)	<p>ジョモケニヤツタ農工大学 訪問</p> <p>モヨ・チルドレンセンター 訪問</p> <p>ナイロビ日本人学校関係者 との会食</p>	<p>○ 座学後実践的な実習を積み、即戦力が求められる職場へ就職していく。学生達の学ぶ意欲が眩しく、日本の学生達との差を感じた。日本の教育学部でも、より実践的な学びが多くあれば、現場に入ってからより力が発揮しやすいだろうと感じた。</p> <p>○ チルドレンセンターに向かう時、おそらく学校に通えていないであろう子どもたちが多く路上に屯していたこと、訪問してからの子どもたちの破けた服・サイズの合っていない靴を見ると、心が痛むと同時に、自分の中に疑問や言葉には表せられないモヤモヤが生じた。松下さんがされている活動により、確かに救われる子もおり、夢を抱く子もおり、センターで幸せな日々を過ごしている子もいるのも現実。ただし、数えきれないほどのストリートチルドレンがいるのもまた現実。たった一人の活動で目の前の子どもを救っても、国全体の意識、取り組み体制を変えなければ、どうしようもないのではないか、結局は自己満足に終わってしまうのではないか…という、自分でも何故このような思いを抱いてしまうのか分からなかったが、このときはすっきりしない気持ちを抱いていた。</p> <p>○ 鹿児島の西之表市立榕城小学校の松元先生とお会いでき、日本人学校のことについて情報を得ることができた。もし機会が訪れたなら、自分も日本人学校で勤務してみたいという思いを抱くことができた。</p>
8月2日(土)	<p>象の孤児院見学</p> <p>ジラフセンター見学</p> <p>ロート阿子島さんと会食</p>	<p>○ 母親象を失った孤児象を保護している孤児院の見学であったが、野生に帰るまでのトレーニングを積む孤児象たちの生き生きとした姿を見ることができ、アフリカ象の持つ問題も知ることができた。また、ジラフセンターでは、間近にキリンを感じることができアフリカならではの体験ができて心の癒しとなった。</p> <p>○ ケニアでの起業ということで、一人遅しくケニアで活動している阿子島さんと会うことができ、彼女の芯の強さとバイタリティーを感じ、また彼女が生き生きと生きているその輝きを生み出すものは何なのか、考えさせられた会食になった。私には到底無理。強さがほしいと思った。</p>
8月3日(日)	ナイロビ→キスム・ビタ移動	○ ナイロビ空港国内線利用。放送案内がスピーカーだったこと、機内乗り込みまでが徒歩だったことなどの違いも見られた。さすがアフリカと感じたことは、空から見た大陸は果てしなく広がったこと。地

日時	訪問先	所感
		<p>球に住む人類はちっぽけで、なぜ人は争いを起こしてしまうのかと、惨めにも思えてきた。</p> <p>ビタへ向かうフェリー乗り場で、ビクトリア湖の水で食器を洗う女の子を発見。水道はなく、20Lの水を頭に担いで運ぶ女性を多くみた。ナイロビでは感じられなかった、所謂「貧しさ」を目の当たりにしたのだが…このときは簡単に「貧しさ」という言葉が頭を過っていた。</p>
8月4日(月)	<p>長崎大学ビタ事務所訪問 ビタ教育局訪問 ビタ保健局訪問</p> <p>Primary School 訪問 Secondary School 訪問</p> <p>民家訪問</p>	<p>○ 嶋田先生による熱帯病についての講義があった。病気や予防の新発見が、社会に変化をもたらすという言葉が印象的だった。安全な水が飲みたい、清潔な家で暮らしたいという気持ちは、先進国も途上国も関係なく、人として思うことであり、全人類が生きていく上で最低限のことは叶い、幸せと感じながら生きていくために、たまたま先進国に生まれ育ったわたしたちができることを、途上国といわれる国に支援していくことは、決して無駄ではないと感じることができた。モヤモヤが少しずつ解消されていた。</p> <p>○ ケニア漫才、歌、踊りなど、様々な出し物を披露してくれた子どもたち。子どもは国境に関係なく、目の輝きは同じだなと感じた。しかし、清掃されていない教室、三人で使う狭い机に、三人で一冊の教科書、穴を掘っただけのトイレなど、決して充実しているとは言えない学校の環境に差を感じた。一人一つの机、水洗トイレ、確保されている清掃時間など、日本の教育の充実と日本の子どもたちの贅沢さを感じた。</p> <p>○ 牛糞と土で作られた壁の家は、正直きつい匂いだった。蠅も集り、電気水道はもちろん無く、ランプの生活。台所は離れた小屋にあり、中は真っ暗。穀物庫や水浴び場も外。そこに住むローズさんの願いは、「子どもを大学に行かせたい」ということ。日本では努力すれば叶う願いも、努力だけではどうにもならないケニアの現状がある。</p>
8月5日(火)	<p>漁村見学 ビタ・キスム→ナイロビ 移動</p>	<p>○ ビタからナイロビへの移動日、昨晚からの吐き気に見舞われ、漁村見学は断念。ナイロビまでの移動は何とか耐えられたが、ナイロビ空港で限界を迎える。ただ、空港で声を掛けてくれたケニアの人々はとても優しく、皆「大丈夫か」と心配してくれた。人種は違っても、人としての温かさは皆同じなのだと、当たり前なことではあるが、間近に感じられた。</p>

日時	訪問先	所感
8月6日(水) 8月7日(木)	ナイロビホテル	<p>○ 2日間、ナイロビのホテルで休養。JICA ケニア事務所の宮田さんが持って来てくださった「私の夫はマサイ戦士」という本を読んだ。そこに書かれてあった心に響いた言葉がある。「いろいろな国の生活、価値観、生き方、幸せが違うことが理解できれば、戦争も起こらないのではないか。」世界にはいろいろな人がいて、いろいろな価値を持ち、いろいろな暮らしをしていて、様々な人生があること。まずはそれを知ることが大切なのだ、心に真っ直ぐ入ってきた。所謂「途上国」に手を差し伸べることも、これもまた人生であり、そういう現状を知り、子どもたちへ伝えることも人生の一つ。どういう形であれ、世界を知るといことはとても大切なことだと、改めて実感することができた。</p> <p>こんなこと、誰でも分かるというような答えだが、体調を崩し二日間寝込んだことで、今回の研修の意味や自分がこうなった意味も考える時間ができ、素敵な本とも出会え、これはこれでよかったと思うことができた。JICA 関係者の皆様や同行した先生方には大変ご迷惑をかけ、申し訳なく思っている。ただ、私は多くの人に支えられているということもまた、感じる事ができた二日間だった。</p>
8月8日(金)	Rehabilitation School 訪問 マーケット視察 JICA ケニア事務所訪問 JICA ケニア事務所関係者と会食	<p>○ 先に訪問し、時間があつたので、日本から準備していた習字道具で、子どもたちに書道を体験してもらった。一緒に筆を持ち、名前を平仮名で書き、皆とても嬉しそう、こちらも嬉しくなった。日本文化を紹介できて充実した時間となった。長縄やだるまさんがころんだなど、他にも日本の遊びに挑戦してもらえた。</p> <p>掃除やご飯の用意も当番制で、子どもたちはよく活動していた。協力隊員の古賀さんも生き生きと活動しており、子どもたちと現地の先生方と、共に生き共に学び成長しているのだなと感じた。</p> <p>○ マサイマーケットはとても賑わっており、値段交渉をしながらの店主とのコミュニケーションは楽しかった。</p> <p>○ 最後、事務所の方々も含め、先生方の10日間で感じたことを紹介しあった。その時間がとても充実しており、先生方のそれぞれ感じた熱い思いを聞くことができ、こみ上げてくるものがあつた。</p>

学 校 名

熊本市立武蔵中学校

氏 名

田 上 康 二

担 当 教 科

数 学 科

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

ケニアの人々、青年海外協力隊の人々、その他たくさんの方からいろいろな「生き抜く力」を学ばせてもらいました。

- ・ 「主体的につかみ取る力」

与えられるのではなく、将来を見据え自らの手でつかみにいこうと行動できる力。

ケニアで夢に向かって頑張っている人々の姿を見ることができました。しかし、ケニアの自立を目指して現地の人にはもっと頑張りたいところでもあります。

- ・ 「人と関わる力」

周りに関わりながら、協力し、助け合い高め合っていける力

協力隊の方々の取り組みは周りの人との協力の上に成り立っていました。不便さや困難も協力することで乗り越えられます。

- ・ 「様々な価値観を受け入れることができる力」

偏見を持たず、固定観念にとらわれず、異質な物を受け入れることができる力

この研修を通して、自分の中の偏見に気づくことができました。心のバリアーを解いて、異質な物を理解することは、共生の基本でもあります。

- ・ 「グローバルに考えることができる力」

日本という狭い範囲ではなく、世界規模に目を向け考えることができる力

生徒たちは現在狭い世界で生きています。この国際社会では、全てのことにおいて、もっと広い世界規模の視野で考えられるようにならないといけません。

2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

- ・ ステレオタイプなアフリカではない、全く予想しなかった一面をたくさん見ることができ、自分の中にある偏見に気づき、取り払うことができました。
- ・ 自分の常識・スタンドが打ち破られました。当たり前を思っていたことがずいぶん崩され、より多面的な見方ができるようになりました。
- ・ ケニアの人々の幸せそうにしている姿を子どもたちに伝えていきたいです。豊かではなくとも、病気などの危険と隣り合わせでも、家族で幸せそうにしている姿をみて「真の幸せ」を考えさせられました。

③ 教育指導への活用について

- ・ 総合的な学習の時間
 - 世界に目を向けよう（取った写真でのフォトランゲージなど）
 - ケニアの文化・生活を知ろう（写真や品物を見せながら担任の話で）
 - 私達にできる国際協力（今できること、将来できること）
- ・ 道 徳
 - 気高く生きること（協力隊の方々の生き方）
 - 真の幸せとは（ケニアの人々の幸福観などから）

④ 研修に関する全般的な所感／意見について

このような素晴らしい研修に参加させていただき、ありがとうございました。特に、日本でのお世話や現地での同行をしていただいた JICA 九州の皆様、数々の研修先との調整や長い行程の調整などを段取っていただいた JICA ケニア事務所に皆様には大変感謝しております。スケジュールが詰まっており、日々の振り返りをする時間が不足していましたが、それでも沢山の訪問先を設定していただいたことや、いろいろな方との会食を設定していただいたのは大変ありがたいです。

⑤ JICA に対する要望・提言

ナイロビでは流れていく車窓越しの風景でしか見られなかった人々の生活が、ビタやエンジニアでは中に入って五感で感じることができました。キスムなども含めて、田舎や安全な街の人々の生活をもっと時間をかけて体験してみたかったです。

⑥ 今後の本研修参加者へのアドバイス

- ・ 研修前に黄熱病や A 型肝炎などの複数の予防接種を受けようとする、日数的にかなり厳しいです、早めに調べて行動しましょう。
- ・ 研修出発前は 1 学期末で忙しい時期ですが、歴史や文化、自然など事前に学習しておきましょう。現地で活動するときに、勉強しておけばよかったと後悔することが多々ありました。
- ・ 英語が十分通じるにしても、現地語を多少なりとも覚えておくと、コミュニケーションがかなり捗ります。
- ・ 場所やお店によって売っている物も、値段も全然違います。後で安く買おうと思って、二度と出会えなかった物もありました。その辺りを考えながら計画的に、お土産や教材を買きましょう。
- ・ 現地で協力隊など日本人の頑張っている姿をみると、何か応援したくなって、予定になくてもつついとお土産を渡してしまいます。ちょっとしたもので良いので、かなり多めに持っていく

といいでしょう。

- ・ 事前、事後にメーリングリスト等でメンバー同士もっとコミュニケーションをとっておくべきだったと思いました。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月31日(木)	○ヤヤ・センター ○JICA ケニア事務所 ○ケニア国立博物館 ○長崎大学関係者との会食	<p>ケニアの首都ナイロビに到着。標高 1600m 程あるので結構肌寒い。</p> <p>ショッピングセンター等の入り口には銃を持った警備員がいたり、入るときもセキュリティチェックがあったりするなど、去年のショッピングセンター爆破テロ以来のナイロビの緊張感を肌で感じる事ができた。物価は日本に比べると安く、品物はとても豊富である。野菜や果物、花などの量も種類も多く、事前に持っていたアフリカのイメージとはかなり違っていた。</p> <p>JICA ケニア事務所での打ち合わせでは、JICA の協力の概要を学んだ。また、マラリアの危険性を随分と諭され、その後用心のために予防薬と検査キットを買うことにした。</p> <p>ケニア国立博物館では、英語の説明を完全に理解することができなかったが、ケニアの歴史・文化・自然などについて学んだ。特に人類発祥の歴史については、興味深いものがあった。</p>
8月1日(金)	○ジョモケニアツタ農工大学 ○モヨ・チルドレン・センター ○ナイロビ日本人学校関係者との会食	<p>JKUAT では、実践型の授業も取り入れてあり、実習を見学することもできた。学生たちは熱心に実習をしており、将来国を動かしていく若者たちの熱を感じた。学校の取り組みの中では、無理のない現地型イノベーションやパンアフリカ大学構想が心に残っている。現在はただ日本が資金や物品で支援するだけでなく、様々な日本の大学との人的交流も行っているそうである。思った以上に日本とのつながりがあることを学ぶことができた。</p> <p>モヨ・チルドレン・センターの代表の松下さんは、ストリートチルドレンなどを引き取って一緒に生活をしながらの更正を目指して活動をされている。70歳も近い年齢だそうだが、まだまだこれからも沢山やりたいことがあると、歳を感じさせない前向きな姿勢には感銘を受けた。子どもたちはそれぞれに大変な育成環境を持っているが、明るく前向きに生きており、それぞれに夢も持っている。「今欲しいもの</p>

日時	訪問先	所感
		<p>は何か？」と質問に「教育」という答えが返ってきたのには驚いた。今の日本の子どもたちに是非聴かせたい言葉であった。子どもたちとは一緒に遊ぶこともできて、大変楽しい時を過ごすことができた。</p>
8月2日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ○象の孤児院 ○ジラフセンター ○民芸村 ○ロート支社現地職員との会食 	<p>今日訪れた方面はナイロビの中でも高級な地域であり、街中心部とは違ってのんびりとして落ち着いた地域であった。道ばたでは、ナーセリーが多数有り、樹木の苗が育てられて売られていた。ポットに入って並べられているたくさんの苗木、それに水をまいている人、沢山の花も咲いており、花が咲いている木も多く、いわゆるアフリカのイメージとはほど遠い。花の輸出産業が拡大しているのも納得がいく。</p> <p>象の孤児院でははぐれた子象の見学を、ジラフセンターではキリンへの餌やりをすることができた。</p> <p>夜のロート社員との会食では、現地企業・政府と協力してアフリカで新しく市場を開拓しようという取り組みや、それに伴う現地ならではの特殊性や苦労について知ることができた。料理は1時間半経ってやっと出てきた。ケニアでは結構あることなのだそうで、これもスワヒリ語で言う「ハクナマタタ」の精神であろうか。</p>
8月3日(日)	<ul style="list-style-type: none"> ○キスム空港 ○フェリー乗り場 ○ビクトリア湖 	<p>キスムで飛行機を降りると、ナイロビとは違うかなり蒸し暑い気候であった。</p> <p>キスムからは普通車での移動であった。今までのバスより低い視線で、街は安全なために窓を開けても良く、今までよりもはるかに現地の空気を直接感じることができた。道路脇ではのんびりと過ごしている人々が多い。おしゃべりをしたりして、めいめに過ごしている。裕福ではないのだろうが、スローライフを送るその姿は幸せそうであり、幸せって何だろうかと考える。皆気軽に手を挙げて挨拶をしてくれる。特に、子どもたちも手を振ると笑顔で一生涯懸命に手を振り返してくれる。道中飽きることはなかった。</p> <p>フェリー乗り場では、衛生面の心配はあるが、せっかくなので道ばたで売っているピーナッツやお菓子を買って食べてみる。安くて美味しく、土地の人が食べているものを食べられるのがうれしい。</p> <p>フェリー乗り場では現地の男性に声をかけられ、いろいろと話をすることができた。彼は道路公団のエンジニアで、以前日本に行って橋の建設について学んだことなどを話してくれた。意外と、民間レベ</p>

日 時	訪 問 先	所 感
		<p>ルでの交流も多いのだということを実感する良い機会であった。</p>
8月4日（月）	<ul style="list-style-type: none"> ○長崎大学ビタ事務所 ○ビタ県教育局 ○ビタ県保健局 ○ドクターウィリアムズ・プライマリー・スクール ○ワレレ・セカンダリー・スクール ○民家 ○長崎大学ビタ事務所スタッフとの会食 	<p>JICAの草の根技術協力事業で協力されている長崎大学ビタ事務所を訪問。長崎大学は熱帯感染症の研究として、病原菌の研究だけでなく、住民や媒介生物の定期的な調査、警戒システムの構築なども行っている。その一環としてJICAの草の根技術協力事業として、学校の衛生環境の整備をされている。まずは、なぜ長崎大学なのか、なぜケニアなのかを太平洋戦争以前まで歴史をさかのぼり、説明を受ける。</p> <p>昼食はとてもローカルなレストランでの食事であった。レストランの裏の宿泊所には、エイズ対策の避妊具無料配布箱があった。現地の人は避妊具を好まないらしく、エイズに対しても「ハクナマタタ」の精神が見える。</p> <p>プライマリースクールにはJICA草の根技術協力事業によりトイレや水タンクが設置されていた。これらの設置で子どもたちの衛生環境が相当改善されるようだ。そしてそれを通して子どもたちは衛生についてしっかり学ぶことができる。長期休み中のために授業などを見ることはできなかったが、子どもたちが歓迎の踊りなどを披露してくれてとても楽しい時を過ごすことができた。子どもたちは、日本の場所も国旗も知らないが、サッカーの香川選手はよく知っており、ケニアでのサッカー人気がよくわかる出来事であった。</p> <p>セカンダリースクールでは、17歳の男子生徒から、いきなり「日本に行くお金を出して欲しい」と頼まれる。将来は医者になりたいというので、自分でなんと頑張るって欲しいと説得しつつ切なくなる。これはこの生徒だけでなく国の問題としても同じ課題であると思われる。早く人に頼らず自分でしっかり立てる人・国になって欲しいものである。</p>
8月5日（火）	<ul style="list-style-type: none"> ○漁村 ○サリットセンター ○JICAケニア事務所スタッフとの会食 	<p>朝から地元の漁村の見学をする。漁師たちの収入源は、日本でもおなじみのナイルパーチやティラピア、夜明かりを付けてアミですくった小魚などがある。ナイルパーチはすぐ横に加工工場が有りヨーロッパや日本への輸出用に、ティラピアは安いタンパク質源として地元用に、小魚は干してイリコのような感じで料理に使われるとのこと。村の人々はビクトリア湖で魚を捕りつつも、生活排水や汚水をビクトリア湖に流してしまい、どんどん環境が悪くなってお</p>

日時	訪問先	所感
		<p>り、飲料水としても使うので病気も減らないとのこと。</p> <p>サリットセンターでは、現地の教科書を買うことができた。</p>
8月6日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ○ムエア灌漑局 ○ニャミンディ頭首工 ○ムエア灌漑農業開発センター ○水田 ○青年海外協力隊九州出身隊員等との会食 	<p>今日はナイロビから北東部のムエアの視察が中心であった。ムエアは広大な水田が広がるケニアの米所であり、その風景は全くといって良いほどアフリカを感じない、むしろ日本や東南アジアと言った感じの所であった。ムエアでは JICA の様々な種類の支援形態を見ることができた。過去の無償資金協力時代の灌漑施設の整備事業、有償資金協力として新しい農業用ダムなどの整備事業や農業振興事業、専門家派遣などで、現在増え続けているケニアでの米需要に対応しようとしている。</p> <p>夜は九州出身の青年海外協力隊との会食があった。協力隊の人たちと話すことで、意外と若い頃から海外支援に興味を持っていたこと、それが学校の授業であったり、先生の影響であったりすることがわかり、学校・教師としての役割の大きさを感じた。</p>
8月7日(木)	<ul style="list-style-type: none"> ○エンジニア ○ナクル国立公園 	<p>今日はナイロビから北西部の比較的高地で青年海外協力隊の活動を見る研修の日であった。エンジニアは標高 2500m 程度の所に有り、外国人などほとんどいない田舎町であった。乳牛と羊が多くまるでスイスのようなものである。初めてローカルな市場を歩いてみると、赤ちゃんが自分たちを見て泣いてしまった。お母さんによると初めて白人を見たからだそうで、自分たちの方がエイリアンであると強く実感する機会であった。エンジニアで活動している永瀬隊員は地元の農業局で地元の農業の振興を目指して日々取り組んでいる。隊員がいる間だけの取り組みにならないよう、地元へ根付くよう、地元の農業に熱心な青年と協力して、ほかしやマルチの普及などを目指して日々活動し、ついで今後の動機付けのためにも農業コンクールへの入賞も狙っている。「してあげる」のではなく「できるようになる支援をする」姿勢が見られた。ナクル国立公園では堺田隊員によりガイドをしてもらい動物を見ることができた。ナクル湖はピンクカーペットと呼ばれる数百万羽のフラミンゴで有名な湖であったが、近頃環境が急激に変わりその数は激減している。そのため、堺田隊員はサファリのガイドをするだけでなく、ナクル湖の環境を守るために、生活排水の垂れ流しなどを防ぐために地</p>

日 時	訪 問 先	所 感
		<p>域住民への啓発活動など地道な努力も行っている。このように遠く離れた外国でがんばっている日本人がいるということは、日本の生徒にとっても励みになり勇気づけられると思う。</p>
8月8日（金）	<ul style="list-style-type: none"> ○ゲタスル・リハビリテーション・スクール ○ビレッジ・マーケット ○マサイ・マーケット ○JICA ケニア事務所 	<p>今日は、ナクルからナイロビに帰りケニア最後のまとめの日となった。</p> <p>ナイロビへの帰り道は、昨日見るができなかった展望所からの素晴らしい眺めを見ることができた。グレート・リフト・バレーの絶景である。ナイバシャ湖、ロンゴノット火山など特徴のある美しい地形が広大な大地に広がっている。この大地の活動が人類発祥へとつながったのかと感心しながら絶景を楽しむことができた。</p> <p>ゲタスル男子更正学校は日本でいうところの鑑別所のようなところで、様々な問題をおこしてケニア全土からやってきた子どもたちは、ここで正確な学力、職業能力等を審査され、次にどこの厚生施設に行くかを決められる。逃げる生徒もいるそうだが、子どもたちは明るく生活していた。毎日ご飯の心配をせずに生活できることや、勉強できることに喜びを感じている生徒も多いそうだ。その点は日本の鑑別所とは大きく違う点であった。子どもたちとは、一緒に紙飛行機を作って飛ばしたり、長縄飛びをしたりと楽しく遊ぶことができた。しかし、紙飛行機を折るときには、苦手なのか意識していないのか、線に合わせて折るというのができない子どもも多く、紙をきれいに折るという作業自体ができて当たり前ではないことに気づき、また自分のスタンプが崩れていった。また、ここでは古賀隊員による体育でのサッカー指導も行われていた。古賀隊員によると、このたちはとても運動能力が高いが協力プレイが苦手であるそうだ。そこで、サッカーを通して技術面だけでなく、努力すること、協力することの大切さ、ゴールするためにどのようにしたらいいのか考える力などを学び、そして成功体験をつむことで少しでも更正させようという取り組みである。</p>

日 時	訪 問 先	所 感
8月9日(土)	○ケニア空港	<p>今日は完全に帰国のために移動日である。朝から空港へ移動し、チェックイン。飛行場では、水で飲んではいけない場所で水を飲んでしまい、ガードから「逮捕されたいのか?」と脅され現金を巻き上げられるという体験もした。警察官な公務員の汚職や小遣い稼ぎの取り締まりの噂には聞いていたものの、実際に体験でするとかなり残念である。目先のことしか考えずに将来の事をあまり考えない悪い部分がこのような所にも出ているのだろう。</p>

Ⅲ. 授業実践例報告書

水を運ぶ人生

大谷 真理
OTANI MARI

西南学院高等学校（福岡県）

担当教科：英語科

●実践教科：チャペル（礼拝）の時間

●時間数：1時間

●対象学年：高校3年生

●対象人数：400名

カリキュラム

■実践の目的

- JICA 九州の存在
- ケニアの現在の姿・状況
- ケニアで支援する日本・個人の紹介
- ケニアの子ども・訪問先の生徒の姿と状況
- なぜ、ケニアの子どもは自殺をしないのか

■チャペル（礼拝）の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
「水を運ぶ人生」	讃美歌 斉唱 聖書朗読 祈 禱 メッセージ 生徒による特別讃美 歌 斉唱 訪問して下さった JICA の方々の紹介	パワーポイント

チャペル（礼拝）の詳細

進学校の高校3年生ということもあり、2学期のこの時期に英語の授業時間を連続して割くことが状況的に難しいと判断、宗教主任と相談し、学年別実施されているチャペル（礼拝）の時間に3学年の生徒全員に対して一斉教授の形を取った。

事前に授業担当クラスでは、JICA のこと、JICA 九州の海外研修のこと、ケニアのことなどを、授業のなかで小出しして情報提供し、またチャペル当日には JICA 職員の方々が訪問されることも併せて告知しておいた。

視聴覚教材を使用して生徒の興味を喚起させ、ケニアの状況、ケニアの子どもや生徒の姿をり

アルに映し出し、彼らが抱える困難な状況に焦点を当てた。

同時にケニアの子どもや生徒が、自分の試練をどのように捉え、どのように get through (乗り越え) ようとしているかを考えさせるため、聖書の言葉 (ヨハネによる福音書 2 章 1 - 11 節) を引用し、どんな苦しい状況にあっても自殺せず、自分の水がめを運ぶことの意義を説いた。

成果と課題

400 人を対象に話すので、生徒との interaction が取りにくく、ケニアの写真を 1 枚でも多く提示することで、たとえ説明が無くても生徒自身が何かを感じてくれるよう工夫した。

限られた時間で伝えきれなかったこと・またチャペルという宗教的な場所では公に話せなかったことなどは、後日授業時間に補足説明し、生徒の質問に答えることによって隙間を埋めるように努力したが、自分の授業担当以外のクラスでは、そのような時間が取れなかったことが心残りである。

わたしのメッセージのあとに、女子生徒二人にゴスペルを歌ってもらった。

生徒による特別賛美は、礼拝において初めての試みであり、ゴスペルの選曲、生徒への依頼、毎日の練習など苦心した。しかし、等身大の彼女たちの歌声は、やはり美しかった。また試練の渦中にいてもなお「神さま、感謝します!」と試みの意義を問い、来るべき希望を待ち望む歌詞に心を開いた生徒も少なくはなかったようである。

くわえて、朝 8 時 50 分からの礼拝にもかかわらず、JICA 国際協力推進員の西宮奈緒美さん (JICA デスク北九州) と松永広大さん (JICA デスク福岡) のお二人が訪問して下さった。礼拝後に国際協力や JICA に興味のある生徒たちが、お二人のもとに集まり質問をし、アドバイスをいただいたことは、大きな成果だったと思う。礼拝後の授業においても、アクロス開催の「国際協力フェスタ地球どんたく 2014」、福岡市中央図書館開催の「本でつながる世界・世界につながる読書」のフライヤーも興味のある生徒に配布した。



チャペルの様子

参考資料・教材など

さいきん急激に経済成長した首都ナイロビから少し車を走らせると、アスファルトの道路は赤土に変わる。そしてそこでは、昔からのケニアの人々の生活が営まれており、時間の流れがゆるやかで、なぜかほっとする。

水汲みというのは女・子供の仕事である。

黄色いバケツは、およそ20リットルの水を運ぶことができ、子どもが頭の上に乗せて道端を歩く姿はケニアの日常である。

この水汲みの子どもたちの姿を、今回は一つの象徴として生徒に提示した。

一見、重労働に見えるこの水汲みは、大切な家事労働の一つである。そして子どもは家族としての役割を担い、ごく当然のこととして毎朝・毎夕に水を運ぶ。

これを聖書の話と結び付けて、生徒に「水を運ぶ人生」と題してメッセージを語った。

【参考資料① 新約聖書 ヨハネによる福音書2章1－11節】

三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メートル入りのものである。イエスが、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした。イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかったので、花婿を呼んで、言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったころに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

【参考資料② ゴスペル「感謝します」】 https://www.youtube.com/watch?v=71X_0s8Lq3g

1.

感謝します 試みにあわせ 鍛えたもう主の導きを

感謝します 苦しみの中に 育てたもう主のみこころを

しかし 願う道が閉ざされた時は 目の前が暗くなりました

どんな時でも あなたの約束を 忘れない者としてください

2.

感謝します 悲しみの時に 共に泣きたもう 主の愛を

感謝します こぼれる涙を ぬぐいたもう主の あわれみを

しかし 願う道が閉ざされた時は 目の前が暗くなりました

どんな時でも あなたの約束を 忘れない者としてください

3.

感謝します 試みに耐える 力をくださる み恵みを

感謝します 全てのことを 最善となしたもう みこころを

【参考資料③ 早川千晶さんのブログから】

早川千晶さんはケニア在住のライター。1999年よりケニア最大のスラム、キベラでマゴソスクール（約470人）とジュンバ・ラ・ワトト子どもの家（約30人）を運営、子供たちの支援を行っている。スラム住民、先住民族の生活向上プロジェクト、ケニアのスタディツアーなどを主宰。

それから夏休みのスタディツアーを何本か行いましたが、その中で高校1年生二人が参加してくれたツアーがありました。自分たちと同じ年代の高校生が来てくれたということで、マゴソ卒業生クラブの面々は非常に喜び、とても密で素晴らしい交流となりました。みんなでキベラを歩き、ディスカッションをして、そして「マゴソTV！」を一緒に見て意見交換をするときを持ちました。

15歳高校生のコウヘイ君がこう質問しました。

「日本は年間3万人以上の自殺者が出るけれども、なぜキベラの人たちはこんなに困難な状況であるにもかかわらず自殺しないのか。その生きる原動力はどこから来るのか。」この質問に対してみんなとにかくしゃべりたいという感じで、すごくたくさん答えが返ってきました。

「まずは、神様を信じているから。だから絶対に自殺しない。」

「困難というのは、神様が理由があって与えてくれていると信じている。

だから、困難があっても生きていくのは当然のことだと思っている。」

「それと、大変なときに、相談できる相手がたくさんいる。

つらいときには、つらいと話せる相手がたくさんいる。

そうして、励ましてくれる人がたくさんいる。

私たちはいつも励ましあっているから、自殺しないで生きていける。」

「歌も、励ますための重要なことのひとつで、私たちはただ歌っているのではなくて、そこには、励ましとか、大事な意味合いがたくさん含まれている。歌えば元気が出てくるし、がんばるための力が生まれてくる。」

【参考資料④ 早川千晶さんのブログから】

さて、「JICAからの支援は受けられないの？」とのご質問をくださった方がいらっしゃいましたのでここで答えいたします。JICAや日本大使館にご勤務されている方々で、個人的にマゴソスクールを応援して下さりご支援くださっている方々がたくさんいらっしゃいます。こういう草の根の活動に資金を出して下さる公的な支援も存在しています。ですが、それを受けるに可能ではないマゴソスクール側のいくつかの問題点があります。ひとつに、スラム地区ですので違法の居住区であり、土地の正式な所有権がありません。そもそも撤去対象にあたっている地域ですので、そこに建設などのために公的資金の支援を受けることができません。もうひとつに、マゴソスクールの

スタッフがプロポーザルを書いてそのような公的資金にチャレンジできるような能力に至っていません。これは能力的なキャパシティの問題なので今後改善できるかと思いますが、彼らも努力しているなりに、今はまだそこまで出来る人が育っていません。彼らがアクセスしやすいもっと身近な団体からは、ぽつぽつとご支援をいただいています。例えば、キベラの知人を通じて紹介を受けたキリスト教団体や、そこを通じて紹介を受けたアメリカの大学のアフリカ系の教授。キベラ内で食糧援助や貧困児童の支援をしている NGO 団体。などです。いつか彼ら自身が堂々と表舞台でいろいろな資金をゲットすべく動くことができる能力と自信がつくといいなと思っています。

(2013年11月18日 3:41)

つながる ～世界と日本～

吉 永 早紀子
YOSHINAGA SAKIKO

中津市立本耶馬溪中学校（大分県）

担当教科：英語科

- 実践教科：総合的な学習の時間
- 時間数：6時間
- 対象学年：2年生（1時限のみ全学年）
- 対象人数：16名

カリキュラム

■実践の目的

日本のような先進国でも、自分達の暮らしが途上国を含む諸外国との関わりによって成り立っていることを知り、国同士が相互補完的に支えつながり合うことの意味とその必要性を理解する中で、「世界人」としてこれからの国際社会を生きて行く姿勢を育てる。

<各時の目的>

- ① 普段なじみの薄いケニア（アフリカ）について知り、ケニアと日本のつながりを理解する。
- ② ケニアを含め日本とあまり関わりがないと思われがちなアフリカ諸国と、日本が貿易を通して深く繋がっていることを知る。
- ③ 貿易ゲームを通して、国同士の関わりや経済格差が広がる仕組みを体験的に理解する
- ④ 貿易ゲームの結果やゲーム中の出来事から、国際社会が抱える問題や課題を知り、それらの原因や予防策・解決方法について考える。
- ⑤ 青年海外協力隊OBの話聞き、発展途上国とそこに暮らす人々の生活について知り、知見を広める。また、途上国の抱える課題に対して、同じ地球に暮らす世界人としてどう向き合っていくべきなのかについて考える。

■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<p>【1時限】 テーマ：「ケニアってどんなところ？」 ねらい：ケニアという国について学ぶ中で、ケニアと日本に“つながり”があることを知る</p>	<p>① 研修の報告会を兼ね、全校生徒を対象に、写真や動画をまとめたパワーポイントを使ってケニアを紹介する（街並み、人、学校、ファッションなど）</p> <p>※留意点※</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の持つケニアへのイメージ（事前アンケートの結果）とは逆の写真をあえて選ぶ ・両国の関わりが見える写真（TOYOTAの車など）を使い、つながりを感じさせる 	<ul style="list-style-type: none"> ○ パワーポイント（研修で撮影した写真・動画） ○ ケニア出身歌手の楽曲（現地で知り合ったケニア人のお勧め）

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<p>【2時限】 テーマ：「日本と世界 ～モノのつながり～」 ねらい：食べ物、資源等の輸出入において、日本がアフリカを含む多くの国に支えられていることを知る</p>	<p>① 世界の国々が、「先進国」と「途上国」に分けられた時、先進国は圧倒的に少なく、日本はその数少ない1つである事を確認する</p> <p>② 先進国であり豊かとされる日本が、なぜ他国との関わりを持たなければいけないのかを問いかける</p> <p>③ たこ焼き、バラの花など18の項目カードを各班に配り、国内で生産しているもの、輸入しているものなどに分類し、そう思う理由などを話し合わせる</p> <p>④ アフリカを含む諸外国からの輸入によって自分達の生活が成り立っていることに気付かせる</p> <p>⑤ 外国からの輸入がなくなったら、自分達の生活がどう変化するのかを考える</p>	<p>○ 「国際理解教育実践資料集 (p.10~12) : JICA」</p> <p>○ 「どうなっている？ 世界と日本(p.2~11) : JICA」</p> <p>○ 項目カード</p>
<p>【3、4時限】 テーマ：「貿易ゲームに挑戦!」 ねらい：貿易ゲームを通して、貿易を中心とした世界経済の基本的な仕組みを理解する</p>	<p>① 前時の復習を行なった後、授業後に生徒が書いた感想から「貿易などをしなかったら、日本の方が貧しくてアフリカの国々の方が豊かだと思った」という一文を紹介する</p> <p>② 「では実際に貿易をしたらどうなるか体験してみよう！」と伝え、貿易ゲームを行なう</p> <p>③ ゲーム終了後、結果を発表する</p> <p>④ 「嬉しかったこと、腹が立ったこと、困ったこと」など、ゲーム中の気持ちを書かせる</p> <p>→ 次の授業の教材とする◎ ※ JICA 大分デスクより推進員2名参加</p>	<p>○ パワーポイント</p> <p>○ 「新・貿易ゲーム [改定版] 経済のグローバル化を考える」</p> <p>○ 貿易ゲームに必要な道具</p>
<p>【5時限】 テーマ：「貿易ゲームから見える世界 ～国のつながり～」 ねらい：ゲームの結果やゲーム中の出来事から、世界で起きている様々な問題（南北格差や環境問題）に気付き、その解決に向けて自分の行動のあり方について考える</p>	<p>① ゲーム開始時に与えられたモノ（はさみ＝秘術、紙＝資源など）が何を意味していたのか、与えられたモノの違い（国の豊かさなど）は何を意味していたのかを確認する</p> <p>② 貿易ゲームの最中の生徒の発言・行動をピックアップし、その時の気持ち、その気持ちになった理由、その気持ちを生まないために何ができるかについて考えさせる</p> <p>③ ゲームの前後で格差がさらに広がっている事から、南北格差について考えさせる</p>	<p>○ パワーポイント</p>

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
	④ ゲームによって出たゴミ（紙の切れ端）が、先進国ほど多いことから、環境問題について考えさせる ⑤ 収入に応じて得られた食糧（ドーナツ）が、途上国ではかなり不足していること、先進国では余るほどあることから、食糧問題について考えさせる	○ 貿易ゲームで発生したゴミ（紙の切れ端） ○ ミニドーナツ（収入に応じて得られる食糧）
【6時限】 テーマ：「JICA・青年海外協力隊って？ ～人のつながり～」 ねらい：JICA や青年海外協力隊の話聞き、先進国である日本に生きる人間として、より良い世界のために何ができるのかを考える	① JICA 大分デスク推進員の話聞き、JICA の活動等について理解させる ② 協力隊員の話聞く（2名） ③ 質疑応答 ④ 生徒代表感想発表・お礼のこトバ ⑤ 感想記入→後日 JICA 大分に郵送	○ パワーポイント ○ PNG の紙幣 ※ 講師：JICA 大分デスク推進員 1名 協力隊 OB 1名

授業の詳細

(1) 「ケニアってどんなところ？」

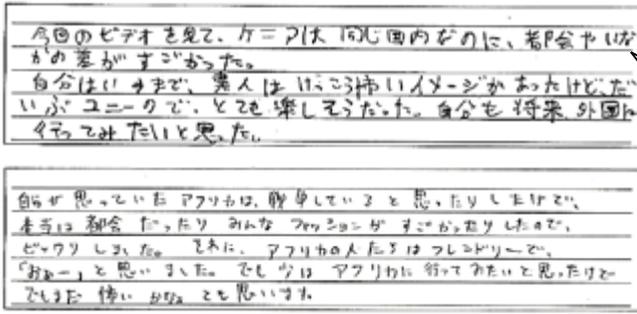
研修で撮影してきた写真や動画を使って、ケニアの町や人々の生活、ケニアで活動する日本人、ケニアで見つけた日本（ケニア人と日本人の両親を持つ客室乗務員、日本車、JICA からの支援品）など、自分の観てきたケニアを紹介しました。「世界」という言葉がタイトルに入っている情報発信型のテレビ番組が数多くあり、また、インターネット等で様々な情報が手に入る現代、決して生まれて初めて見るアフリカの姿ではなかったはずですが、驚いたり笑ったりしながら生徒たちはとても熱心に話を聞いていました。やはり、普段一緒に生活している身近な人の実体験として知る情報は、生徒たちにとって現実味を帯びたとてもリアルなものになるという意味で、大変価値のあるものだ改めて肌で感じました。



☆スライド作りのポイント☆

- ① 写真はもちろんですが、**動画や現地の音楽**を使うと臨場感が生まれてさらに Good！
- ② 現地の人・ものが映っている写真だけではテレビ番組と同じ！ **先生と一緒に写っている写真**を随所に入れ込むことで、生徒は先生の姿をとおしてリアリティーを感じてくれる♪
- ③ 国の抱える問題等を提示するのは、その国とのエンカウンターの場合では適さない×
まずは**その国の魅力をしっかり伝えられる構成**に☆

<生徒感想>



「黒人・アフリカ＝怖い」というイメージを持っていた生徒が予想以上に多いと分かりました。しかし、国や人の魅力が伝わるよう意識したため、「アフリカのイメージが変わった」と肯定的な感想の生徒がほとんどでした。学習の入り口としては期待通り◎

(2) 「日本と世界 ～モノのつながり～」

JICAの「国際理解教育実践資料集」から、「私たちの生活とアフリカとのつながりを考える」というワークショップを行ない、生徒達は、身の回りにある多くのモノがアフリカから輸入されていることを知りました。「バラはおしゃれなイメージだからヨーロッパだと思った」「タコは日本ぐらいしか食べないイメージだから、アフリカから輸入してるって意外」など、初めての発見が多くあった様子でした。さらに、アフリカをはじめとする外国から食糧や資源が輸入されなかった場合、私達の食卓や生活がどう変わるのかについて考えました。生徒は、自分たちの生活がアフリカを含めた諸外国とのつながりによって支えられていることを学習しました。この知識を持って、次時の貿易ゲームに臨みます。

↑ 「国際理解教育実践資料集」 「どうなっている？世界と日本」より編集・作成したパワーポイント

(3) 「貿易ゲームに挑戦！」

生活班を4つの国に分け、各国の状況に応じた技術（ハサミや定規）と資源（紙）を配布し、提示された規格の紙をマーケットに売ることによって収入を得るという「貿易ゲーム」を行ないました。出来上がった紙を買い取ってくれるマーケット役（JICA 大分デスクの推進員さん）、途上国への技術援助等を行なう国際機関兼進行役（先生）を置いた上で、ゲームのルールや準備物は、開発教育協会・かながわ国際交流財団の「新・貿易ゲーム [改訂版]」を参考に挑戦しました。

ゲームの結果だけでなく、ゲーム中の生徒の言葉や行動全てが次の授業の教材となるため、詳細に記録しておきます。この授業では、固定カメラとハンディーカメラの2台を使ってゲームの様子を録画し、次時の振り返りの切り口や議論の軸を決める手助けとしました。



↑マーケットでの買い取り



↑先進国と交渉中



↑うまく紙が切れず苦戦

(4) 「貿易ゲームから見える世界～国のつながり～」

JICA 九州で行なわれた帰国後研修で、「貿易ゲームは学習の切り口であって学習そのものではない、ゲームをどう振り返るかが一番大切」というお話がありました。確かにゲームはとても盛り上がるのですが、ゲームの結果や生徒の言動から学習を深めていかなければ意味がありません。そこで、以下の点において振り返り学習を行ないました。

- ① ゲーム中の出来事・発言から何が分かるか
 - A：国内で使っていない技術（ハサミなど）があっても、他国に譲らなかった
 - B：途上国はマーケットで製品を買い取ってもらえず、自国の製品を壊してしまった
 - C：「暗殺してやる」「戦争になる」という発言があった
- ② ゲームの結果から、どんな現状と未来が見えるか（格差の広がり、国同士の関係など）
- ③ 産業廃棄物の量について（先進国ほどゴミが多かった事実）
- ④ 得られた食糧の差について（先進国での余剰と途上国での飢え）

2. 以下は、貿易ゲームの結果です。どんな現状と、どんな未来が見えますか？

	A国	B国	C国	D国
＜貿易ゲーム開始時＞				
所持金	2万5千円	5千円	2千円	2千円
格差	(12.5)倍	(2.5)倍	(1)倍	1
＜貿易ゲーム終了時＞				
所持金	17万3千円	8万2千円	3万8千円	7千円
格差	約(24)倍	約(11)倍	約(5.4)倍	1

貿易ゲームの結果（授業で使用した振り返りシートより）

※A国を先進国、B国を新興国、C国とD国を途上国としてゲームを行ないました。A国（先進国）とD国（途上国）の経済格差は、ゲーム開始時の12.5倍から終了時には24倍に広がっていることが分かります。

(5) 「JICA・青年海外協力隊って？～人のつながり～」

これまでの授業から、日本と世界を見た時の「モノのつながり」、貿易ゲームを通して見た時の「国のつながり」について生徒は学習してきました。その上で、国同士の「つながり」そのものとして活動してきた、JICA 大分デスクの推進員さん（3時限での貿易ゲームにも参加）と地元出身の青年海外協力隊 OBの方を招き、お話を伺いました。JICAの活動について知ること、そして協力隊員として世界に一步を踏み出したお二方のお話を聞くことを通してもっと世界に目を向けて

欲しい。自分が幸せならそれで良い、治安がよく先進国である日本に生まれてよかった、という考え方を脱し、自分達の手でよりよい「世界」を作っていく姿勢と気持ちを持って欲しい。そんなねらいの下、今回の学習のまとめとしました。授業後は、生徒一人ひとりの感想を冊子にまとめ、JICA 大分デスクに届けました。



成果と課題

■ 成 果

授業実践を始める直前の2014年9月、生徒にアンケートを実施しました。アンケートの結果から見えた生徒の知識レベルや興味・関心の度合いから授業を計画していきました。アンケートの中の一部の項目においては、実践の前後で以下のような変化が見られました。

Q9：生まれ変わったら、どこの国に生まれたいと思いますか。また、それはなぜですか。

	2014年9月	2015年4月
日 本	9	6
ア メ リ カ	1	3
イ タ リ ア	3	0
ヨ ー ロ ッ パ	3	1
イ ギ リ ス	0	2
先 進 国	0	1

授業実践前は、「日本」と答える生徒が過半数でした。理由としては、「安全だから」「平和だから」「今の暮らしが好きだから」といったものが多く挙げられていました。もちろん、自国を愛することは素晴らしいことです。しかし、「日本に生まれて“良かった”」の“良かった”が、「テレビなどで目にする恵まれない国に生まれなくて“良かった”」の“良かった”であれば、非常に残念です。日本に生まれたからこそ、より良い世界のためにできることがたくさんある、という広い視野と前向きな視点で世界を見て欲しい、という考えをベースに授業を進めました。

また、以下の質問においては、実践前に比べて、全体として「1. 思う、2. まあ思う」の肯定的で前向きな回答が増えていました（特に青字で示す部分）。

Q 5：あなたは外国人と話したり、外国の本・映画・テレビなどを理解したいと思いますか？

	1. 思う	2. まあ思う	3. あまり思わない	4. 思わない
2014年9月	5 (31%)	9 (56%)	2 (13%)	0
2015年4月	7 (44%)	6 (37%)	3 (19%)	0

Q 6：将来、海外に留学などで行ってみたいと思いますか。

	1. 思う	2. まあ思う	3. あまり思わない	4. 思わない
2014年9月	7 (44%)	2 (13%)	6 (37%)	1 (6%)
2015年4月	8 (50%)	5 (31%)	2 (13%)	1 (6%)

Q 7：将来、海外で働いてみたい、住んでみたいと思いますか？

	1. 思う	2. まあ思う	3. あまり思わない	4. 思わない
2014年9月	6 (37%)	0 (0%)	6 (37%)	4 (26%)
2015年4月	5 (31%)	4 (26%)	6 (37%)	1 (6%)

Q 8：将来、発展途上国などで現地の人々のために働いてみたいと思いますか？

	1. 思う	2. まあ思う	3. あまり思わない	4. 思わない
2014年9月	3 (19%)	5 (31%)	8 (50%)	0 (0%)
2015年4月	3 (19%)	10 (62%)	3 (19%)	0

もちろん、授業を受けた事だけが影響しているわけではありませんが、少なからず授業によって視野が広がったり関心を持ち始めたりという変化があった点は大きな成果だと思います。

2015年度、市が初の試みとして開催する「中津市ジュニア・グローバル・リーダー研修（2015年度7月派遣）」に、16名の生徒のうち2名が選考を通過し参加が決定しました。この2名は、Q8の「将来、発展途上国などで現地の人々のために働いてみたいと思いますか？」に「1. 思う」と答えた2人です。2人のうちの1人は、2014年9月のアンケートでは、同じ質問に「3. あまり思わない」と回答していました。授業を経て彼女の気持ちが変わり、さらに、異文化に触れ自分の視野を広げるための研修に参加する今回の「行動」に繋がったことをとても嬉しく思います。参加理由書には2人とも、2年時に受けた国際理解授業で学んだことや、青年海外協力隊OBの方のお話がきっかけになったと書いていました。現在、2人のうち1人は青年海外協力隊に参加したい、もう1人はJICA職員として将来働きたいと夢を語っています。

■ 課 題

△ 指導する自分自身にとって初めて挑戦する分野であったこともあり、実践に意図的な計画性・系統性が欠けていた点を反省しています。少々行き当たりばったりになっていた部分もあったため、実践のねらいや、そのねらいが達成された生徒の姿をもっと明確にした上で取り組むこ

とが大切だと痛感しました。

→ 今後も自分自身が学習を積み重ね、「できることを出来る限り」という気持ちで取り組みを「継続」していきます。

△ 総合的な学習の時間として、担任している2年生を対象に授業を実践していきました。しかし、中学2年生の2学期は修学旅行を始め体育大会・文化祭などの行事が立て込んでいることから、1時限の研修報告を9月に行なってから、2時限以降の授業実践は3学期からと時間があいてしまいました。また、総合的な学習の時間は年度当初から内容や配時が決まっているため、年度途中で国際理解授業を盛り込むことが難しく、6時間の実践に留まった点も反省点です。もう少し時間をかけて学習を深めて行けると良かったなと思います。また、今後は、授業以外の時間・機会もうまく利用していけたらと思っています。

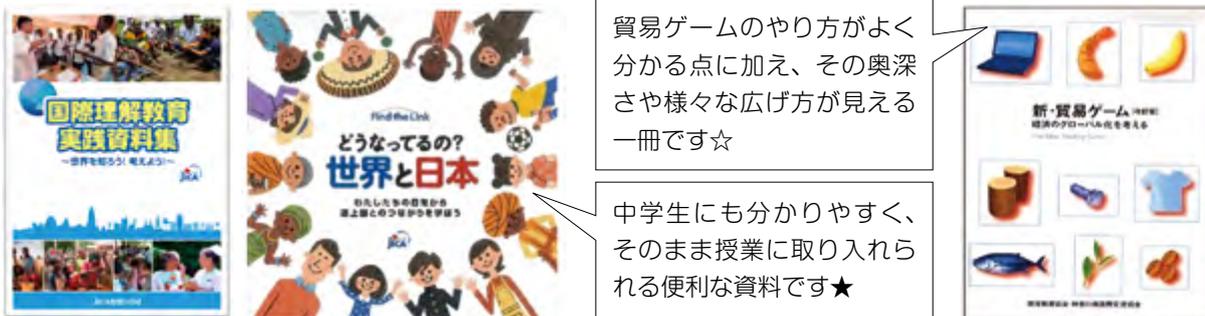
→ 3年時でも引き続き学習を進め、「行動」に繋がる実践にできればと思っています。

参考資料・教材など

< 1時限で使用したパワーポイントの一部 >



< 2、3時限で使用した資料 >



<その他の取り組み>

① 校内での掲示・展示 ～職員室前のスペース、生徒や来客が足を止めやすい場所です◎～



② 世界一大きな授業の実施 ～自分だけでなく、職員室の他の先生とも横の繋がりを◎～



③ 生徒会活動 ～ JICA の「世界の笑顔のために」プログラムに毎年参加◎～



世界のことについて知ろう

～研修を生かした取り組み～

新保 あゆみ
SHIMPO AYUMI

福岡市立大楠小学校（福岡県）

担当教科：小学校全科

●実践教科： 社会科の時間 総合的な学習の時間
道徳の時間 特別活動の時間

●時間数： 10分～45分

●対象学年： 小学校6年生

●対象人数： 25名（学年：51名）

カリキュラム

■実践の目的

- 研修で入手できた教材（写真・映像・実物の民芸品）を活用し、日本とケニアのつながりやケニアについて知り、ケニアやアフリカについて興味関心をもてるようにする。
- 身近な生活の中に日本と諸外国とのつながりがあることについて知り、自分たちの生活が諸外国によって支えられ、成り立っていることを理解させ、国際協力の必要性について考えることができるようにする。
- 世界の現状や地球的課題について知り、地球に住む一人として世界の諸問題について考え、積極的に関わっていかうとする心情を育てる。
- 日本の国際協力の現状や支援に携わっている人々について知り、様々な形の国際協力・国際支援があることについて理解できるようにする。また、そのような人々の生き方から、自分自身も国際社会と積極的に関わっていかうとする心情を育む。

■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【特別活動】 テーマ：「葉書が来たケニアってどんなところ？」 （国際理解） ねらい：ケニアの人々や文化や国の様子について知り、ケニアやアフリカ、外国について興味関心をもつ。	研修で入手した写真や映像や民芸品などを使用して、ケニアの様子について紹介する。 事前に残暑見舞いとしてケニアから届いた葉書を使って、ゲームを行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ スライド（研修で撮影した写真） ・ 研修で購入した教科書や民芸品など
【全校朝会】 テーマ：「ケニアってどんな国？」（国際理解） ねらい：ケニアの国のようすや人について知り、ケニアについて興味関心をもつ。	3つの視点（街の様子・ケニアの子ども達・ケニアの小学校）からケニアを紹介。対象が小学校1年生～6年生のため、写真での紹介の途中にクイズや動画を交えながら、ケニアのようすを紹介する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ パワーポイント（研修で撮影した写真や動画）

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<p>【道徳①】 テーマ：「世界のことについて知ろう」（国際理解） ねらい：世界の様子や世界の中で自分が置かれている立場について知り、世界の人々と関わっていこうとする心情を育てる。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 事前に実施したアンケート結果について知る。 2. 役割カードをもとにワークショップ形式で世界の現状（①世界の人口②世界の言葉③識字率④富の分配）について理解する。 3. 世界で起きている問題について知る。（水問題、教育問題、エボラ出血熱） 4. 本活動を振り返り、活動についての感想や自分の考えを述べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら』、開発教育協会（DEAR） ・「世界がもし100人の村だったら」『6年みんなのどうとく』（学研）
<p>【社会①】 テーマ：「世界の中の日本について知ろう」（国際理解、国際協力） ねらい：日本と世界とのつながりについて知り、国際社会の中での日本の立場や国際協力の必要性について考える。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 食物における日本の諸外国との貿易の現状や日本の食料自給率について知る。 2. 日本と関わりのある国の現状について知る。 3. 世界における地球的課題について調べ、理解する。 4. 日本が行う国際支援の様々な方法について調べ、理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント（以下のJICA発行の資料の一部と研修で撮影した写真や映像） ・「小学社会6年下」（日本文教出版） ・「どうなってるの？世界と日本」JICA ・ほくら地中調査隊「世界の食料」JICA地球ひろば
<p>【社会②】 【総合的な学習の時間】 テーマ：「国際協力って何？ - 元青年海外協力隊員に話を聞こう -」（国際協力） ねらい： ① 青年海外協力隊の活動内容について理解する。 ② 元青年海外協力隊の体験談を聞き、将来の自己の生き方について考える。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. ゲストティーチャーから派遣先のキルギスのことや青年海外協力隊員の活動についての話を聞く。 2. 質疑応答 3. 感想 4. お礼の言葉 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲストティーチャー 佐々木舞さん： 元青年海外協力隊（キルギス村落開発）

2. ケニアってどんな国？【全校朝会】

全校朝会場で、パワーポイントを使用してケニアの紹介を行った。写真だけでなく、日本からケニアまで飛行機の所要時間や国旗をクイズ形式で紹介したり、ケニアの小学生が踊る動画を取り入れたりすることで、話を興味深く聞いている姿が見られた。また、スワヒリ語の「Jambo（こんにちは）」という挨拶を紹介したことで、その後、校内ですれ違う時にスワヒリ語で挨拶することを楽しむ児童が低学年を中心に多くいた。



3. 「世界のことについて知ろう」【道徳①】

参加型の学習であり、結果も視覚的に分かりやすくなっているため、どの児童も楽しみながら学習を進めることができた。

学習では、活動のはじめに予想を立て、実際に役割カードに沿って仲間分けをしていった。そのため、その予想との違いに驚く場面もあり、特に、世界の中で中国語を話す人口が多いことは児童にとってとても驚くことだった。



世界の人口に関する活動では、大陸別に分かれた時にアジア圏に所属した児童が所定の紐の中に入りきらず、紐がちぎれてしまった。このことから、人口爆発の問題や人口が多いこと生じる様々な問題について深く考え、理解させることができた。また、識字率の活動では、3種類の中から葉を選ぶことによりかなり迷う姿や実際に分からない物を口にする事への抵抗を見せる姿が見られた。実際に選んだものが毒（塩水）であったため、「字が読めない」ことが命に関わる問題ということを実感している児童もいた。さらに、世界で起きている諸問題について知る段階では、研修で訪問したケニアでのヴィクトリア湖の水を汲んで生活をしている人たちの存在や様々な事情で十分な教育が受けられない子どもがいることを紹介した。

学習の感想からは、世界の現状について知ったことで、さらに世界について興味関心を持ったものや世界中には様々な人や国が存在し、ちがいをちがいとして受け入れることの大切さを実感したものがあつた。また、世界の諸問題の現状から、自分も世界のことに関わっていきたいと考えるものもあつた。この活動を行うことで、世界についての興味関心を持たせることで、社会科の今後の学習への意欲づけになった。



(児童の感想)

人間は一人一人違っていて、暮らし方も、顔も、身長も、全て、
 いる人な世界の中にまたいる人な人々がいる。元氣
 な子もいれば、病気を持った人もいる。そのことを改めて
 実感して、認め合い、協力することが大切なんだ
 と分かりました。まさかの毒を当ててしまうという…汗
 でもこれが本当のことだ。たら、みんな死んでしまっ
 ている人ですよね。文字が読めない、そんな小さなこ
 ども、人の命に関わっていること、でもそれを、否定し
 りしてはダメだということ。
 様々な大切なことを知り、改めて理解することが
 できました。

今日の学習で「知ったことは・・・」
 アジアが一番人口が多く、人口密度は、ぜんたい的に
 アジアが一番多い。世界で一番話されているのは、中国語
 として、この世界では、えいよう不足や、もう少して死ぬか
 いそうなんている。しかし私はやうやうことかかない。たか
 らこのお話を聞いて、やせなんだなと思えました。
 まわりにはいる人たちは、みんな個性がさがる。それ
 を理解しなから、生きやうかなければならぬ。
 今、世界では、薬ののめなかつたり、水を遠くまで
 とりに行かなければいけない所がある。私はここに
 いる人たちの力になれるようなことをしたいと思っ

今日の5、6時間目の学習を受けて世界には、色々な人
 がいて、いかに自分が恵まれているのかも実感さ
 せられました。
 今日のとの話で
 「10人ほどは栄養が足りず、1人毎分にも死にぞや
 水をとるために5km歩かなければいけない」というこ
 じとでもおどろきました。今生活して、お腹はすけど
 ちゃんと食べられてきて、や死にぞとはほどと
 こ、ジャロをわかんでくる水もでこない人なこ
 とありえないと思えました。でも実際にそのような人が
 いる中で、ほとんどの生活は正しいのか、少しは協力できな
 いかを
 見つめなおしたいと思

今日の学習で、実際に役割カードを使って
 村が5人た。たらと、いうことやしてみて
 いるんな割合が分かりました。たといは、
 アジアに住む人が一番多いとか、中国語
 をしゃべる人が一番多いとかで「あ、と」
 るいたのは、字が読めない人が、3分の
 1くらいいたことと、字が読めない、と、
 新聞がよめなくて、国のうごきか分から
 ないし、生活の中でいろいろこまると思
 います。世界には、たくさんの方がいますか、
 死にぞうな人、栄養不足の人、太りすぎの人、し
 あわせな人と、今、いるんな人が、い
 うこととあらためてかんじました。世界のこと
 を知ることは、とても大切なことだと思

4. 「世界の中の日本について知ろう」【社会①】

世界の諸問題を自分とのかかわりの深い問題として捉える
 ことができるように、児童にとって身近な「食料」を例にし
 て学習を行った。

学習では、日本の自給率問題や食料品の輸入の現状を知る
 ことで、私たちの食生活が外国の人々によって支えられてい
 ることや日本の食生活を支えている諸外国で何か問題があれ
 ば、その問題が自分たちにも影響してくることから、相手の
 問題としてではなく、自分の問題として考える必要性について考えさせながら学習を進めていっ
 た。

世界で起こっている問題やその問題を解決するために世界でどのような取り組みを行っている
 のかについて調べる活動では、JICA九州よりいただいた資料や教科書を活用して調べることで、
 国際協力には、「国レベル」「集団レベル」「人レベル」の協力があることに気づくことができた。
 さらに、調べたことをまとめる段階では、ケニア研修で出会った人々や支援について写真を使っ
 て紹介することで、様々な国際協力の現状を具体的な事例としてとらえることができた。



(パワーポイントの一部)

<p>その前に…</p> <p>どうして、世界のことを知らないといけないの？</p>	<p>たとえば、みんなの食べ物で考えてみよう</p> <p>日本の食料自給率って何%でしょう？</p>	<p>答えは…約40%</p> 	<p>いろいろな食品の自給率(2009年度)</p> 
<p>もしも、輸入がストップしたら…</p> <p>朝食</p>  <p>ごはん 焼きいも 2本 めかづけ1皿 茶わん1杯 (さつまいも225g分) (野菜90g分)</p>	<p>食料の多くを輸入に頼っている日本にとって、輸入する相手の国は、大切なパートナー</p> <p>輸入する相手の国の人たちが、皆の食料を支えている！</p>	<p>もしも、相手の国で問題が起きていたら…</p> 	<p>日本は、どうなるだろう…</p>

5. 「国際協力って何？ -元青年海外協力隊員に話を聞こう-」【社会②】【総合的な学習の時間】

社会科の学習の時間に「国レベル」「団体レベル」「人レベル」での国際協力を行っている現状について学んだ後、本時を設定し、学年合同で学習を行った。

今回ゲストティーチャーで招いた佐々木舞さんが、担任の大学時代の知人で、佐々木さんについてこれまで色々な話を聞いていたことや佐々木さんが出演していたテレビ番組を見ていた児童がいたこともあり、佐々木さんが来る前から話を聞くことを楽しみにしていた。

キルギスの風景や活動の様子が分かる写真を見せてもらったり、実際に活動していた時に作っていた石鹸を手にとらせてもらったりすることで、キルギスの文化や人に興味関心をもつことができた。さらに、青年海外協力隊の具体的な活動について理解し、自分たちができる身近な支援について考えることができた。



(児童の感想)

お仕事について (初めて知ったことや意外と思ったことなど)
 意外と思ったことは、青年海外協力隊には
 たいしてなれるということ。青年海外協力
 隊になるには、資格を持って、まず、試験を
 して合格した人しか入れないし、ない
 かなと思っていたので、たいしてなれると知
 ると、おどろきました。
 貴重なお話を聞いて、ありがとうございました。
 夢

お仕事について (初めて知ったことや意外と思ったことなど)
 お仕事のお話を聞いて、初めて知ったこ
 とがあります。それは、私たちにと
 り、当たり前のことでも、キルギスの人た
 りにとっては、知らないことがたくさんあ
 るということ。でも、逆に、私たちが
 知らないことを、キルギス
 の人たちが、知っていて、教え
 てもらえるのも、いいことだなと
 思いました。
 夢

お仕事について (初めて知ったことや意外と思ったことなど)
 石けんをさわった時、とてもいいにおいがして、あま
 り日本の石けんと変わらないなと思いました。また、
 キルギスの方は、整理をする文化がなかなかり、
 パンフレットもめずらしいということを知り、とて
 も驚きました。私も、将来はくのような活動をし
 たいと思っているので、とてもいい
 経験になりました。ありがとうございました。
 夢

お仕事について (初めて知ったことや意外と思ったことなど)
 青年海外協力隊になるためには、英語をがんば
 り、勉強する必要があります。大学生で、スウェーデンに
 留学していて、それがきっかけになり、青年海外協
 力隊になった間、私も外国に行き、世界の
 ことについて知り、世界で困っている人を見かけ
 たいと思いました。
 夢

6. 「世界で活躍する日本人」【道徳②】

これまでに社会科や総合的な学習の時間において、世界について様々な視点から学んできたことで、世界に対する思いを一人ひとりがもっている。そのため、国連難民高等弁務官として活躍していた緒方貞子さんに関する資料は、児童にとって興味深い資料だった。

授業の導入で、緒方さんの写真を見せて4択クイズを行ったところ、1. ボランティア (5人)、2. 役人 (2人)、3. 医者 (18人)、4. 冒険家 (1人) という結果であり、殆どの児童が緒方さんの存在について知らなかった。実際に資料を読んでいくことで、緒方さんの国連難民高等弁務官としての活動していたことや難民を救助するにあたっての緒方さんの考えについて理解することができた。この資料を通して、緒方さんの生き方に共感したり、緒方さんのように自分自身も世界の人たちのために何か行動していきたいという思いをもったりすることができた。

(児童の感想)

今日の学習で、緒方さんはけっこうしんどいのに、防犯チームまでして活動もして、ぼくは緒方さんには不公平はないなという信念があたからこぼれたことだと思いました。
 そうして活動もしている緒方さんをぼくはとてもすごいと思います。
 ぼくもそんな緒方さんのように信念を持ちたいと思いました。
 今日の学習で本当に緒方さんの信念の強さを見ておんなじに対する優いばかり分かってよかったです。

緒方貞子さんは、難民と認められていない人もたすけようと言ったのはすごいと思いました。現地にも自ら行って、現地を見て、聞いて、たすけていこうのはすごいと思いました。
 ときには大変なこともある。殺されそうになったり、実際に近くにいって人たちが殺されてしまったことあるそうです。そんなことばかりでも、救助活動をやめなかつたのは素晴らしいことだと思います。日本はもちろん、海外からも多くの人にしづめていっているのは、当然だなと思いました。

今日の学習で、すごいなと思ったことがあります。それは、緒方さんが、危険な地域でも、難民のために力を尽くしたことだと思います。緒方さんの、難民もみんな関係ないという意見はすばらしいと思います。
 そして、世界には、危険な場所に残されている人がいることも知りました。その人たちを救助している機関があるということも知りました。私にも必ずできることがあるとおもったので、世界のましんでいこう人のために力を尽くしたいです。

緒方貞子さんの話を聞いて、思ったことは自分の身を危険にさらしながらも、難民でないワルド人を助けた事です。
 ぼくはたと自分の命より他人の命が危険な所に行かない川と、緒方さんは人の命を優先して助けた事かすごいと思われ、危険なことをおそれない事がおもしろい。
 最後に、ぼくも緒方さんのように人の役に立つ人間になりたい。

8. その他の取り組み



教室でケニアの写真を研修中のエピソードと一緒に掲示。内容は毎週更新。



全校朝会では紹介できなかった写真を集め、学校の掲示板上で紹介。



学級通信にケニアを紹介するコラムを設け、保護者に向けて情報発信。

成果と課題

今回の学習の事前と事後でアンケートを取り、以下のような項目で変化が見られた。

Q2 外国に興味がありますか。

	あ る	な い
2014年 12月	19人 (76%)	22人 (88%)
2015年 3月	6人 (24%)	3人 (12%)

Q4 世界の抱える問題には、どのような問題があるか知っているか。

	知っている	知らない
2014年 12月	10人 (24%)	15人 (12%)
2015年 3月	21人 (76%)	4人 (88%)

Q5 将来、仕事や勉強、スポーツなどで、世界に出て挑戦してみたいですか。

	出してみたい	出たくない
2014年 12月	10人 (24%)	15人 (12%)
2015年 3月	18人 (76%)	7人 (88%)

「Q2」の結果から、本学級では外国に対して興味をもつ児童が多かったことが分かる。しかし、「興味がない」と答えた児童も事前アンケートでは24%いた。「興味がない」理由としては、「外国について知らなくていいと思うから」「外国は怖いから」などが挙げられていた。しかし、「興味がない」と回答していた児童の中には、事後アンケートで「日本と違うところがあるから外国に興味がある」と回答もみられ、「外国に興味がある」と答えた児童はわずかながら増加した。

さらに、事前アンケートで外国に興味をもっていた児童の理由にも変化が見られた。事前のアンケートでは、「本場の〇〇を見てみたい」「テレビで見て行きたくなくなったから」「世界中を旅してみたいから」という理由を挙げていたが、事後のアンケートでは、「異文化を体験してみたいから」「食べてみたいものがあるから」「新発見があるから」など、学習してきた内容を踏まえて、外国のことをさらに深く理解したいと思う理由を挙げる記述が見られた。

以上のことから、今回の取り組みだけが外国に興味をもつ理由になったとは考えにくいものの、今回の取り組みが外国に興味をもつ一助を担っていたと考えられる。学習を通して、様々な視点から世界について知ることで、世界を見る視野が広がり、もともと外国に興味があった児童は、さらに興味関心が深まり、興味がなかった児童も外国に興味をもつようになったということがアンケート結果より考えられる。

「Q4」の結果から、学習を通して、世界の問題について知ることで、世界の問題について関心をもつ児童が多くなった。実際に、学級での話題も世界情勢（エボラ出血熱・ウクライナ問題・IS問題など）について話す機会が増えた。ニュースで伝えられる内容が、暗い内容が多いことが残

念である。そのために、「Q5」において、「外国が怖いから日本がいい」と答える児童も少なくなかった。しかし、それでも世界に出てみたいと思う児童の割合が高く、自分の好きなスポーツの分野で活躍したいと思う児童が6人→7人、海外で働きたいと思う児童が5人→7人、海外へ勉強しに行きたいと思う児童が4人→13人という結果が見られた。

今回の取り組みは、学級担任制という小学校の長所を生かし、様々な教科や領域において国際理解や国際協力の視点を取り入れた柔軟な指導を行うことができた。また、学年合同学習という学習形態を工夫したり、全校朝会や学校掲示板を利用したり、学級通信を利用したりすることで、今回のケニア研修について様々な人を対象にして情報発信することができた。

しかし、年間の学習計画や授業時数の制約から学習指導については、必ずしも効果的に国際理解や国際協力の視点を取り入れた指導ができるとは限らず、制約の中でどのように取り組むか悩んだ部分もあった。さらに、学年によっても教科や学習内容が大きく異なるため、取り組むことができる内容にも大きな違いが生じてくるというところに課題が見られる。

今後は、学年や発達段階に合わせた効果的な取り組みが何なのかを模索しながら、担当した学年に合わせた無理のない取り組みを行っていく必要がある。そして、今回の活動が一過性のものにならないようにするためにも、国際理解教育や開発教育に関わるセミナーや情報を積極的に活用していくことで、自分自身の指導技術も向上させていく必要があると考える。

参考資料・教材など

- ・『国際理解教育実践資料集 ～世界を知ろう！考えよう！～』JICA 地球ひろば
- ・「学校に行きたい」、JICA
- ・「どうなっている？世界と日本」、JICA
- ・『ぼくら地球調査隊「世界の食料」』、JICA 地球ひろば
- ・『小学校社会6年下』、日本文教出版
- ・『6年生の道徳』、文溪堂
- ・『6年みんなのどうとく』、学研
- ・「日本人の気概 総合的な学習 高学年 緒方貞子 難民のいない世界を目指して 実践記録6年」
<http://homepage2.nifty.com/midorin-tutu92/syakai-ogatasadako.html>
- ・『ワークショップ版世界がもし100人の村だったら』、開発教育協会（DEAR）
- ・「にっぽん食べ物事情」（農林水産省発行パンフレット）

総合的な学習の時間における国際理解教育

西村清美

NISHIMURA KIYOMI

都城市立五十市中学校（宮崎県）

担当教科：英語科

●実践教科：総合的な学習の時間、道徳

●時間数：14時間

●対象学年：1年生

●対象人数：132名

カリキュラム

■実践の目的

- ケニアの概要を知ることから、異文化に対して興味・関心をもち、世界に目を向ける。
- 世界には、様々な厳しい状況の中でも一生懸命生きている子供がいることを知り、自分たちのこれから生き方を考え直したり、見直したりする。
- 世界の様々な問題を知り、主体的に学び考えていくことで、問題を自分の身近に関わる事として捉え、世界の中の一人として、何かできることはないか考えたり、自分の生き方について考えたりする。

■授業の構成

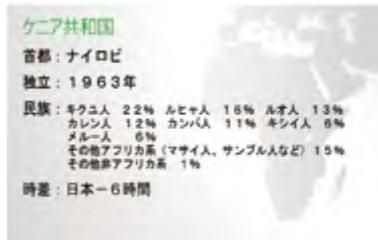
時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【1時限】総合的な学習の時間 テーマ：世界に目を向けよう （ケニア編） ねらい：世界の中の一つの国、ケニアを知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地図からケニアの位置を確認。 ・ ケニアのイメージを発表。 ・ ケニアクイズ。 ・ フォトランゲージ、ビデオランゲージで気づいたことを発表。 <ol style="list-style-type: none"> ① ケニアと日本の学校の比較。 ② ケニアと日本の子供たちの比較。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ プレゼンテーション
【2時限】道徳 テーマ：世界の中の日本人 ねらい：国際的な視野に立って、世界を見つめ、平和と幸せに貢献する心を育てる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 池間哲郎さんの「あたりまえではなく、ありがたいこと」を読み次の3つの発問について考える。 <ol style="list-style-type: none"> ① 「あなたになりたい」「日本人になりたい」という言葉を聞いて、どんなことを考えますか。 ② 貧しくとも苦しくとも、決して笑顔を失わないのはどうしてだろう。 ③ 私たちの生活にある「あたりまえ」ではなく「ありがたい」ことをどう感じますか。 	

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
<p>【3時限】総合的な学習の時間 テーマ：世界がもし100人の村だったら ねらい：世界の現状をシュミレーションという参加型の方法で体験することを通して、世界の現状について理解を深めるとともに、日本人として果たす役割について考えるきっかけをつくる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ アイスブレイク（部屋の四隅） ・ 世界を127人の一つの村と考え、役割カードに従って動き、その立場になった時の気持ちを発表。 <ol style="list-style-type: none"> ① 世界の人口 ② 女性と男性どっちが多い？ ③ 大陸ごとに分かれる ④ 世界の言葉で「こんにちは」 ⑤ 文字が読めないということ ⑥ 世界の富は誰が持っているの？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ゲストティーチャー（JICA デスク宮崎北園さん） ・ 役割カード ・ 世界地図用の紐 ・ プロジェクター ・ パソコン ・ 振り返りシート
<p>【4時限】総合的な学習の時間 テーマ：JICA・青年海外協力隊の活動について知ろう ねらい：JICA や青年海外協力隊の活動について知ることによって、世界の中の一人として、何かできることがないか考えさせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ JICA の活動についての説明を聞く。 ・ タンザニアでの青年海外協力隊の活動の体験談を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ゲストティーチャー（JICA デスク宮崎北園さん） ・ プロジェクター ・ パソコン
<p>【5～14時限】総合的な学習の時間 テーマ：「国際理解」のテーマのもとグループに分かれて活動する。 ねらい：調べ学習や表現活動を通して、国際理解を深める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師側が示す5つの活動から自分を取り組みたい活動を選択し、活動する。 <ol style="list-style-type: none"> ① 壁新聞班 ② 調べ学習班 ③ アート班 ④ ステージ発表班 ⑤ 世界の笑顔のために班 	<ul style="list-style-type: none"> ・ JICA パンフレット ・ WFP の活動 DVD ・ ケニアの写真
<p>【日常活動】 テーマ：「1分間で世界旅行」 ねらい：異文化に興味・関心を持たせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 異文化に興味・関心を持たせるための工夫として、帰りの会で「1分間で世界旅行」と題しスピーチをする。 	サイコロ 地図

授業の詳細

【1時限】

- 「国際理解」をテーマに文化祭に向けて取り組むことが決定していたので、まずは生徒に世界に目を向けさせるきっかけとして、ケニアでの写真やビデオなどをもとにプレゼンテーションを作成し、ケニアについて紹介した。



【プレゼンテーション資料】

(生徒の感想)

- ・ ジャンボ！ 今日のケニアの話はとても面白かったです。ケニアの人々の生活にとっても興味が湧いてきました。家に帰ってから早速ケニアの国旗の意味についても調べてみました。アフリカは日本から遠い国というイメージがありましたが、一気に近く感じました。アフリカの他の国についても調べて見ようと思いました。今日はアサンテサーナ。
- ・ ケニアについての話を聞いてから、世界の国々を紹介する番組が気になるようになりました。今日は夜、「世界一受けたい授業」を見ていたら、世界の登校風景が放送されていました。その中に片道 22km の通学をしている子供たちの様子が放送されていました。とても危険な道を超えてまで学校に行きたいと思うのはやっぱり夢があるからなんだということを知りました。私たちは普通に学校に通えています。本当に恵まれた環境の中で生きていることをとてもありがたく感じました。



【授業の様子】

【2時限】

- 道徳の副読本に掲載されている、NPO アジアチャイルドサポート代表理事の池間哲郎さんの「あたりまえではなく」「ありがたいこと」という資料を読んで、次の3つの質問について考えさせた。①「あなたになりたい」「日本人になりたい」という言葉を聞いて、どんなことを考えますか。②貧しくとも苦しくとも、決して笑顔を失わないのはどうしてだろう。③私たちの生

活にある「あたりまえ」ではなく「ありがたい」ことをどう感じますか。導入では、資料に出てくる「私の夢は大人になるまで生きること」の言葉から感じることを発表させ、世界には貧しさのために2秒に一人が亡くなっていることを伝えた。

(生徒の感想)

- ・ 2秒に一人がなくなっていることはショックだった。今、自分たちが生活している間にも亡くなっている人たちがいる。わかってはいたことではあるが、この資料を読んで改めて感じたり、思ったりすることがあった。世界には貧しさで亡くなっている人がいることを忘れず、世界のことを考えて生活していきたい。「あたりまえではなく」「ありがたいこと」だということ。そして僕には何が出来るかを考えていきたい。

【3・4 時限】

- 「国際理解」をテーマに文化祭に向けて活動を深めていくための手がかりとして、JICA デスク宮崎の北園さんに来校していただいた。「世界がもし100人の村だったら」のワークショップを通して、世界には多様な言語や文化をもつ人々が様々な環境の中で生活していること、そしてそこには様々な問題があることを体験的に学び、世界の現状について理解を深めることができた。さらに文化祭の活動へとつなぐことができた。

ワークショップの後は、北園さんから JICA の活動についての説明、また北園さん自身の青年海外協力隊での体験を話していただいた。



【ワークショップの様子】

(生徒の感想)

1 今日活動に積極的に参加できましたか。	4	3	2	1
2 今日活動は楽しかったですか。	4	3	2	1

今日の感想を自由に記入してください。

自分が文字が読めなくて、とくを弄って(ほう)ところでは、私は文字が読めなくて、とくもさかしく、不安になりました。1つの世界でこんなに不平等なのはまたと思いき私ほもと 国同士の助け合いを力に成ってほしいと思いました。いつか、私も発展途国に行きたいです。

1 今日活動に積極的に参加できましたか。	4	3	2	1
2 今日活動は楽しかったですか。	4	3	2	1

今日の感想を自由に記入してください。

タンザニアや、jicaという言葉を知りし事はあ、たけど、何のことなのか全く知りませんでした。今日の授業で、くわしく知ることができて、ちと、も、と興味がおいてきました。自分で教になったことや疑問点などをさらにくわしく調べて世界のために「なに」も役立つことをしようと思いました。

【5～14 時限】

- 1～4 時限の授業を経て、文化祭に向けて学習を展開していくこととした。まず、グループ分けを行った。どのようなグループに分けるかは教師の専門性、生徒の興味・関心、これまでの学習がいかされることを学年の職員で検討しながら、学習活動希望アンケートをとり、以下の5つのグループに分けた。

1 壁新聞制作班	2 ステージ劇発表班	3 アート制作班
4 調べ学習班	5 「世界の笑顔のために」班	

これまでの学習での気づきや学び、さらに調べたいことなどをそれぞれの班で形にしていった。以下は私が担当した「調べ学習班」での取組である。

(1) 調べ学習班での学習活動の取組

グループ分けの希望調査で、調べ学習班の主な活動内容を次のように生徒に示した。

色々な組織による国際協力、世界と日本とのつながり、世界で活躍する日本人、都城での国際推進についてなど自分たちで課題を設定し、調べたことや取材したことを模造紙にまとめて文化祭で発表する。

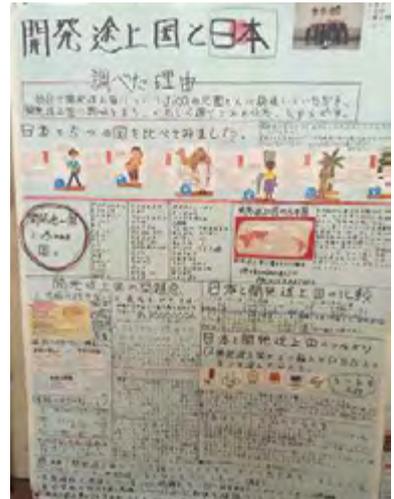
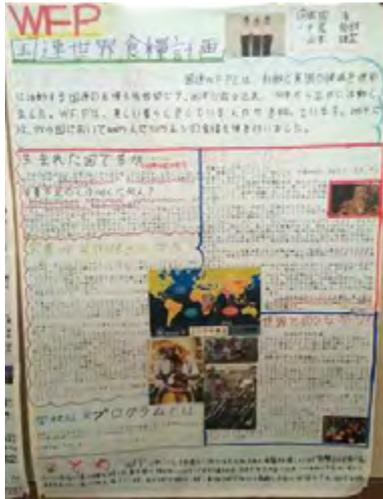
この活動内容に興味を示した20名の生徒をさらに5名ずつの4グループに分け、グループで話合って課題を設定させ、調べ学習や取材を行わせまとめさせることとした。課題を設定させるにあたっては、世界に存在している課題について、その問題のポイントや子供たちに知ってほしい内容をわかりやすくまとめた生徒向けの資料を JICA から提供していただいた。また WFP から活動の様子をまとめた DVD を送っていただき、視聴するなど、活動がより深まるよう手立ての工夫を行った。

それぞれのグループが設定した課題は次の通りであった。

1 班 WFP について	2 班 国際交流について～ ALT への取材を通して～
3 班 日本と世界とのつながりについて	4 班 青年海外協力隊の活動について

課題設定後、これまでの学習で得た知識や資料を活用し、もっと知りたいことや疑問点またそれをどのような手段をもって調べ、まとめていくかをグループで話し合わせた。

青年海外協力隊の活動について調べた班では、JICA の資料を活用したり、インターネットで調べたりする中で、実際に現地で協力隊として活動している方に、取材したいということになった。そこで、私が教師海外研修でケニアで出会った協力隊の方に協力依頼をし、生徒と現地の協力隊の方と電子メールでやりとりを行わせた。メールでのやりとりを通して、世界には自分が考えもしなかった問題があり、その解決に向けて尽力している人々がいることを知り、自分にはできないことはないかを考えたようであった。まとめる段階では、それぞれが調べた内容を持ち寄り、グループで共有しながら学びを深めていった。



【文化祭で発表した各班の調べ学習の内容】



【ステージ劇発表班】

「国際理解」をテーマに学習してきたことを劇で発表。世界も様々な問題について全校生徒に伝え、私たちにできることを問題提起した。



【世界の笑顔のために班】

様々な国際協力団体について調べ、自分たちにできることを考えた。事前に全校生徒に募金や物資の提供のチラシを配り、文化祭当日も呼びかけた。



【壁新聞班】

インターネットやJICAのパンフレット、書籍などから自分たちで調べた内容を掲載し、壁新聞を制作。

(生徒の感想)

- ・ 取組前も国際理解について少し興味はありましたが、取組後は「世界」という単語に敏感になりました。そして世界をテーマにしたTV番組をよく見るようになり、これまでと比べると外国の見方が変わりました。また、将来は人を助ける仕事がしたいと思うようになりました。
- ・ 学習を通して、インターネットで調べたり、世界についてのTV番組をみるようになり、人々は今どんな暮らしをして生活しているのかすごく興味をもつようになりました。その国に環境問題があると、私たちにできることはないかと考えるようになりました。
- ・ 実際に調べたり、現地にいる人とやりとりをしたりすると、自分が全く知らないその国の色々なことを知ることができました。世界にはまだ進んでいない国がたくさんあること、色々な問題を抱えている国があることを知り、日本という国がどれだけ恵まれているか改めてわかりました。世界で活躍している人たちはかっこいいなあと思いました。私は活動を通して、人のためになること、人を助けることを将来したいと思いました。



【文化祭での展示の様子】

【日常活動】

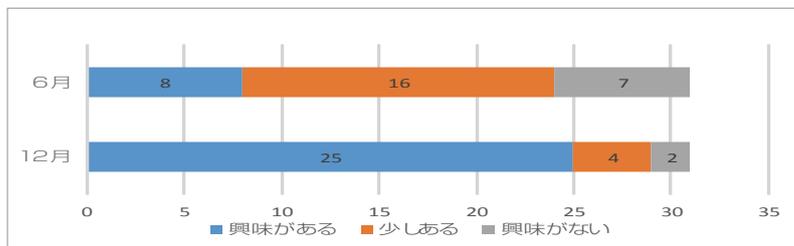
- 異文化に興味・関心を持たせるための工夫として、帰りの会で「1分間で世界旅行」と題し1分間スピーチ（サイコロトーク）を行わせた。サイコロの目に設定するテーマを世界の6大陸として、出た目の大陸にある国を選択し、その国についてスピーチをすることとした。スピーチが調べた内容だけにならないようその国を旅行してきたつもりで原稿を書かせた。生徒は、調べた知識と想像を織り交ぜながら、興味・関心を持って意欲的に取り組んでいた。友達の発表を聞き、回を重ねることで、その国が抱える問題なども織り込まれ、内容にも深まりが見られるようになった。



成果と課題

■ 成 果

- 以下は6月と12月にとった「国際理解」についてのアンケート結果の一部である。
アンケート項目：外国に興味がありますか。



学習前と後を比較すると「興味がある」と答えた生徒が17名も増加している。国際理解＝外国ではないが、生きた教材を使いさらにそこに工夫をすることで、異文化に興味・関心を持たせることができた。

- 「どんなことに興味がありますか。」という問いには次のような回答が見られた。

・日本と外国との共通点や違い・風習や歴史・教育・環境問題など

実践を通して、学習前より生徒の興味のある事柄に深まりが見られ、世界の国々や異文化についてもっと知りたいという気持ちや、世界の様々な問題を知り、考えていくことで、問題を自分の身近な事として捉え、自己の生き方について考えようとする生徒が見られた。

- JICAの「国際理解出前講座」を活用させていただき、参加型学習を通して、生徒は体験的に世界の様々な問題に気づき、学びを深めることができた。

■ 課 題

- 国際理解教育が単発なものにならないよう教育活動全体の中で、計画的・継続的に実践していきたい。
- 国際理解教育が知識理解にとどまることなく、今後も体験的な学習や課題学習を積極的に取り入れていきたい。



【文化祭終了後、第1学年全員でSTAND UP】

参考資料・教材など

- JICA 各種パンフレット
- WFP パンフレット、DVD
- プロフェッショナル仕事の流儀（国連 WFP アジア地域局長 忍足謙朗氏）
- 世界のナゼ？ そこに日本人（松下照美さん）

貿易ゲーム

森 拓也

MORI TAKUYA

宮崎県立宮崎北高等学校（宮崎県）

担当教科：地歴公民科

●実践教科：HRの時間

●時間数：2時間

●対象学年：1年生

●対象人数：41名

カリキュラム

■実践の目的

- 貿易ゲームを通して、先進国と発展途上国の関係について考えさせる。
- どのような援助をすべきか、またはどのような援助をしてほしいかを考えさせる。
- 相手の立場に立って必要な支援とできる支援を合致させることが大事であるということに気付かせる。

■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【1時限】 テーマ：貿易ゲーム ねらい：先進国と発展途上国の関係について考えさせる。	「貿易」によって、国家間の格差が広がる仕組みについて疑似体験を通じて理解させる。（詳細は後に記載）	はさみ、定規、三角定規、分度器、コンパス、鉛筆、更紙、お金
【2時限】 テーマ：貿易ゲームの振り返り ねらい：国際協力の大切さと支援の在り方について考える	貿易ゲームをして感じたことや考えたことをグループ学習で意見を出し合いながら、振り返る。（詳細は後に記載）	貿易ゲーム振り返り用紙

授業の詳細

① 貿易ゲームタイムテーブル

時 間	活 動 内 容
0～10	グループ作り ルール説明
11～40	ゲームの開始 価格の暴落（製品の製造状況を見て） 技術援助 新資源の発見
40～45	終 了 結果発表

② 役割分担

6～7人のグループを6つ作る。（先進国2つ、途上国2つ、後進国2つ）
ゲームの進行・国連役1人。世界銀行3人。

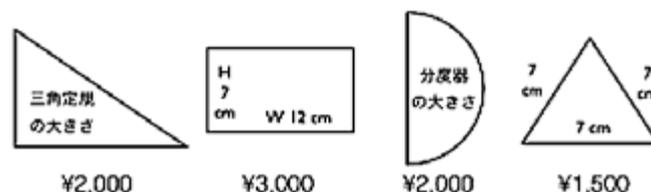
③ ゲームの説明

各グループの目的は、渡されたものを使って、自分たちのためにできるだけ多くのお金を稼ぐことです。他のものを使うことはできません。お金は、紙を切って製品を作ることによって得られます。製品の型は、一覧表に示されています。それぞれの型には、それぞれの価格が決まっています。製品ができたらそれを世界銀行に渡し、確認した上で、お金をもらいます。お金は資源（紙）や道具を買うために使ってもかまいません。製品は好きなだけいくつでも作ることができます。たくさん作ればお金持ちになります。

- ※ このゲームでの価値観は「世の中銭だ」ということを言うとおもしろい。
- ※ 図形一覧とルールは大きな紙でみんなにわかるように掲示しておく。
- ※ 各グループが違った組み合わせの道具を与えられていることは参加者には教えない。
- ※ 市場の変動。製品の価格を変動させる。たくさん作られている製品の価格を下げる。
- ※ 途上国への技術援助。必要な道具を入手できないグループに「五分だけ」という条件で、はさみと定規を貸し出す。
- ※ 新資源の発見。ゲーム終盤で後進国に数枚の色紙を渡し、その紙で作った製品は倍で買い取ることを宣言する。

④ 準備するもの

- ・ 紙幣をたくさん（1000円と500円）
- ・ 図形一覧



- ・ ゲームのルールを書いた紙

<ul style="list-style-type: none"> ● 製品はすべて、はさみを使って縁をきれいに型どおりに切り取り、一覧表に示されているとおりの大きさになっていなければならない。 ● 商品を作るときは、与えられた道具しか使ってはいけません。 ● 他国との交渉や協力は自由。ただし、暴力は許されません。 ● ゲーム中は国連の言うことが絶対であり、必ず従わなければならない。国連が、いかなる争いごととも仲裁します。
--

- ・ 国連用の資源セット 模範の紙型
- ・ 資源セット

	先進国		途上国		後進国	
	日本	アメリカ	インドネシア	ベトナム	ケニア	ガーナ
はさみ	3	3	0	0	0	0
定規	2	2	1	1	0	0
三角定規	1	1	0	0	0	0
分度器	0	0	1	1	0	0
コンパス	1	1	0	0	0	0
えんぴつ	1	1	0	0	1	1
ざら紙	1	1	15	15	3	3
お金	¥5,000	¥5,000	¥3,000	¥3,000	¥1,000	¥1,000

- ・ 技術援助用のはさみ2と定規2
- ・ 新資源発見用の紙（色の違う上質紙）4枚

⑤ 貿易ゲームをしてみよう

質問	ポイント	実際の動き
① 1位のグループAと最下位のグループFに「その時の気持ち」を発表してもらう		A 218,500円 B 78,000円 C 53,000円 D 102,500円 ※分度器で稼ぎ成功 E 21,000円 F 10,000円 （黒板に最終的な金額を書くと振り返り易いでしょうが、最初にいくら入っていたのかも分かると良いと思います）
② なぜ①のような状況が起こったのか？	<ul style="list-style-type: none"> ・ そもそも、封筒の中には最初から違った道具が入っていた（中身を聞いて見るのも良い） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ F：フォークを持ちながら「俺らこんなばっかりやー」、フォークを使って他グループを脅す

質 問	ポイント	実際の動き
	<ul style="list-style-type: none"> ・ A、B は終始優位に立ってゲームが進み、その差はどんどん開いていった 	
<p>③ マーケットはどうだったか？</p> <p>④ 「A 班です」と嘘をついたのはなぜか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ わざと A、B 優遇措置を取っていた、次に C、D、E、F 特に F には厳しく（相手にしていなかった） ・ ネームバリュー（ex. Japanese Brand）、有名ブランドや国名の優位性、市場への新規参入の難しさ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ A：とんでもない規格外の製品を持ってきても買い取ってもらえる ・ E：「マーケットがなかなか受け付けてくれん」「がんばるけど全然ダメ」 ・ F：「絶対おかしい、闇金融や」、銀行からの締め出し ・ 違うグループが「A 班です」と嘘をついてマーケットに来た
<p>⑤ マーケットをしてみてもどんな気持ちだったか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実は結構難しいマーケット役 ・ 嫌な思いをした人もいるかもしれないが、あくまでも加藤君は役に徹してくれただけ。 	
<p>⑥ 新しい資源が発掘された時はどんな気持ちだったか？ 投入された E とその他のグループに問う</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新しい資源を上手く活用できたか 	<ul style="list-style-type: none"> ・ E：驚く、「イエーイ」、他の班が殺到
<p>⑦ 途中で価格変動があったのに気付いたか？ いつ気付いたか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 市場価値の変化 ・ A、B にはメモが届いていた = 情報格差 ・ D：分度器製品で一気に稼いでいたが、ブームが過ぎれば（つまり買い取りが無くなれば）・・・（ex. フィリピンのナタデココ） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「価格が下がったとか知らなかったしー」 ・ 「えー半額？ 何で？」というグループがいる一方で「（半額でも）イエーイ」と喜ぶグループがいた ・ D：分度器製品の価格が高騰することで稼いだチーム
<p>⑧ どろぼう発生！ 何故どろぼうしたのか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本当に取りたくて取ったのか、盗みはいけないことだが、生き延びるために生死をかけて盗みを働くことがある（ex. タンザニアでは盗みをはかり捕まった人 	<ul style="list-style-type: none"> ・ どこの班か分からないけれど、どろぼう発生

質 問	ポイント	実際の動き
	<p>は、住民から集団リンチに遭い最終的には住民により焼かれるケースが多い)</p>	
<p>⑨ 物資支援を受けてどんな気持ちでしたか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 何か手を差し伸べたくなる気持ちは分かる、しかしそれは相手に「どんなものが欲しいか、必要か」聞いた上での支援なのか ・ 現地のニーズを無視した援助になっていなかったか ・ 私たちが一方的に良さそうと思うものを渡しているだけではないか ・ もしかしたら、支援は一切必要ないと言う場合もあったかもしれない ・ 物を与えるだけで良かったのか、AなりBなりの技術を持った人が派遣されても良かったのではないか (JICA ボランティアの例) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ F：訳の分からないサバイバルナイフ？：コンパス拍手が起こる場面も有 ※ ここでFが班内で談笑したり、ゲームに講じたりしている場面が見られていたら「物はなくても、コミュニケーションを大切にしていたり、稼ぎはできないけど相手と向き合うなど違う意味での幸せが見られる」等と補足することも出来る
<p>⑩ なぜ、稼ぎに稼いでいたAは他の国に目が向けられなかったのか</p> <p>⑪ そんなAを見て他の班はどう思ったか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ どんな製品を作っても稼ぎ、休む間もなく働き続け、稼ぎ続ける先進国の姿 ・ 援助者／被援助者だけの視点だけではなく、また目の前の出来事だけにとらわれるのではなく、普段から周りに目をやり、必要な人に必要な働きかけをする気持ちの余裕を持つことが大切なのではないか 	

⑥ 振り返り指導案

テーマ 貿易ゲームを通して国際協力の在り方を考える

本時のタイトル 国際協力の在り方を考える

ねらい
 前の時間に貿易ゲームを行う。それによって先進国と発展途上国と後発発展途上国が貿易をしたときに苦労したことから、どのような援助をすべきか、またはどのような援助をしてほしいかを考えさせる。そこから、相手の立場に立って必要な支援とできる支援を合致させることが大事であるということに気付かせる。

	主な学習活動	教師の働きかけ
導入 (5分)	前時の振り返り	
展開① (10分)	袋の中に入っていたものが何を表わしているのか？その数の差は何を表わしているのか？を考える。	技術と資源に差があることによって国家間の格差が生まれることに気付かせる。 自国の利益を追求することだけを主眼に置いたが、そうすると先進国が有利になり国家間の格差が広がることに気付かせる。 貧困にあえいでいる人たちがいることに気付かせ、だからこそ国際協力が必要であることに気付かせる。
展開② (15分)	先進国のグループは「ゲームの中で世界のためにできたことはなんだったか?」、開発途上国と後発開発途上国のグループは「ゲームの中でどんな支援があるとよかったか?」を考えよう!	一方的な支援ではなく、自分たちができる支援と相手にとって必要な支援を合致させることが大事であることに気付かせる。 発展途上国には、物をもらうだけでなく、技術を生み出す力が必要であることに気付かせる。
まとめ (10分)	先生の話聞く。 今日の活動についての感想を記入する。	物をあげるということが、依存体質を生み自立を妨げる可能性があることや、自分たちが不要なものをあげるという時点で上から目線なのかもしれないということを伝える。 国際協力に関わる最初は何もしないよりはできる協力をする方がいい。「人の為になにかをする。」という気持ちを大事にしてほしい。より深く国際協力を学んでいくうちに、そこに潜む問題点についても考えていくことが大事だと気付かせたい。

⑦ 生徒の感想

① 先進国グループ

今回の活動を通して先進国は有利な立場にあるけれど、Fのように発展途上国は不利だったのではないかと思いました。また、自分たちA班はたくさん儲かったのだからほかの国を支援したりできたのではないかと、後から気づきました。これから先も日本は割と裕福な立場にあるから、他の貧しい国に技術や製品を作るやり方などを教えたりするべきだと思いました。発展途上国と分かち合っていきたいです。

今回の振り返りをしてみて思ったことが2つあります。

まず1つは、自分たちAチームは他国への思いやりが欠けていたかなと思いました。この思いやりはこれから大事になると思うので覚えておきたいです。2つ目は、不平等ということの恐ろしさです。豊かな国では仕事ははかどり、貧しい国では仕事をする気になれないと思います。今回の貿易ゲームで学んだことを日々の生活に役立てていきたいです。

② 発展途上国グループ

貿易ゲームをしてみて現在の世界の関係がどんなものなのか、詳しく知ることができました。私はC国で中堅の立場でしたが、資源はあるのに技術がないというのはとても困りました。みんなと協力して手に入れたもので製品を作っても、急な価格変動で売れなくなってしまった時があり、世の中そんなに甘くないなと思いました。でも、私たち以上にE国やF国は苦しい思いをしていました。ゲームの中だけでなく先進国は発展途上国をサポートしていくべきだと思います。物を作るだけでなく、技術を持った人を派遣したり、留学したり、自分の国を豊かにする方法はいろいろあると思いました。とても楽しいゲームでした。またやりたいです。

このゲームが終わった後の種明かしをした際にはそれぞれの国によって稼いだ額が大きく違ってとても驚きました。自分のグループは発展途上国だったのですが、製品を作って売りに出した時に少しのずれでもらえる額が少なかったり、もらえなかったりと厳しいと感じました。なので、後で自分たちの立場を知った時には納得がいきました。現在世界には資源をたくさん持っている国、技術を持っている国など様々な国があります。だから、今回学んだように協力して助け合えば、お互いにも利益があるので、そんな国が増えてほしいです。

③ 後発発展途上国グループ

今回の貿易ゲームは私たちは、後発発展途上国だったので最初の道具がとても少なかったです。でもほかの国からすべてのお金を使ってはさみを買って窓ですかして写してみたり、折れた鉛筆をはさみで研いだりしました。自分たちでできることは自分たちでして、できないことは他の国に助けられました。でも、だまされたり信用できなくなったりした時はとても悲しかったです。今回のゲームを通して私たちは「もっと助けて」「もっと資源をください」などのことを思いました。本当の発展途上国の人たちもそう思っているのかなと感じました。これからは他の国にも目を向けて助けられるようにしたいと思いました。

世界にはこんなひどい差別があることに心を痛めた。ゲームにより実際に差別を体験したが二

度としたりたくない体験でした。日本は先進国なので、こういう差別をされる側ではないと思いますが、これからこのような差別を世界から無くすために、他の国との交流を深め信頼関係を築いていくことが一番いいと思います。日本からは留学生を受け入れたり、技術を伝える人を派遣するなどを積極的にしていくべきです。

成果と課題

1 時間目は、事前に貿易ゲームの計画を立て、それに対して国際協力推進員の北蘭さんから意見を頂いて実施した。一人では分からないような遊び心がところどころにちりばめられており、生徒たちも楽しく取り組むことができた。ゲームが終了後に、このゲームの意味するところを話すと、生徒の顔つきが変化した。特に、後発発展途上国のグループは、大変さを身に染みて感じたようであり、国際協力の大切さを体験できたようである。

2 時間目は、再度、北蘭さんと打ち合わせをして翌週に振り返りを実施した。時間が45分間であったこと、私の力量のなさもあり、なかなか活発な意見交換ができなかった。生徒が活発に意見交換できるような手立てを考えなければならないと感じた。しかし、感想文を読むと、こちらが伝えなかったこと（国際協力の大切さ・国際協力の在り方）は、感想文を見ると伝わったのかなと感じた。

参考資料・教材など

ケニアで感じたこと

森 拓 也

MORI TAKUYA

宮崎県立宮崎北高等学校（宮崎県）

担当教科：地歴公民科

●実践教科：HR、日本史の授業

●時間数：1時間×7クラス

●対象学年：1・2・3年生

●対象人数：240名

カリキュラム

■実践の目的

- ① なぜケニアへ行ったのかを伝えながら JICA の取り組みを紹介する
- ② ケニアと日本の違いとケニアの中の日本を見せながらケニアについて紹介する
- ③ 海外で活躍する日本人はカッコいいということを伝える

■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【1時限】×7クラス テーマ：ケニアで感じたこと ねらい：ケニアで感じたことを生徒に伝える	ケニアで見てきたもの、感じたことを、動画を見せながら話した	DVD

授業の詳細

最初に自分のクラスで実施した。研修前に JICA のパンフレットを教室に貼ったり、学級日誌で途上国の現状について書かせたり、ボールペンを提供してもらったりしていたので、生徒も興味深そうに聞いていた。

ただ、自分があるもこれも話そうとして、話が脈絡がなくなり聞きづらかったのではないかと感じた。このため、次からは話したいことを絞って話した。

ポイントは、①なぜケニアへ行ったのか、②ケニアと日本の違いとケニアの中の日本、③海外で活躍する日本人はカッコいい、という3点に絞って話した。

これによって、生徒の聞く様子に手ごたえを感じる事ができた。

成果と課題

話した後に生徒が寄ってきてもっと聞きたかったという話や、自分も将来 JICA で働きたいと考えているという生徒も出てきたりした。放送部の生徒は、新人大会へ向けての作品の題材にしたいと言ってきて、多くの反応があった。

ケニアで見つけた Wow と Why をきっかけに

原口俊明
HARAGUCHI TOSHIAKI

長崎県立大村高等学校（長崎県）
担当教科：理科（物理）

- 実践教科：総合的な学習の時間ほか
- 時間数：4回（4時間）
- 対象学年：2年生、1年生
- 対象人数：のべ700名

カリキュラム

■実践の目的

- ・ 開発途上国に対するイメージと実際のずれについて認識させる。
- ・ 自分と世界のつながりについて知ることで、自らにできる支援のあり方について考えさせる。
- ・ ケニアの人々の暮らしやそこで活躍する日本人の活動を通し、これからの社会を「生き抜く力」について考えさせる。

■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	テーマと実践の概要	使用教材
【実践0】 実践のねらい ケニアについての興味を抱かせる	【ケニアってなに？】 ・対象：不特定多数 掲示板の一角にケニアコーナーを設置 ・概要 掲示板にケニアの写真や生徒アンケートの結果などを展示し、ケニアについての興味関心を抱かせた。	アンケート結果 ケニアの写真 紙幣・硬貨
【実践1】 実践のねらい イメージと実際のずれを認識させる	【ケニアで見つけた Wow と Why】 ・対象：2年生 300名 総合的な学習の時間の一環として学年集会の形態で実施 ・概要 自分たちが持つイメージと実際の間にはずれがあることを認識させるため、ケニアクイズやケニアの写真、私自身が体験したことを話し、生徒たちの認識の変容を促した。また、事後アンケートにより、生徒の認識の変化を調べた。	ケニアの写真 民族衣装 青年海外協力隊の要請一覧 感想用紙

時限・テーマ・ねらい	テーマと実践の概要	使用教材
<p>【実践2】</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>実践のねらい 開発途上国の暮らしや価値観の多様性について知り、海外ではたらくことについての考えを深める</p> </div>	<p>【国際協力 ～海外ではたらくということ～】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象：1年生 180名 進路学習の一環として、総合的な学習の時間に実施 ・概要 私自身が見たり、感じたりしたことや元青年海外協力隊員の方の話を通じ、開発途上国の人々の生活や現状について知るとともに、国際協力を行う際に重要になる事柄や価値観の多様性について考えさせた。 	<p>ケニアの写真 青年海外協力隊の要請一覧 感想用紙</p>
<p>【実践3】</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>実践のねらい 修学旅行の事前学習の一環として、国際支援やJICAについて概要を理解させる</p> </div>	<p>【国際支援とJICA】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象：2年生 40名 修学旅行のクラス別研修でJICA 地球ひろばを訪問する生徒 ・概要 「JICAの仕事」を参考資料として、JICAの事業や国際支援の必要性などについて班で話し合わせ、その結果を発表させた。 	<p>JICAの仕事 国際理解教育実践資料集 写真</p>
<p>【実践4】</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>実践のねらい 未来のリーダーとなることが期待される高校生にグローバルな視点で考えるきっかけを提供する</p> </div>	<p>【世界にはばたけ未来のリーダーたち】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象：県央地区の高校2年生 180名 (離島の高校生も含む) 各高校のリーダーを集めた1泊2日の合宿の中の生徒交流会の中で実施 ・概要 グループに分かれ、役割カードに書かれている言葉で挨拶を交わした。次に大陸ごとの面積比に応じて囲った枠の中に移動し、人口密度の違い等を実感させた。更に、文字が読めないことの不便さを体感させる活動を行った。最後に学ぶことの意味について、グループで話し合わせ、まとめさせた。 	<p>役割カード 識字ボード ネパール語で書かれた水・薬・毒のラベル 水、砂糖水、塩水 ひも 模造紙 プロジェクター パソコン</p>

授業の詳細

【実践0】 ケニアってなに？

(1) 実践の内容

① 生徒アンケート集計結果の掲示

2年生全員(300名)を対象に、ケニアに関するアンケートを実施した。その集計結果を掲示し、ケニアに関する興味・関心を喚起した。

② ケニアの写真や紙幣・硬貨の展示

アンケートから浮かび上がった、生徒のケニア像を象徴するような写真の展示した。また、ケニアの紙幣・硬貨を展示し、ケニアへの距離感を縮めるようつとめた。

(2) 生徒の反応と成果

◇ 図0-1にケニアから連想されるものについての生徒アンケート結果を示した。これから生徒が抱くイメージは図0-2の写真のようなものと推定することができ、その後の授業実践に大いに参考になった。

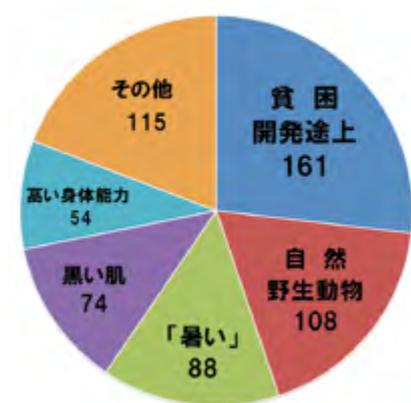


図0-1 ケニアから連想されるもの(2年生7月時点)



図0-2 生徒が持つケニアのイメージ

◇ 職員室入口に設置されたケニアコーナーで足を止め、展示を食い入るように眺める生徒の姿をしばしば目にした。また3年生の中には、将来取り組んでみたいこととして開発途上国での活動を挙げるものもあり、一定の成果を挙げることができた。

(3) 使用した教材

<教材0-1> アンケート結果

<教材0-2> ケニアの写真

<教材0-3> ケニアの紙幣

<教材0-3> ケニアの紙幣



【実践1】ケニアで見つけた Wow と Why

(1) 実践の内容

① ケニアの言葉で「こんにちは」

- a. スワヒリ語で「こんにちは」 = 「JUMBO !」であることを紹介し、全員で「JUMBO !」と挨拶を行った。
- b. 帰国後、私自身が最も多く尋ねられた2つの事柄（下枠参照）についての紹介とそれについての説明を行った。



写真1-1 ケニアってどこ？

- ✓ 暑かったでしょう？ … 早朝は肌寒いときもありました（写真1-2）
- ✓ エボラ出欠熱は大丈夫でした？ … 流行地域からはタイと韓国ほど離れてます

② ケニアクイズ

クイズを通して、ケニアに対する興味関心を喚起すると同時に、自分たちが持つ外国に対するイメージはかなり偏っているということに気づかせるようにした。

表1-1 ケニアクイズ（一部）

Q1 ケニアにある？ ない？	携帯電話
	自動販売機
Q2 あるのは、どっち？！	A セブンイレブン B ケンタッキーフライドチキン
Q3 ないのはどれ？	A 車椅子用の専用駐車スペース B 小学校の制服 C 個人の住所



写真1-2 ナイロビの朝の気温



写真1-3 携帯電話を首にかけている女性

③ ケニアで見つけた日本

a. ケニアで見かけた日本製品

多くの日本車（中古車）が見られること、馴染みの深い日本企業が進出していることを写真を交えて紹介し、日本とケニアの間の「もの的なつながり」に気づかせた。また、「日の丸」や「JAPAN」とかかれた看板やステッカーを見せ、何故そのようなものが見られるのかについて考えさせた。

b. ケニアで活躍する日本人

ケニアで活躍されている大学関係者、民間企業やNGOの方々そしてJICA関係者の方々の話を紹介し、人的な面でもつながっていることを確認させた。

④ 私たちにできること

青年海外協力隊員（永瀬隊員、堺田隊員）のエピソードの紹介や青年海外協力隊の要請一覧を見せることで、さまざまな形態の国際支援があることに気づかせるように努めた。

(2) 生徒の反応と成果

◇ 生徒の感想の中には、

「普通の服を着て生活していたり、渋滞があったり、携帯電話を持っていると聞いて驚いた」

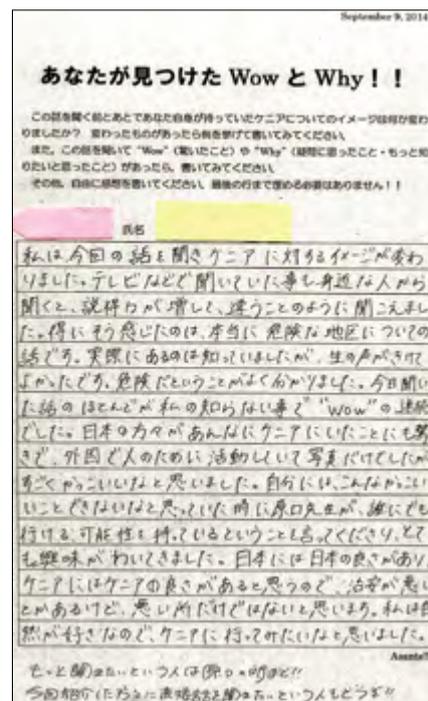
「学校では制服もあり、日本と同じような店もあり、障害者用の駐車スペースもあるなど日本との共通点も発見できた」

「ケニアと聞くと私達とは全く別の世界ことのように思っていたけどそうじゃないとわかった」

といったものが多数あり、イメージと実際のギャップを認識させるという本実践の狙いはかなり達成されてものと思う。

◇ 私が見た日本人の方々の話は生徒に大きな感動と勇気を与えたようである。国際支援に携わりたいと思っている生徒の中には「何ができるか？」と自分自身に自信を持ってないものも多い。そんな彼らの背中を押すことができるようにという思いも込めて行った本実践であるが、「自分は人に自慢できるような特技は持っていないけど、案外人の為にできることはあるんじゃないかなと考えることができました」といった感想を書いた生徒も多くおり、その思いは通じたものと確信している。

<教材1-4> 生徒の感想



(3) 使用した教材

<教材1-1> ケニアの写真

<教材1-2> 民族衣装（カンガ）

<教材1-3> 青年海外協力隊の要請一覧

<教材1-4> 感想用紙

【実践2】 国際協力～海外ではたらくということ～

(1) 実践の内容

I部 私が見たケニア：原口が担当

① ケニアってどんな国？

ケニアの位置や言葉について紹介やケニアに関するクイズを行い、ケニアに対する興味関心を喚起した。また、私自身が撮影した写真を提示することで日本との相違点や共通点を見つけさせると同時に、自分たちが持つ偏ったケニアイメージに気づかせるようにした。

② ケニアで見つけた日本

ナイロビ市内の写真を提示し、日本製の自動車が多く走っていたり、なじみの深い日本企業の看板が見られることを通じて日本とケニアのつながりを意識させた。また、ケニアで活躍する日本人の活動を取り上げ、国際協力の一端を紹介した。



写真2-1 ケニアクイズ



写真2-2 子ども達の服装に驚く生徒達

II部 青年海外協力隊に参加して：木村 暁代 JICA 国際協力推進員が担当

③ フィリピンの人々の暮らしと協力隊員の仕事

木村推進員による説明を聞き、フィリピン農村部の人々の生活についての理解を深めた。協力隊員としての苦労話を聞くことで、海外ではたらく際に大切になることについて考えさせた。

④ 不便≠不幸

物質的には決して恵まれているとはいえないフィリピンの農村部だが、そこで暮らす人々は明るく笑顔が絶えないことを紹介し、幸せの意味について考えさせた。



写真2-3 体験談を話す木村推進員

III部 まとめ：原口と木村推進員の2人で担当

⑤ 私たちにできること

青年海外協力隊の要請一覧を紹介し、世界では多種多様な職種が必要とされていることを伝えると同時に、自分たちにできる国際協力について考えさせた。

(2) 生徒の反応と成果

◇ 生徒の感想（抜粋）をいくつか紹介する。生徒の反応やこれらの感想から、本実践のねらいはある程度達成されたものと思われる。

自分の知っている世界はちっぽけだったなと思いました。ケニアにケイタイがあるなんて知りませんでした。

知識も大切ですが、それ以上に気持ちが大変なんだということを学びました。もっと海外のことについて調べてみようと思います。

食べ物もなく、学校に行けない子ども達もたくさんいますが、それでも笑顔を見せている、そのような子ども達は決して幸せでないことはないということに気づきました。

人の為に動く人は、困難なことでも乗りこえられるのだなと思いました。私も自分の得意なことを見つけて、人の役に立つ人になりたいです。

(3) 使用した教材

<教材2-1> ケニアで撮影した写真



ナイロビの市内の様子

<教材2-3> 感想用紙



生徒の感想から

<教材2-2> 青年海外協力隊要請一覧



表紙と職種別要請一覧

【実践3】 国際支援と JICA

(1) 実践の内容

- ① 教材として「JICA の仕事～みんなで作る、よりよい世界～」を用いた。テキスト p.1、p.2 を読ませ、JICA の仕事・役割についてどのようなものがあるか、グループで話し合わせ、発表させた。
- ② 開発途上国で暮らす人の割合や読み書きできない人の割合などについて確認した。その際、ビタで暮らす人々の話や Getathuru Rehabilitation School（更生施設）で出会った 13 歳の Hassan 少年（写真 3-1）の例やそこで活動している協力隊員の話を紹介し、距離感を縮めるよう心がけた。
- ③ 開発途上国への援助の必要性について各自の考えを述べさせたのち、JICA の取り組みについて説明を加えた。
- ④ テキスト p.9、p.10 を読ませ、世界にある問題についてグループで考えさせた。一例としマラリア感染症（写真 3-2）について取り上げ、貧困の病ともいわれる理由やビタの人々の生活と絡めて説明を加えた。
- ⑤ 最後に自分たちにもできる支援や望ましい支援のあり方について、グループ内で話し合わせた。



写真 3-1 Hassan 少年と 2 人で



写真 3-2 マラリアと GDP の負の相関

(2) 生徒の反応と成果

- ◇ 修学旅行で JICA 地球ひろばを訪問するということもあり、意欲的に取り組んだ。開発途上国によろすや JICA の活動についてもっと知りたいという感想が多くあり、動機付けとしては一定の効果があったと思われる。45 分という限られたなかでの実施だったため、展開を急ぎ過ぎた感がある。グループでの話し合いや発表を充実させるためにも、あと 15～20 分程度時間が必要と感じた。

(3) 使用した教材

- <教材 3-1> 「JICA の仕事～みんなで作る、よりよい世界。～」 JICA
- <教材 3-2> 「国際理解教育実践資料集～世界を知ろう！考えよう！」 JICA

【実践4】世界にはばたけ未来のリーダーたち

(1) 実践の内容

① 世界の言語で自己紹介

アイスブレイキングをかねてグループをつくり、自分の役割カードに書いてある言語で挨拶をした後、自己紹介を行った。

② 世界に出かけよう！！

世界6地域の面積に比例した枠をつくり、役割カードに書いてある地域を目指して移動。アジアの人口密度の高さや開発途上国で生活する人の割合が高いことを確認したのち、できるだけ多くの人とカードの言語で挨拶する活動を取り入れた。

③ 文字が読めないということ？

ネパール語の「バスマホス」という文字を見せ、指示がわかる人を座らせた。「バスマホス」の意味を説明したのち、文字が読めない人の割合を予測させた。文字が読めないことの不便さを実感してもらう為にデモンストレーションを2名を指名し行った。



写真4-1 「薬」と思うものを飲む生徒

デモンストレーション

それぞれネパール語で「水」「薬」「毒」と書かれた3本のペットボトルから「薬」と思うものを1名に選んでもらい、もう1名に飲んでもらう。

・・・本当に「薬」だったか？ 選ぶときに困らなかったか？

④ あなたにとって学校とは？勉強とは？

最初のグループに戻り、教育とか勉強の意味について話し合わせ、模造紙に自由に書かせた。他のグループのものを見て回る時間をとり、自分の考えを深めさせた。

(2) 生徒の反応と成果

◇ 各学校で将来のリーダーとなることが期待されている生徒たちであり、積極的に活動した。この生徒集団に対し、世界のことや勉強の意味についても考える機会を提供できたことは非常に意義あるものだと考える。

全人口のうち75%の人が発展途上国に住んでいて、勉強したくてもできない環境にいる中で、このような恵まれた環境にいることに感謝することが大切だと思った。(生徒の感想より)

(3) 使用した教材

<教材 4-1> 役割カード・識字ボード・ネパール語の水・薬・毒のラベル・水・砂糖水・塩水

<教材 4-2> 模造紙

成果と課題

■ 成 果

◇ 生徒達に、世界のこと、特に開発途上国に対する興味関心を喚起することができたこと、および自分達が持つイメージと実際のずれを実感させることができたことで、国際教育への第一ステップとすることができた。またケニアと日本の間の相違点だけではなく、共通点に目を向けた生徒が出たことは、実践を行ったものとして非常にうれしく思う。

◇ 「世界の広さ・自分の小ささ」「文化や価値観の多様性」「幸せの意味」など普段深く考えることがない事柄についても、考える機会を提供することができたと思われる。

今一番欲しいものとして、多くのケニアの子どもたちが“Education”と答えたという話は、学ぶことの意味について、根本から見直すいい機会となったようである。

◇ ケニアで活動している日本人の話やエピソードは、開発途上国のことを自分とは遠い世界の話として捉えるのではなく、ずっと身近なものとして認識させるのに大きな効果があった。この地球には自分が想像したこともない世界が広がっており、その中で自分にできる支援について一人ひとりが考えを深めることができた。



写真5-1 一番欲しいものは“Education”

■ 課 題

◇ 時間的な制約などで、実践が単発的なものになってしまった。段階を追って国際教育を深めることができるように、十分な計画を立てて取り組むことが必要である。

◇ 今回の実践を通じて、生徒達が得たもの、自分達にもできることがあるという熱い思いを持ち続けることができるように、継続的な働きかけが不可欠である。

参考文献・資料

- ・ 「青年海外協力隊要請一覧」 JICA
- ・ 「JICA の仕事～みんなでつくる、よりよい世界。～」 JICA
- ・ 「国際理解教育実践資料集～世界を知ろう！考えよう！」 JICA
- ・ 「ワークショップ版 世界がもし 100 人の村だったら 第 4 版」 開発教育協会
- ・ 「ケニアを知るための 55 章」 松田素二・津田みわ 編著 明石書店

世界の中の日本人

江島 淳子
EJIMA JUNKO

三養基高等学校（佐賀県）
担当教科：英語科

- 実践教科：総合・英語の時間
- 時間数：5時間
- 対象学年：1年生
- 対象人数：200名

カリキュラム

■実践の目的

- 外国に対する偏見や思い込みをなくし、発展途上国に関心を持たせる。
- 世界で活躍する日本人の実態を知り、国際協力への関心を喚起する。
- 異文化理解と共に、自分ができる国際理解について考える。

■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	テーマと実践の概要	使用教材
【1時限】 テーマ：国際協力 ねらい：海外で実際に活躍する日本人やその活動内容を知る。	「国際協力とは・・・」を、テーマに、「ケニア研修報告」と JICA デスク佐賀の山田泰子氏の「バヌアツ体験記」を、文化祭の講演として全校生徒・教員・参観保護者向けに行う。	パワーポイント 民族衣装 音楽
【2時限】 テーマ：世界の問題 ねらい：国際協力の方法について考える。	1年生の英語の授業で、ALT と Band Aid 30 の “Do They Know It’s Christmas?” を聞き、その音楽に込められた願いや社会情勢を理解する。また、熱帯病研究をケニアで行う長崎大学の取組を新聞記事で読む。	音楽 新聞記事 ワークシート
【3時限】 偏見や思い込み ねらい：ゲームを通して、異文化を体験し、自分の当たり前感覚に気付く。	総合の授業で、「バーンガ」というカードゲームを通して、グループ内での言葉の壁や価値観の違い等、異文化を体験し、少数派・多数派の心情を実感する。また、理解し合うことの難しさも知る。	トランプ ワークシート
【4時限】 テーマ：食文化 ねらい：違いを知る。	1年生の英語の授業で、世界の食卓の写真を使い、フォトランゲージを行う。更に、その国での社会問題についても話し合う。	パワーポイント 写真

時限・テーマ・ねらい	テーマと実践の概要	使用教材
【5時限】 テーマ：国際理解 ねらい：ネパール、海外での研究や仕事に興味関心を持つ。	総合の時間に、異文化理解とキャリア教育の一環として1・2年生全員を対象に「ヒマラヤの人々の生活」と題して講演会を開催。	パワーポイント 感想文

授業の詳細

◆ 1時間目：9月4日 文化祭1日目の講演会 テーマ：国際協力とは

全校生徒・職員・参観保護者を対象に、「ケニアで見つけたもの」と題して発表した。まず、ケニアに興味をもってもらうために、カンガのスカートをはき、マサイ族の衣装を着た陸上部のやり投げの生徒と一緒に登場、スワヒリ語であいさつ、簡単なスワヒリ語の歌を紹介し、一緒に歌った。ケニアの国について少し紹介し、ケニアあるなしクイズで、今まで思い描いていたアフリカや発展途上国に対する思い込みが、実際は違うものだという事に気付かせた。その後、モヨチルドレンセンターでストリートチルドレンを保護育成する松下さん、長崎大学熱帯医学研究所のケニア拠点で出会った嶋田先生、地方の小学校にトイレを作ったり、保健指導を行ったり、草の根活動に携わる風間さん、円借款のムエア灌漑事業の柚木さん、青年海外協力隊、村落開発普及員としてケニアで“ぼかし”をつくる永瀬さん、ナクル国立公園で環境指導をする堺田さん、最後に佐賀県出身で、サッカーを通して更生学校の生徒を指導する古賀さんを紹介した。様々な形で多くの日本人がアフリカケニアで現地の人々と深く関わりながら支援をしていること知らせるとともに、遠くアフリカの地でも日本人がその国の発展に貢献している、世界はつながっていることを実感してほしい。



続けて、JICA 佐賀デスクの山田泰子さんに、「バナアツ体験記」と題して、2年間のバナアツでの協力隊としての経験を語ってもらった。まずは国の位置や文化について、そして、現地の水事情と衛生・医療環境へと話を発展させ、看護師の資格を持った山田さんが、住民にトイレの後は、手を洗うことの重要性を説き、自分たちで雨水をためてタンクを作ったことや、日本では助かる

病気でも、医療技術がない為に命を落としていることも学んだ。当たり前のように水道から出る水の大切さを、あらためて痛感できた。

この日は、この講演の前に、夏休みにアメリカで3週間の研修をした7人の生徒達の発表とマレーシアからの留学生 Javen の発表もあり、生徒達は世界の様々な地域の国に目を向けることのできる良い機会となった。



展示コーナーでは、ケニアとバヌアツの写真をはじめ、地図や書籍、JICA の様々な国際支援についてのパンフレットも手に取ってもらえるように配置した。興味のある生徒のために、質問用紙と BOX も設置した。

(生徒の感想より)

- * ケニアと言えば、ライオンやトラなど動物のイメージが大きかったが、高層ビルや携帯電話など私達と変わらないところに驚いた。
- * 暑い所だと思っていた。
- * 貧しい国というイメージだったが、先生と楽しく遊んでいるところを見て、子どもはかわいいと思った。
- * 歌が楽しかった。

◆2時間目：12月 期末テスト後の1年生5クラスの英語の授業

1. ALT と一緒に Band Aid 30 の “Do They Know It’s Christmas?” を You tube で見た後、歌詞をプリントで確認する。



You tube 画面より



動画の中で、歌が始まる前に、エボラ出血熱の患者を全身防護服を着た人が家から運び出されるシーンは生徒には衝撃的であったようだ。歌詞の中にも愛する人に触れることさえできない悲しみが表現されている。30年前、ミュージシャンがアフリカの食糧危機のために、売上金を寄付した活動を発端に、再び西アフリカで問題になっている感染症問題の解決を支援しようと

する Band Aid の活動を知る。

2. 西日本新聞記事“ケニアからの報告～友に生きてI～”を読む。

長崎大学熱帯医学研究所ケニア拠点での活動は、マラリアをはじめ感染症の予防・撲滅が大きな目的であるが、地域の学校に水のタンクやトイレを設置し衛生環境の向上に大きく貢献され、子ども達からも感謝されている。グローバル化していく現代社会においては、西アフリカの問題はそこだけにとどまらず、世界へと広がることも懸念される。現地でデータを取り、長年直接指導に当たることの重要性を知る。

◆ 3時間目：総合の時間 1年生 HR 40人

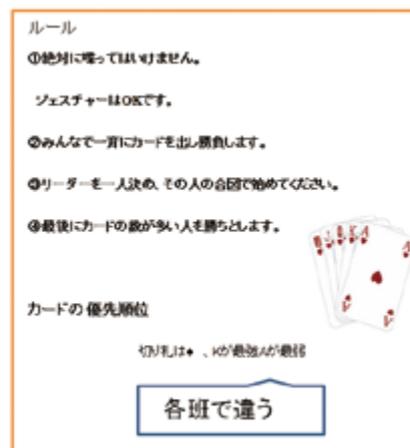
バーンガ手順

1	40人を8グループに分ける(6人×5、5人×2)
2	* ルールの用紙を配布し、説明する。決してしゃべらないことを強調。
3	ルールの用紙を回収する。
4	トランプを配り、ゲームを始める。ルールが理解できているか確認する。
5	一番の人を1班移動させる。最後の人を2班移動させる。
6	新しい班で、ゲームを再開させる。
7	もう一度移動。
8	振り返りシート記入

振り返りシートには、Q1：どんな気持ちでしたか。
Q2：どんなことに気づきましたか。の2項目とコメント欄を付けて自由に記述させた。

(生徒の感想)

- ・楽しかった
- ・話せないから伝えるのが難しかった。
- ・違う班に言った途端わけがわからなくなった。
- ・もどかしくてイライラした。
- ・切なかった
- ・すごい孤独感だった。一回でいいから説明してほしい。
- ・ルールが違って頭おかしいのかと思った。みんなに従うしかないと思った。
- ・違うルールの班に移動するのは怖かった。
- ・受け入れる気持ちが大切と思った。
- ・伝えるのに時間がかかる。
- ・これが友達同士でなく外国人とやったら大変なことになるだろうと思った。
- ・移動しなかったのであまりわからなかった。



◆4時間目：3月期末考査後の授業 1年生の英語の授業 5クラス

Lesson10 Where Does Your Food Come From? “BIG DIPPER English Communication I” (数研出版)の導入として、世界の食文化に目を向けるとともに、そこからその国々の様々な問題について考えることを目的として、フォトランゲージを取り入れた授業を行った。

1	1枚の写真④を見せて、どこの国、(県)を当てさせる。 Q: What prefecture was this picture taken in? And why do you think so
2	この写真が、その家庭の1週間分の食料であることを英語で説明し、「地球の食卓」(TOTO出版)を見せる。
3	生徒を4人で1グループの班に分け、4枚の写真 ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ のついた用紙を配布し、写真からわかることを英語で表現して書くように指示する。 Please write whatever you can see in the pictures.
4	ワークシート①を配布し、グループで話し合いながら質問に答える。 1 Guess what countries? 2 Please rank these 4 countries Q1: Which food is the healthiest? Q2: In which country do people look happiest? Q3: Which country do you think produce the most garbage?
5	ワークシート②を個人に配布し記入させる。 If you were to home stay in these countries, which country would you choose? And why? 最後にフォトランゲージの感想を記入させる。



㉞ (アメリカ合衆国)



㉟ (チャド)



㊱ (沖縄)



㊲ (インド)



㊳ (エクアドル)

この写真は沖縄のある家族の1週間分の食料である。豚肉等の食材や文字から想像できる。同時に日本の高齢化社会も反映していることも例として示した。

㉞～㊳の写真を見て、生徒達は、There are many people in the family. There are a lot of bananas. There is no table. They are smiling. They eat big pizzas. A lot of vegetables and fruits. 等、家族の人数、食材について、知っている語で写真を描写するとともに、それぞれの国の食文化や住居の日本との違いに少しずつ気付くことになった。更に、その後、グループに向け

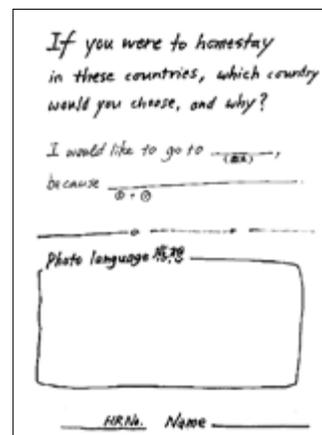
て、ランキングクイズを出し、その理由も書かせた。健康的な国は、野菜やフルーツの多いインド、ゴミの多い国はパッケージの多いUSA で合意したが、幸せな国については、「みんな笑顔だから決められない、幸せに順位は付けられません！、幸せは物じゃないよ」等の意見も見られ、どのクラスでも、一つの国に決めることはできなかった。

ワークシート②（生徒の感想より）

- ・他の国の色々な食のことに知れて面白かった。やっぱり私は日本が好きです。
- ・1枚の写真で色んな事が分ると思った。
- ・エクアドルのおじさんの笑顔かステキ。
- ・チャドという国を初めて知った。鳥が気持ち悪かった。
- ・食べ物の写真から貧富の差が分った。
- ・他国の文化を見て全然わからない国もあり、知識不足だと思った。知れてよかった。
- ・ますます外国に行きたくなった。
- ・もっとほかの国のことも知りたくなった



ワークシート①



ワークシート②

◆5時間目：3月23日 総合の時間 1・2年生全員 400名+職員

進路指導部のキャリア教育支援事業の一環として講演会を実施した。外国人講師に来ていただくことで、異文化理解とコミュニケーション能力向上への動機付けを行い、グローバルな視点を持ったキャリア観の育成を目標とした。

JICA デスク佐賀の山田さんに、佐賀県国際交流協会の国際理解講座事業を紹介していただき、佐賀大学の研究生 Gaihre Yuba Raj（ガイレ・ユバ・ラズ）さんの約30分のプレゼンテーションでネパールの国や文化、ヒマラヤの人々の生活についてまた、北海道大学の先生がリンゴの栽培を紹介したこと、首都カトマンズにはJICAが造った150kmの道があること、青年海外協力隊や日本人がどんな活動をしているか等、お話を聞き、その後、生徒からの質問の時間を設定。活発な質疑応答が行われ、最後は、ガイレさんから生徒へのアドバイスをいただき、講演会を終了。生徒は、その後教室に戻り、感想文を書いて提出した。講演会前に事前アンケートで「ネパールと聞いて思いつくものは何ですか」と問うた所、暑い・寒いイメージの両方があったり、国旗についてしか知らないだったり、グローバル化が叫ばれているが、生徒達にとっては遠い謎の異国であった。しかし、ガイレさんの話で、一気に距離が縮まり、親近感を持たたという感想が多くみられた。流暢な日本語での講演も生徒達には印象的で、外国で暮らす際、その国の言語をマスターすることは、大きな利点であり、また、大学での研究において、英語の重要性についても知り、大きな刺激を受けたようである。今後も、英語や地理等の教科に限らず、進路選択をする際に、国際的な視野からも考えられるよう指導していきたい。

(生徒の感想より)

- ・ 最初ネパールと聞いてまったくと言っていいほど何も知りませんでした。話を聞くうちに、ネパールのことがだんだんわかってきて、すごく平和な国だということが分かりました。あんなに多くの宗教の人がいるのにまったく争い事がおきないことに驚きました。住む場所によって食べ物や生活の違いがあり、その違いをお互い受け入れて一緒に住むということはとても大変だと思います。世界はそんな人の集まりで成り立っているのに、世界がネパール人のような考え方を持てたら、争いが起こらないで平和に暮らせるのに、と思いました。また、女性を大切にしている国ということで、これも見習っていくべきだと思いました。みんな平等なネパール人の生き方にすごく憧れを持ちました。
- ・ ネパールという言葉は、私には正直なじみがなかったのですが、それだけで日本とは関わりが薄く決して交わることのない国だという勝手なイメージを持っていました。私が進学しようとしている国には、かなりの割合で外国人がいること、留学にあたり、日本に関心を持つ外国人がいることを知り、国境を越えて人同士がつながりあっていることがわかり、世界に目を向ける大切さを感じました。



“ナマステ～”



Q&A タイム



ネパールの民族衣装

実践授業を通しての感想

まず、時間確保に苦労した。総合の時間やLHRの年間計画に新しいものを入れるのは非常に難しいので、今後は、1年間ないし3年間の見通しの中で、国際理解授業を導入することを職員にも伝える必要があると感じた。LHRは担任指導もあるので、教員同士の研修会なども計画できれば、一人でやらずに学校全体で取り組める。

生徒の反応は、毎回大きく、興味関心を多少なりとも喚起することができたように思う。ガイレさんの講演会の後間もなくして、ネパールで地震が起こり、大きな被害が起きたことに対して、生徒会の提案で、募金活動が始まった。ネパールを自分たちの知人の国と思うことで、呼びかけも大きく反応も大きかった。このように、生徒たちからの自主的な行動につながっていくことをもっと増やしていきたいと思う。

ケニアへの派遣を通して、自分自身気付かされたことがたくさんありすぎて、整理できないまま実践授業に入っていったような気がする。今後も、見てきたこと、取ってきた写真、知り合えた協力隊員との交流等をどう授業に活かしていくかを課題にしながら、他の先生のアイデアも参考にして実践へとつなげていきたい。毎日の授業の中で、少しずつでも伝えていこうと思っている。

参考資料・教材など

写真で学ぼう！「地球の食卓」学習プラン 10、地球の食卓、TOTO 出版

国際理解教育

～世界に目を向けてみよう～

黒木 愛

KUROKI AI

吉野東小学校（鹿児島県）

担当教科：小学校全科

●実践教科：総合・社会・道徳・学年集会

●時間数：各45分

●対象学年：1～6年生

●対象人数：全校児童911名

カリキュラム

■実践の目的

- ケニアを知ることで、違う国で、違う暮らしをしている人々が地球にはいるということを理解させる。そこから、隣にいる友だちを、仲間を、少し苦手な人の違いを認め、受け入れようと努めさせる。【対象5年生】
 - ケニアを紹介することで世界に目を向けさせ、世界に少しでも興味・関心をもたせる。そして、自分は日本人であると同時に地球人でもあるということを自覚させ、地球に住む人々は皆友だち・仲間である意識をもたせる。【対象全学年】
 - 世界の*現状を知り、日本人として自分たちはどんなことを考えていけばよいのか、何ができるのか、自分なりに考えを深めさせる。【対象6年生】
- ※ 世界の様子や諸問題・国や人レベルでの支援（ユネスコ・ユニセフ、青年海外協力隊・NGO）

■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	時 期	対 象	使用教材
【学年集会】 テーマ：いじめを考える週間と ケニア ねらい：人権を重んじる	平成26年9月8日(月)	対象：5年生全員	ケニアでの写真
【総合的な学習の時間（国際理解）】 テーマ：世界を知ろう ねらい：世界に目を向け興味・関 心をもつ	平成26年11月5日(水)	対象：全学年	ケニアでの写真
【道 徳】 テーマ：世界に目を向けよう ねらい：日本人としての立場を確 認し、世界へ興味関心をもつ	平成27年1月20日(火)	対象：6年生全員 5年3組	「世界がもし100人の村だったら」 ワークショップ

時限・テーマ・ねらい	時 期	対 象	使用教材
【社 会】 テーマ：世界の未来と日本の役割 ねらい：青年海外協力隊・NGO を知る	平成27年2月25日(水)	対象：6年1組	ケニアでの写真 JICA 資料
【社会6年】【道徳5年】 テーマ：世界の未来と日本の役割 ねらい：これからの世界、これからの日本について考える	平成27年3月4日(水) 平成27年3月5日(木)	対象：6年1組 5年3組	ケニアでの写真

※ 各内容・詳細は後に掲載。

授業の詳細

平成26年9月8日(月)5年生学年集会にて「いじめを考える週間とケニア」

第5学年4学級 計155名

- ① ケニアの国旗、国名、アフリカ大陸、場所、気候、スワヒリ語「ジャンボ」の紹介
 子どもたちは異国に興味津々。赤道直下にある国は、やはり暑いイメージがあるようだった。年間平均気温が30度超えないことと、8月にも関わらず朝晩は長袖を着用するほど涼しく寒い気候であることに驚いていた。
- ② ケニアの子どもたちの紹介
 幼稚園生、小学生、中高校生の写真を見せた。「みんなと同じように目がキラキラと輝いていましたよ」と紹介。制服を着ていることに驚いていた。「人種」を学習していない子どもたちだが、肌の黒さに関しては特に驚くことなく写真を見ていた。ニュースや本、雑誌等で、世界には様々な人々が暮らしていることは既に知っていることではあるようだ。
- ③ 地方の暮らし
 首都ナイロビではなく、地方ビタでの人々の暮らしを紹介。学校に行きたくても、家事を手伝わなくてはならず、学校へ行けない子どもたちもいることに、真剣に話を聞いていた。数キロ離れた湖へ水汲みに出かける子ども、20キロもある水を頭の上に乗せて運ぶのは女性と子どもたちの仕事、水洗式ではないトイレ、学校は三人で一つの机や教科書など。
- ④ 自分が感じたことの紹介
 日本で生まれ育った自分が、その目線でケニアを見るから「可哀想だ」とか「不便だ」と思うだけであって、実際にその地に暮らす人々は一生懸命に生き抜き、楽しく暮らしていたのが事実。簡単に「貧しい国」「途上国」など言うてはならないなと痛感した。同時に、人はみんな、幸せに生きる権利があり、幸せに生きなければならないと感じた。
- ⑤ 「いじめを考える週間」との繋がり
 ケニアを紹介したことで、話を聞く前の自分と、話を聞いた後での自分との違いは何か。
 それは、ケニアを少しでも身近に感じられるようになったこと。全く知らないわけではなくなったのである。違う国で、違う暮らしをしている人々が地球にはいるということを理解すること。

それは、自然と違いを受け入れているということに繋がる。では、それが自分たちの暮らしの中のどこに繋がるか。それは、今隣にいる友だちを、仲間を、少し苦手な人の違いを認め、受け入れようと努めることなのだ。人の数だけその人らしさがある。それを受け止め、みんなが幸せに暮らせるように、認め合っていこうという話をした。

平成26年11月5日(水) 国際理解教育「世界を知ろう」

全校児童 計911名

<スライドショーにて>

① 日本から世界へと視野を広げさせ、アフリカについて語る。

② ケニアの紹介(各学年の既習事項に関連させる)

5年社会・・・・・・・・・・ アフリカ大陸の場所

4年算数「面積」・・・・・・・・ 日本とケニアの面積比べ

3年算数「大きな数」・・・・ 日本とケニアの人口

6年社会・・・・・・・・・・ 赤道の位置と、ケニアの気候、衣服

1年生向け・・・・・・・・・・ 「ウガリ」をはじめとするケニアの食事

2年生向け・・・・・・・・・・ ウガリの原料

③ スワヒリ語、ケニア(ピタ)の学校の様子を紹介

④ 学校に行けない子どもと、その理由(参考:JICA資料)

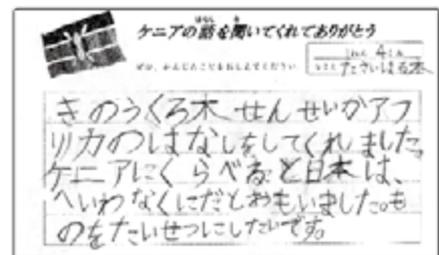
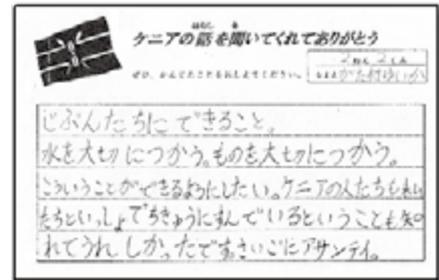
⑤ マラリアなどの病気について考える(ビクトリア湖の現状)

⑥ 平均寿命について(日本、ケニア、シエラレオネ)

⑦ 国際協力について

⑧ ケニアの子どもたちが欲しいといった物は「教育」

⑨ 私たちにできることを考えよう



<児童の感想>

1年生… ○ケニアの人は、ケニアの生活をどう思っているのか知りたい。

○日本は平和な国だと思いました。 ○物を大切にしたいです。

○みんな友だちなんだなと思いながら見ていました。 ○水をみんなで大切にします。

2年生… ○ぼくたちはめぐまれているんだなと思いました。

○ケニアの人たちも私たちと一緒に、地球に住んでいるということも知れて嬉しかった。

○わたしたちにできることをちゃんとやって、周りの人を幸せにしたい。

○自分でできることがあるか調べようと思いました。

3年生… ○もっとケニアを知りたいです。 ○すぐそこにケニアを感じることができました。

4年生… ○ケニアのこともよく考え、学校に行く権利を大切にしたいです。

○ケニアでは苦勞する面もあると思うけど、不幸ではないなと感じました。

5年生… ○同じ人間なのに、同じ生活をしていないのは何故と思いました。

○「かわいそうだな」と思うのは失礼だと思いました。ケニアの人々の写真を見たら、笑

- 顔があったからです。 ○ 私たちは今の生活に感謝しなければなりません。
- 6年生… ○ ケニアの話を聞いて、前よりもケニアのことをよく知り、身近に感じられるようになった。他国にも興味をもち、いろいろなことを調べたい。
- ケニアではケニアの生活、それが「当たり前」であり、それは日本も同じ事。

平成 27 年 1 月下旬～ 2 月上旬 (平成 26 年度 3 学期)

第 6 学年 4 学級 計 128 名

1 テーマ 世界の中の日本

2 関連教科

社会「世界の未来と日本の役割」…6年1組 32名

道徳「世界の中の日本」(資料：世界がもし 100 人の村だったら)…6年4学級 128名

3 ねらい

(1) 目指す子ども像

世界の^{*}現状を知り、日本人として自分たちはどんなことを考えていけばよいのか、何ができるのか、自分なりに考えを深めることができる子ども。

※ 世界の様子や諸問題・国や人レベルでの支援(ユネスコ・ユニセフ、青年海外協力隊・NGO)

(2) 子どもの実態 <調査方法：質問紙法 対象：6年生全員 実施日：1月>

① 外国に行ったことがありますか。それはどこですか。

ない…116人 ある…8人 アメリカ・韓国・台湾・フランス・オーストラリア
イギリス・ベルギー・イタリア・バチカン

② 外国に興味がありますか。理由も書いてください。

ない…20人 ある…104人

<ない理由>

- ・日本人だから。 ・外国語が喋れない。 ・旅行をあまりしないから。
- ・日本が一番好きだから。

<ある理由>

- ・日本にない物や生物がたくさんあるから。 ・日本との共通点、違う点を知りたい。
- ・日本とは違う言葉や文化を知りたいから。 ・日本とちがう料理があるから。
- ・違う国に行きたいから。 ・サッカーが強いチームがあるから。
- ・日本に飽きたから。 ・他の国も面白そう。
- ・世界の衣装について知りたいため。 ・姉が外国へ行っていたから。
- ・日本とは違う外国の良さを見つけたい。 ・未来に役立てられる。
- ・暮らしや環境に興味があるから。 ・兄が外国にいるから。
- ・ホームステイをしたく、英語も大好きだし、将来は英語関係の仕事につきたいから。
- ・自分の常識が、外国では全くなかったり逆にありえないことだったりするから。
- ・いろいろな遺産や歴史のある街などを見てみたいから。 ・色々な人と会いたい
- ・外国の考え方や、日本についてどう思っているかを知りたいから。

③ 外国へ行ってみたいですか。また、それはどこですか。

特に行きたくはない…32人 行きたい…91人 無回答…1人

<行きたい国>

アメリカ (ハワイ)・フランス・イギリス・フィンランド・スペイン
オーストラリア (パース)・ブラジル・カナダ・イタリア・ニュージーランド
シンガポール・アイスランド・ロシア

④ 世界のかかえる問題には、どのような問題があるか、知っていたら書きましょう。

あまり知らない…71人 知っている…53人

<問題> ・PM2.5 ・紛争、テロ ・地雷 ・デモ ・サイバー攻撃 ・地球温暖化
・飢餓 ・教育不十分の国がある ・酸性雨 ・砂漠化 ・オゾン層の破壊
・核問題 ・熱帯林減少 ・公害 ・差別 ・水不足 ・エボラ出血熱
・食糧不足 ・人種差別 ・貧困

⑤ 将来、仕事や勉強、スポーツなどで、世界に出て挑戦してみたいですか。

日本からは出たくない…61人 世界に出てみたい…63人
海外で働きたい…14人 海外へ勉強しに行きたい…26人
スポーツで活躍したい…26人

その他…5人

}	・科学者として。
	・看護師として、病院のないところで子どもたちの病気を治したい。 (ボランティア)
	・海外のロボットの技術を見に行ってみたい。
	・海外で、自分の仕事の修行や技を身に付けたいから。
・観光業として。	

<考 察>

本校6年生の子どもたちは、ほとんどが外国へ行ったことがない。逆に、外国に興味がある子どもたちは多い。子どもたちが挙げた理由から見ても、行ったことがないからこそ、知りたいことが多く、興味があることが伺える。それと同時に、外国へ行ってみたいという子どもも多い。特に行きたくはないという子どもたちは、②の質問において、「外国語が喋れない」や「日本が好き」など、外国に対しての不安や、今暮らしている日本への満足感等が伺える。

現代、情報化社会の中で生きる子どもたち。世界の抱える問題についても容易に情報を得られる時代であるが、知っている子ども、知らない子どもはほぼ半々であった。知っている子どもに関しては、PM2.5やエボラ出血熱など、最近のニュースを挙げられていることから、普段からニュースを意識して見ていることが考えられる。そういった世界事情を把握している子どもたちは、世界へ目を向け、将来の自分についても深く考えることができている。今回は、全ての6年生に、世界に目を向け、少しでも世界について知り、考え、思いを深めることができるように、授業を展開していきたい。

(3) 該当する学習指導要領の内容

社会科学学習指導要領第6学年の内容 (3)

世界の中の日本の役割について、*次のことを調査したり地図や地球儀、資料などを活用したりして調べ、外国の人々と共に生きていくためには異なる文化や習慣を理解し合うことが大切であること、世界平和の大切さと我が国が世界において重要な役割を果たしていることを考えるようにする。

※：我が国の国際交流や国際協力の様子及び平和な国際社会の実現に努力している国際連合の働き

道徳学習指導要領第6学年の内容

4主として集団や社会とのかかわりに関すること (8)

外国の人々や文化を大切にすることをもち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。…国際理解にとどまることなく、日本人としての自覚をもって、積極的に外国の人と接したり、交流の場に参加したりするなどして、国際親善に努められることが大切である。そして、それらを更に人類愛にまで深めていくことが求められる。

(4) 使用する教材・教具

6年道徳「世界の中の日本」では、資料「世界がもし100人の村だったら」の、開発教育協会出版のワークショップを用いて、世界の現状を知ってもらうきっかけ作りを行う。

6年社会科「世界の未来と日本の役割」では、指導者が実際に訪れたケニアの現状やケニアで活躍する青年海外協力隊員古賀さん、国際NGOモヨ・チルドレンセンター松下さんを教材として扱い、世界で活躍する日本人をより身近に感じてもらう。また、単元の終末には、あってもよいちがいとあってはいけないちがいとを仕分けるアクティビティを行うことで、全ての人に対して差別・偏見を無くし、平等に接していくことの大切さ、相手を理解していくことの尊さに気付かせていく。

4 指導計画

	本時のタイトル	○主な学習活動	◆指導上の留意点	☆評価の規準
つ	<世界に目を向けよう> 【道徳】 世界がもし100人の村だったら	○「世界がもし100人の村だったら」のワークショップを通し世界の現状を知り、日本人としての立場を確認し、世界へ興味関心をもつ。	◆6年生全員に役割カードを配布し、一村人としてさまざまな減所を実感させる。	☆世界で優位に立つ国が支援するのではなく、世界の仲間に対して、友人としてどんなことができるかという視点で考えることができる。
か む	【社会】 ①世界で活やくする日本人の人々 P 62～63	○「アフリカ開発会議」などにかかわって、世界で活躍している日本人について話し合い、世界の平和と発展のために果たす日本の役割について関心をもつ。	◆「アフリカ開発会議」だけでなく、ユネスコや青年海外協力隊、NGOの活動について関心をもたせる。	☆国際協力にかかわる日本人の活動に関心をもち、学習課題を考え表現している。

	本時のタイトル	○主な学習活動	◆指導上の留意点	☆評価の規準
調 べ る	<p><人レベルでの支援></p> <p>②-1 青年海外協力隊について調べる</p> <p>②-2 NGOについて調べる</p> <p>P 64 ~ 65</p>	<p>○青年海外協力隊やNGOで活躍している人たちの様子や願いについて調べ、わかったこと考えたことを話し合う。</p>	<p>◆教科書以外にも、ケニアで活躍する青年海外協力隊員の古賀さんやNGOモヨ・チルドレンセンター責任者松下さんを挙げ、より関心をもたせる。</p>	<p>☆青年海外協力隊やNGOの具体的活動の様子、願いや苦勞、現地の人々の様子などについて知り、まとめている。</p>
	<p><国レベルでの支援></p> <p>③-1 国連について調べる</p> <p>③-2 ユニセフについて調べる</p> <p>P 66 ~ 67</p>	<p>○世界平和を守るための国際連合の組織や、国連の機関の一つであるユニセフの目的や活動について調べ、わかったことや考えたことを話し合う。</p>	<p>◆国際連合には、経済、社会、文化、環境、人権などの分野で10以上の機関が活動しており、ユニセフやユネスコなど、各機関の目的や活動に着目しておさえる。</p>	<p>☆教科書や資料集を活用して集めた情報をもとに、国際連合のさまざまな機関とその活動が世界平和と安全を守っていることを読み取りまとめている。</p>
	<p>④国際紛争と平和について調べる</p> <p>P 68 ~ 69</p>	<p>○世界で起こっている戦争や紛争による難民の増加、国際的なテロ、飢餓などの諸問題について調べ、平和な世界の実現に向けて、日本や世界の国々が果たすべき役割について考える。</p>	<p>◆緒方貞子さんの言葉から、金銭による援助だけでなく、人による技術を通じた援助も大切なことに気付かせる。</p>	<p>☆戦争や紛争、国際的なテロ、飢餓などの諸問題と解決に向けての努力について調べたことをもとに、日本や世界の国々の果たすべき役割をより広い視野から考え、適切に表現している。</p>
	<p>⑤環境問題について調べる</p> <p>P 70 ~ 71</p>	<p>○地球温暖化・熱帯雨林の減少、砂漠化、酸性雨、水や大気の汚れなどの地球環境の悪化を防ぐための、国連、各国政府、NGOなどの活動について調べる。</p>	<p>◆現在の環境問題について知り、解決のための活動や努力について調べさせる。これは他人事ではなく、自分たちの課題として環境問題を捉えさせる。</p>	<p>☆地球環境の悪化を防ぎ、持続可能な社会を実現するために、国連を中心とした様々な努力がなされていることを理解している。</p>
	<p>⑥世界の国々と日本との交流</p> <p>P 72 ~ 73</p>	<p>○政治や経済、文化やスポーツなど、世界の国々と日本との交流について調べる。</p> <p>○国旗や国歌について調べ、その国の成り立ちや国民の願いと深い関係があることを考える。</p>	<p>◆世界的に評価が高い日本の漫画をはじめ、サッカーのワールドカップやオリンピックなど、子どもたちに親しみやすい素材を活用して、国際交流について考えさせる。</p> <p>◆国旗や国歌が扱われる場面を想起させて、関心をもたせる。</p>	<p>☆世界平和への実現に向けて、文化やスポーツなどの国際交流が果たす役割をより広い視野から考え、互いに交流し理解し合うことの大切さを表現している。</p> <p>☆我が国や他国の国旗や国歌に関心を持ち、尊重しようとしている。</p>

	本時のタイトル	○主な学習活動	◆指導上の留意点	☆評価の規準
	⑦これからの世界、これからの日本 P 74	○世界の人々と手をつなぎ、平和な世界の実現に向けて、どのような努力が必要なのかを考える。	◆あつてはいちがいと、いけないちがいを考えさせ、差別や偏見なく交流することの大切さに気付かせる。	☆平和な世界を実現するためには、世界の人々や文化・伝統を大切にしながら、互いの理解と助け合いが大切であることを考えることができる。
まとめる・いかす	⑧わたしたちにできる国際協力を考えよう P 75	○小学生における国際協力の具体例を調べ、自分たちにできる国際協力について考え話し合う。	◆ <u>JICAのウェブコンテンツ「ぼくら地球調査隊」</u> を利用し、すぐできる国際協力について調べさせる。 http://www.jica.go.jp/kids/pages/index.html	☆平和な世界の実現に向けて、まず小学生の自分にできること、日本人の一人としてできること…と、将来に渡り考え続けようとしている。

5 本 時

(1) 平成 27 年 1 月 20 日 (火)

教科・単元 道徳 主題名 世界の中の日本「4-(8) 国際理解・親善」

資料「世界がもし 100 人の村だったら」

① ねらい

- 世界の中の日本人の置かれている立場を知る。
- 世界に目を向け、興味・関心をもつ。

② 本時の展開に当たって

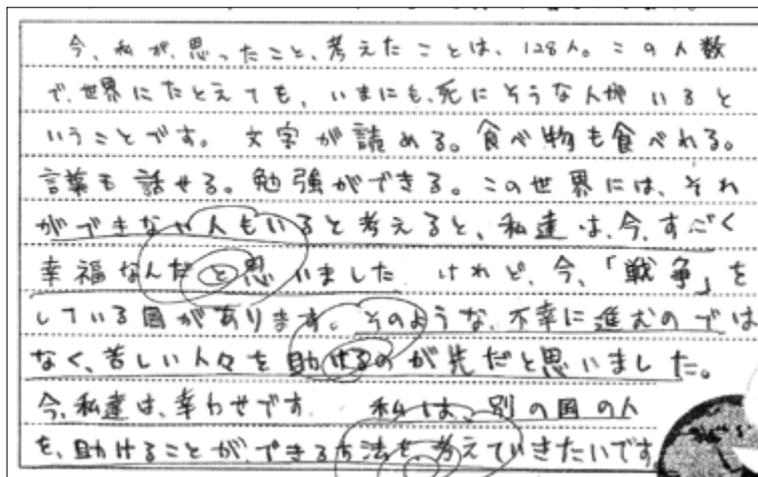
本時の指導では、「世界がもし 100 人の村だったら」のワークショップを行う。世界に 72 億人もの人がいる世界を 127 人に置き換えて考えさせ、世界の現状をより身近なものとして知るきっかけ作りをする。人口問題や食糧事情、教育などの諸問題を挙げながら、子どもたちそれぞれに様々な思いを抱いてもらう。それらの思いを取り上げながら、この後の社会科「世界の未来と日本の役割」の学習を通して更に詳しく世界事情を学ぶことを知り、世界に向けての自分の考えを深めていくことを伝えていく。

③ 実 際

過程	主 な 学 習 活 動	(分)	教師の具体的な手立て
導 入	1 アイスブレイキング 「行ったことのある国」と、「その国で一番すごい体験」の紹介を聞く。 2 世界には色々な国があることを感じ、世界の現状を見ていくことを知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">世界に目を向け、自分の世界を広げよう。</div>	5	○6年生の緊張を解すために、ケニアに行った体験を紹介し各担任の行ったことのある国も紹介する。その際に、その国が世界のどこに位置するか世界地図に印を付け、世界に目を向けさせる。

過程	主な学習活動	(分)	教師の具体的な手立て
展開	<p>3 世界の現状を知る。ワークショップ ①世界人口 ②男女比 ③高齢化か若年化か ④大陸ごとの人口と、食糧事情 ⑤識字率（教育）</p> <p>4 「世界がもし128人の村だったら」の範読を聞く。</p> <p>5 世界を128人に例えると、どんなことが分かるか、 どんなことを考えるか、どんなことを思うか…日本人としての思いを自由に表現し、発表する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <ul style="list-style-type: none"> ・日本は恵まれている。 ・今の私たちは幸せだ。 ・世の中に貧しい人はたくさんいる。 ・私たちにできることはないだろうか。 ・日本に生まれてよかった。 </div>	35	<p>○世界事情をより身近に感じさせるために、100人の村ワークショップを、6年生の人数128人の村にする。</p> <p>○各アクティビティは後に掲載。</p> <p>○世界に興味・関心をもたせることが目的なので、思いや考えは自由に抱かせる。子どもたちの意見は全て賞賛する。</p>
終末	<p>6 今後の学習の流れを知る。</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; width: 150px;"> <p>【道徳】 世界の現状を知り、今抱く思い・考え</p> </div> <div style="font-size: 2em; margin: 0 10px;">➡</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; width: 150px;"> <p>【社会】 より詳しい世界の現状を知る</p> </div> <div style="font-size: 2em; margin: 0 10px;">➡</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; width: 150px;"> <p>気持ちの変化 思い・考えを 深める</p> </div> </div> <p>7 視点を考える 世界で優位に立つ国・者が支援するのではなく、世界の仲間・友人、つまり同じ地球人としてどんなことができるかという視点で考えていくとよいことを知る。</p>	5	<p>○本時で学習した世界事情は一部であり、他にも様々な問題を抱えていることを知らせる。そこから思いや考えを深めていくことを学習のねらいとすることも伝える。地球人としての視点を持ち、学習に臨む姿勢をとらせる。</p>

④ <児童の感想>



③ 実 際

過程	主 な 学 習 活 動	(分)	教師の具体的な手立て
導 入	1 青年海外協力隊古賀さんの写真と、NGO モヨ・チルドレンセンターの松下さんの写真を見て、二人が何をしている人か想像する。 2 世界で活躍する青年海外協力隊や NGO について知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 青年海外協力隊や NGO は、どのような活動をし、どのような願いをもっているのだろうか。 </div>	7	○指導者がケニアで出会った協力隊や NGO で活躍している方々の写真を紹介する。 ○実態調査結果を用いて、わざわざ海外で国際協力をする目的や活動内容を調べていくことに目を向けさせる。
展 開	3 青年海外協力隊の活動について調べる。 JICA から借りた協力隊のパネルを、各班に配布し、それをもとに調べ学習を行う。 ・職種・派遣先・動機・願い 4 NGO の活動について知る。 ・松下さんの具体的な活動 ・松下さんの苦労や願い ・その他の団体の活動（教科書） ○世界の開発途上国への支援 ○後継者の不安 ○子どもたちを救いたい ○専門性を生かす 5 協力隊・NGO の活動の共通点を見出す。 <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> ・自分たちができることを生かす ・開発途上国の人々が、よりよく生きられるように ・それぞれの願いがある </div>	33	○職種を調べる活動は、指導者があらかじめ準備し、その職種が派遣内容としてあるかないかに分けるグループ学習にさせ、活動に意欲を持たせる。意外な職種も準備し、協力隊は、自分ができることで活動をしていることに気付かせる。 ○それぞれがどのような目的でどのような活動をしているかまとめやすくするように、協力隊や NGO の活動の共通点を見出させる。
終 末	6 協力隊・NGO がどのような目的でどのような活動をしているのかまとめる。 7 次時の学習を知る。	5	○本時の学習をまとめ、次時の予告をする。

今回は、急遽 JICA 鹿児島から、協力隊のパネルを貸していただけることになり、それを用いての授業を行ってみた。ケニアで活躍されている協力隊古賀さん、NGO 松下さん以外にも、鹿児島県出身の協力隊について調べることで、より深く調べ学習に取り組みさせることができた。

様々な開発途上国へ、鹿児島から協力隊が派遣されていることと、多くの NGO 団体が世界のために頑張っていることを調べられていた。また、子どもたちから出た考えは、世界で活躍する人々は「何かしてあげたい」という気持ちではなく、「自分が役に立っていないか」、「世界の平和のため」、「今できることをしたい」という願いをもって、国際協力を行っているというまとめができていた。



(3) 平成 27 年 3 月 4 日 (水)

教科・単元 社会 単元名 世界の未来と日本の役割

7/8 時間「これからの世界、これからの日本」

① ねらい

世界には多くの人々が、それぞれの文化や伝統を大切にしながら生活しており、平和な世界を実現するためには、お互いの理解と助け合いが大切であることを考え、表現する。

② 本時の展開に当たって

ケニアの写真から、日本との共通点と相違点を見つけ、「あっていい違い」と「あってはならない違い」について考えさせていく。そして、国や地域、家庭や個人にはそれぞれ違いがあって当然であり、世の中には様々な考え方があることに気付かせる。このような違いが生じる中で平和な世界を築き上げていくには、他者を理解し助け合っていくことの大切さに気付かせていく。

③ 実 際

過程	主 な 学 習 活 動	(分)	教師の具体的な手立て
導 入	1 前時の授業の感想から、今世界は平和なのかどうかを考える。 2 世界中人々が平和に生きるためには、人として大事なことは何なのか、考えていくことを知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 平和な世界を願う私たち人間にとって、大切なことは何だろうか。 </div>	8	○前時の学習から「世界中のみんなが平和に生きてほしい」という感想が出た。これを用いて、世界は平和ではないのかどうなのかを追求し、平和な世界にするために何が大事か考えていかせる。
展 開	3 ケニアの写真を見て、日本との共通点、相違点を見つける。それらから「あっていい違い」と「あってはならない違い」とに仲間分けしていく。(グループ活動) 4 「あっていい違い」と「あってはならない違い」がどういうもので分けられているのかを考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> あっていい違い… 身体的特徴・好み・文化・伝統 宗教・人種・食べ物・環境 あってはならない違い… 上の違いによる差別・偏見 不公平・不平等 </div>	27	○違いについては、より多くの意見を持たせるためにグループ活動にし、仲間分けをさせる際には、理由も考えさせる。 ○国や地域、家庭や個人の考えに違いがあることは当然であるが、侵してはならないものもあることに気付かせる。
終 末	6 「あっていい違い」がある世の中で、平和な世界を目指すには何が大切かを考えていく。 ・お互いの文化を大切にする。 ・相手を理解する。 ・差別や偏見をしない。 ・自分の主張をおしつけない 7 感想を書く。	10	○あってはならない違いについては、協力隊など国際協力で支援・援助できている。しかし、あっていい違いに着目させ、何が原因で平和な世界が作り出せないか要因を考えさせ、何が大切か考えさせていく。 ○本時の学習をまとめ、次時の予告をする。



④子どもたちの感想

世界には、文字が読めない人がいる。でも、それだけ
 ちは、文字を書き残す学校にいけないから、書くは
 みなが平等に生活(は)みなが学校にいてほしい
 です。人は人それぞれの価値感があるからそれを
 大切にしてほしいです。これから世界は仲良く
 平等になってほしいです。

世界には、決して豊かではない国もあります。
 一人ひとりにちがいはある。でも、それを價
 値感や人見で見るとは、絶対ちがいは
 ない。世界で悲しい事件が起きると、その
 思いが根づいているからこぼれこぼるもので
 世界の現状について知りたくはない。

この世界は、完全に平和ではありません。せめて、学校の外
 まで平和な世界にしたい。でも、それを平和
 としてくれるのは、国やNGOです。でも、それを平和
 としてくれるのは、改善されていく。地球にはいろいろな
 文化や人種がある。自分の個性を大切にする。平和
 を実現するために、自分から平和な世界を作りたい。

改めて、世界にはいろいろな文化や人種がある。でも、それを平和
 としてくれるのは、改善されていく。地球にはいろいろな
 文化や人種がある。自分の個性を大切にする。平和
 を実現するために、自分から平和な世界を作りたい。

成果と課題

今回、ケニアで学んできたことを子どもたちに還元できたことで、まず、教師の絶えず学ぶ姿勢の大切さを感じることができた。教科書で教えることよりも、実体験を通しての授業では説得力や影響力も大きい。だからこそ、今回実践授業をしてみて、ケニアで学んだことは伝えられたつもりでも、いざ終えてみると、まだまだ私自身も学ばなければならないことは多くあると痛感した。子どもたちに言い聞かせてきた「まずは知ること」ということを自分にも言い聞かせていきたいと思った。

実践授業後の子どもたちの感想の中に、将来の夢が「国境なき医師団に入り、医者として世界中の人々の病気を治したい」というものがあつた。授業を受けた子どもの中に、具体的な夢を持つことができた子がいたという喜びを感じつつ、自分が伝えること、教えることには責任をもたなければならない、そのためには私たち教員は学び続けなければならないことを、再確認することができた。

実践授業をすることで、自分の中に小さな自信がもてるようになったことは確かであるが、これで終わりではなく、今自分は国際理解教育を学ぶ姿勢の入り口に、一歩踏み出したということを感じている。基礎学力や体力、生活習慣など、子どもたちに付けさせたい力や習慣は多く、今教員が抱える課題は山ほどあるが、視野を広げて、この変化の激しい社会を生き抜く力を身に付けた人に育てるために、私たちは努めなければならない。知識だけでなく、スキル・態度を含んだ人間の全体的な資質・能力を身に付けさせなければならない。そのためにも、自分も更に視野を広げ、まずは一歩踏み出した国際理解教育を更に学び、子どもたちへ還元していきたい。

世界に目を向けよう

田上 康二
TANOUE KOJI

熊本市立武蔵中学校（熊本県）

担当教科：数学科

- 実践教科：総合的な学習の時間、学活、道徳
- 時間数：6時間
- 対象学年：2年生
- 対象人数：31名

カリキュラム

■実践の目的

- 他国の文化に触れその違いに気づくことで、他国の文化を認めるだけでなく自国の文化に誇りを持ち、世界の人々と共生して生きていこうという態度を養う。
- 他国の文化や国民性を理解することを通して、幸せや豊かさに価値基準に目を向け、日本や自分たちの生活や人間関係を見直す。
- 南北格差や環境問題の解決に向けて、国際協力のあり方や自分の行動について考える姿勢を身につける。
- 国際社会の中の日本や自分の役割を考え、国際協力に向けた資質や能力を身につける。
- 多文化との共生を考えることから、身近な共生へと目を向け、よりよい生活を考える姿勢を身につける。

生徒たちに事前に行ったアンケートでは、

- ・ケニアについて場所を知っているのは1人
- ・ケニアのイメージは、「動物」、「マサイ族」、「貧しい」
- ・ケニアと日本の関係は、「貿易している」「日本が募金している」
- ・外国に行ってみたいのは約半数
- ・発展途上国などで現地の人々のために働いてみたいは3分の1

という結果で、生徒たちが外国や支援などに興味は持っているが、正しい知識はほとんど持っていないということが分かる。

ケニアで出会った青年海外協力隊員の話では、小中学校時に授業や先生の話で国際協력에興味を持ったという隊員が多かった。特に将来について具体的に考えなければならない中学校時代に国際協力について学ぶことは大切なことであると考えます。

■ 授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【1時限】学活 テーマ：ケニアについて学ぼう ねらい：ケニアに興味を持つ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 担任の話、写真、現地の品物などを見せながら、話をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ パワーポイント資料 ・ ケニアで購入した品物 ・ ケニアで撮影した写真 ・ ワークシート
【2時限】学活 テーマ：世界に目を向けよう ねらい：異文化に興味を持ち、文化の多様性や自分の偏見に気づかせる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研修で撮ってきた写真や、「地球の食卓」の写真を利用したフォトランゲージを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ パワーポイント資料 ・ 写真シート ・ ワークシート
【3・4時限】 総合的な学習の時間 テーマ：貿易ゲームをしよう ねらい：世界経済の簡単な仕組み、それによって起こる問題を学び、その問題を解決する方法を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒を先進国や開発途上国など複数の班（国）に分け、資源（紙）を技術（はさみなど）を利用して製品（円形の紙など）を生産する貿易疑似体験ゲームを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ パワーポイント資料 ・ 貿易ゲームセット ・ ワークシート
【5時限】総合的な学習の時間 テーマ：世界で活躍する人々に学ぶ ねらい：海外で実際に国際協力を行っている人の姿を通して、今あるいは将来に自分にできる国際協力について考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研修で出会った青年海外協力隊の方などの姿や活動の様子を伝える。 ・ JICA の活動について伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ パワーポイント資料 ・ ワークシート
【6時限】道徳 テーマ：「気高く生きる」 ねらい：逆境の中でも志高く、胸を張って生きていく姿勢のすばらしさを考える。	「風に立つライオン（さだまさし）」を題材に、曲を聴き、歌詞を元に、主人公の気持ちについて考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「風に立つライオン」の曲、映画の予告 ・ ワークシート

授業の詳細

【1 時限目】ケニアについて学ぼう（学活）

ケニアについて紹介する上で、特に、

- ・文化の違いを見下さないようにすること。
- ・ケニアにもいろいろな問題はあるが、幸せそうにしていること。
- ・日本との関連がとても深いこと

を意識できるように話を進めた。

まずはお土産の硬貨を配り、硬貨に大統領の顔が描かれているところからケニアの歴史を簡単に説明した。その後、研修で撮った写真や、買って来た品物を見せながら、体験してきたことを話した。生徒たちは、ケニアの学校の様子、生活の様子など興味を持って聞いていた。日本車が多数走っている風景や日本との共同開発のヌードル、日本人が現地で会社を作っているコーヒーなどを見て、日本との関連性が大きいことに驚いていた。また、都会的な街並みや、高地の寒そうな様子にアフリカのイメージをかなり覆されたようである。

(使用した写真の一部や見せた品物)



【2 時限目】「世界に目を向けよう」（学活）

興味を持つだけでなく、文化の多様性や自分の偏見に気づき、異文化を尊重する態度を育成するために、フォトランゲージを活用した。まずは、「地球の食卓」を利用して、家や家族、食べ物などわかりやすい対象での違いに目を向けさせた。その後、研修で撮ってきた写真等を利用して、日本とケニアの生活、文化の違いについて考え、その違いを「あっていい違い」「なくした方がいい違い」に分類し、「なくした方がいい違い」については、どのようにしたら解消されるのか考え、国際協力への意識付けを行った。

生徒たちは写真からいろいろなことを想像し、お互いの意見を聞きながら、他の生徒のいろいろな見方を聞いて、十分に価値観の違いや自分の固定観念に気づいたりすることができたようで

あるが、それを国際協力に結びつけるのは難しかったようである。

(1) 本時の目標

- 写真をじっくりと観察し、感じ、読み解く活動を通して、
- ・異文化に興味を持ち、身近なものとして感じられるようにする。
 - ・自分にはない価値観・視点を学んだ、自分の固定観念・偏見などに気付かせる。
 - ・異文化間の「あっていい違い」について考え、異文化を尊重する意味を知る。
 - ・異文化間の「なくした方がいい違い」について考え、人権の意味を知る。

(2) 本時の展開

過程	学習活動	主な発問・指示(○)と予想される生徒の反応(・)	教師の支援(*)と評価(◎)	備考
導入 5分	アイスブレイク 国あてクイズ 写真を見て国をあてる。	○写真を見て、国を当てて下さい。 ・韓国 ・中国 ・アメリカ など	* 国の名前を考えることにより、世界的な視点を呼び覚ます。 * あえてステレオタイプな分かりやすい写真にする。 ◎ 異文化に関心を持ち、積極的に学ぼうとしているか。	プロジェクター
展開 40分	写真を見て、気付いたことを出し合ひましょう。			プロジェクター
	フォトランゲージ1 写真から読み取れることを出し合う。 「地球の食卓」		* 全体で一度練習する * 以下のルールを守らせる ① 自由な発想を大切に。 ② 人の意見を否定しない。 ③ 質より量で。 * 異文化を下に見るのではなく、文化の違いとして認識できるようにアドバイスをする。	写真シート① 付箋
	フォトランゲージ2 写真を見て日本の文化との違いを考える。	○今度は自分たちの生活との違いに注目して写真を見て、付箋に書いて貼りましょう。	* 日本との違いで、人権や自由、命に関わる問題が見えるような写真を用意する。	写真シート②

過程	学習活動	主な発問・指示(○)と 予想される生徒の反応(・)	教師の支援(*)と評価(◎)	備考
	違いを「あっていい違い」と「なくした方がいい違い」にわけよう 各班から考えたことを発表する。	○見つけた違いを「あっていい違い」と「なくした方がいい違い」に分けてみましょう。 ○各班からどんな意見がでたか発表しましょう。短冊に書いて黒板に貼って下さい。	*どっちかではなく、アナログ的にその中間も用意して、柔軟に判断できるようにする。 *黒板に数直線を用意し、違いを貼らせることで、皆の考えが見えやすいようにする。 *「あっていい違い」は嗜好や文化の違いなど、「なくした方がいい違い」は生命や自由に関する不平等であることをおさえる。	違い短冊
まとめ 5分	今日の学習をふりかえる。	○今日の学習をふり返って、感じたこと、思ったことなどをまとめましょう。 ○気づきを発表しましょう。	○「なくした方が良い違い」をなくす取り組みが国際協力であることを確認する。 ◎自分の固定観念や偏見に気付くことができたか。	ワークシート

(授業の様子)



【3・4 時限目】「貿易ゲーム」(総合的な学習の時間)

世界経済の簡単な仕組み、それによって起こる問題を学び、その問題を解決する方法を考えるために、貿易ゲームを行った。

生徒たちは4人1組でチームを作り、製品の生産に取り組んだ。最初は与えられた物品の違いに戸惑い不公平感を訴えながらの生産活動であったが、しばらくすると、他国との交渉を思いついた班が動き出し、資源がない先進国と道具がない後進国との間でトレードが始まり、各班とも最初より効率よく生産が行われるようになってきた。途中、新しい資源(色紙)や新しい技術(カッターとマット)の発見、買い取り価格の変動などのイベントも投入し逆転劇もありつつ、生徒たちが楽しみながらゲームは終了した。

後述の感想の通り、国同士が協力することの大切さや、援助の重要性などについて十分と考えることができた授業となった。

(授業の様子)



(生徒の感想)

- ・ お互いのコミュニケーション、交渉、かけひき、協力などを学んだ。
- ・ いろいろな班と共有しあえてうれしかった。国同士も共有し合えたらいいなと思った。
- ・ 決断力の大切さを学んだ。自信を持って決断できるようになりたい。
- ・ チーム内の協力やチーム同士の協力の大切さをよく知ることができた。
- ・ 交渉するとこの難しさや大切さを学んだ。
- ・ 資源の大切さを学んだ。日本には資源がないので、この先外国と協力していかなければ困るだろうなと思った。
- ・ 発展途上国に技術を援助する大切さがわかった。

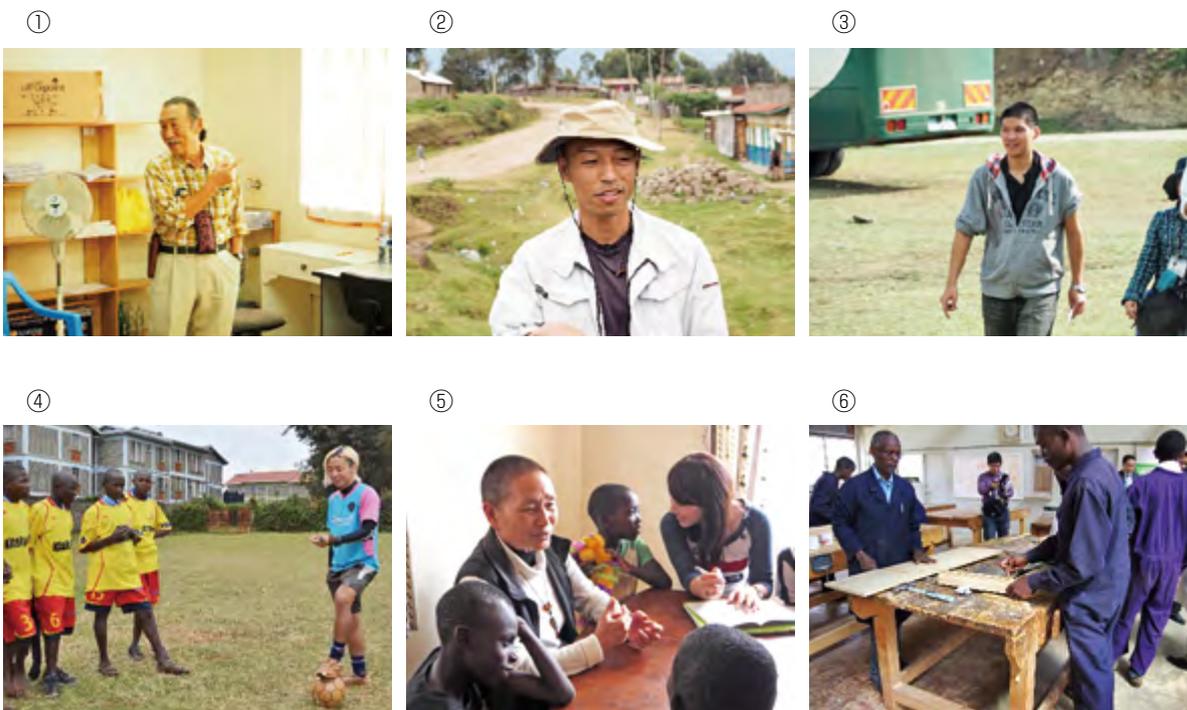
【5 時限目】「世界で活躍する人々に学ぶ」(総合的な学習の時間)

研修で出会った青年海外協力隊の方などについて、写真を見せながら活動について話をした。併せて、活動の内容だけでなく、どのような気持ち・経緯で支援を行ったかの説明も行った。有名な人でなくとも、世界で地道に活動する姿や日本での仕事や快適な生活をなげうってでも活動する姿には、かなり感心したようである。

最後に、JICAの活動全般について説明を行った。

- ① ビタで熱帯感染症の研究・対策を行っている嶋田雅暁教授
- ② ナクル国立公園で環境教育を行っている堺田真隆隊員
- ③ エンジニアで村の開発援助をしている永瀬光隊員
- ④ ゲタスル厚生学校でサッカーを通して社会復帰を支援する古賀仁智隊員

- ⑤ モヨ・チルドレン・センターを設立して貧しい子どもたちなどの支援をしている松下照美さん
- ⑥ ジョモ・ケニヤッタ農工大学での JICA の支援



【6 時限目】「風に立つライオン」（道徳）

さだまさしさんの曲「風に立つライオン」を通して、逆境の中でも志高く、胸を張って生きていく姿勢のすばらしさを考える活動を行った。ちょうど映画の公開に近いこともあり、さだまさしさんや曲のモデルの柴田医師が曲の舞台であるナクルで前述の境田隊員の元へ訪れるという番組があったので、それを紹介し、自分の研修と大きく関連付けながら授業を行うことができた。

成果と課題

- ・ 外国に対する生徒たちの心のハードルを下げ、持っていたケニアについての認識は十分に改善することができた。可能であれば、事前に生徒に知りたいことを聞いておいて現地で調べてくるような活動をするのもいいと思われる。
- ・ どのような国際協力が行われているかの知識、国際協力についての意識を高めることができたが、今あるいは今後、自分たちにどのような活動ができるのかまでを具体的に検討する機会を設けることができなかった。学校でフェアトレードについての講演会があったりもしたので、関連した取り組みを行うことができればよかった。
- ・ ケニアの人々の暮らしについてはかなり伝えることができた。しかし、ケニアの人々の生き方を通して何が幸せなのかを考え、自分の生き方について考える場を設けたかったが時間の都合上できなかった。ケニアの人々の、金銭的に豊かではなくとも、病気などの危険と隣り合わせでも、家族で幸せそうにしている姿を伝えていきたい。

- ・ 総じて、決められているカリキュラムの中、行き当たりばったりで時間を捻出していたために、計画的に取り組むことができなかった。そのため、出前講座等を利用して実際に活動した方の話を聞く場を設けたりなどできなかった。事前のしっかりした計画が必要であるので、早めの見通しをもって行っていきたい。
- ・ これで活動を終わらずに、他の参加者と交流したり自主研修をしたりしながら、今後も国際理解教育に取り組んでいきたい。

参考資料・教材など

- 地球家族シリーズ「地球の食卓」TOTO 出版
- 貿易ゲームの参考にしたサイト
 - <http://www.jca.apc.org/unicefclub/unitopia/1999/boueki.htm>
 - <http://www.interq.or.jp/www-user/hanatyan/yes/tradegame.html>
 - http://management.main.jp/boueki_game.pdf
- 「風に立つライオン」作詞作曲：さだまさし
- 「風に立つライオン さだまさし・大沢たかお ケニア 命と自然の旅」NHK
- 教師海外研修の仲間たちの写真
- 教師海外研修の先輩方のレポート

